

# 地域における3R社会の未来

(地球環境保全のための3R推進フォーラム実施報告書)

公益社団法人

大阪府産業廃棄物協会



# 地球環境保全のための 3R推進フォーラムについて ～第3回開会の挨拶から～

このフォーラムは、持続可能な「循環型社会の形成」や「地球環境の保全」といった公益の増進を図る環境教育の一環として、本会が公益社団法人に移行した平成25年度から3回シリーズで毎年実施してきた事業です。「地域における3R社会の未来」というテーマのもと、第1回では「行政機関の取組み」に焦点を当て、第2回では「企業の取組み」に焦点を当て、第3回では「市民の取組みや価値観」に焦点を当て議論を進めてきました。

現在、わが国は「人口減」の一途を辿っており、「生産工場の海外移転」や「国内経済の停滞」もあって、廃棄物の発生量が減少する傾向にあります。国による3R施策の推進も踏まえると、今後、この傾向が「大幅な増加」に転じることは考えにくく、本会としては「廃棄物処理のあり方」そのものについて抜本的な見直しを図り、世の中に示していくべき時代が到来しているものと確信しています。

そのような経緯のなか、目下、産業廃棄物処理業界は「単に廃棄物を適正に処理するだけの存在」から脱却し、

- ①循環資源を供給する主体となること
- ②廃棄物由来のエネルギーを供給する主体となること
- ③廃棄物を利活用した食料生産・提供を行う主体となること
- ④災害時の復旧・復興や他の行政サービスを支援する主体となること

など、「地域に根ざした複合的なインフラ」として社会に組み込まれていく可能性を模索し始めているところです。

これは、従来の廃棄物処理業が「総合環境事業」として発展・拡充するという表層的な現象のみにとどまらず、地域ごとの社会システムや人々の価値観が大きく変革すること（イノベーション）を意味します。私たちは、もはや「ごみ問題」を「循環型社会」の枠組みのなかだけで捉えるのではなく、「安全が確保される社会」を基盤としながら、「低炭素社会」や「自然共生社会」も併せ、これらを統合的に達成していく社会を目指さなければならないのです。

このフォーラムや本書の内容を通じて、「ごみ問題」が「地球温暖化」、「自然保護」、さらには「人々が安心して暮らせる生活」と決して無関係なものではなく、密接に関係しているのだということを理解していただければ幸いです。そして、そのような考えが、もっと、もっと多くの人々に受け入れられていくことになれば、私たちは、これまでとは異なる別の「豊かさ」を享受することになるでしょう。そういう時代が訪れることを願って本書の緒言といたします。

公益社団法人大阪府産業廃棄物協会 会長  
(地球環境保全のための3R推進フォーラム事業責任者)

片  
淵  
昭  
人

## 本フォーラムの目的

- ・公益社団法人として、広く一般の方々（一般市民）に対して産業廃棄物の適正な処理や不法投棄の防止が地球環境保全のために重要であることを認知していただく。
- ・企業関係者に対して、法的事項を超えて産業廃棄物処理に積極的に関与していくことがCSRの一環として必要なことを認識していただく。
- ・地球環境保全に向けた循環型社会の形成には、より広いステークホルダーの積極的な関与が必要であることを認識していただく。

### 事業展開の趣旨

ポイント  
1

産業廃棄物処理業を「社会テーマ」として位置づけ、社会に認められるようステージアップ。

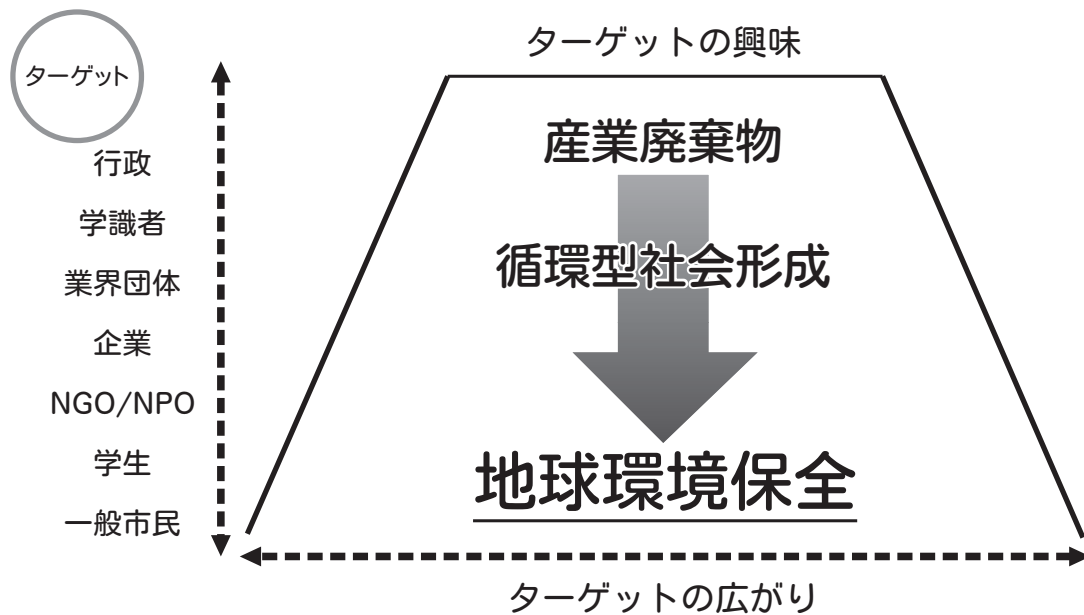
ポイント  
2

本会が推進する「3R」を基本骨子に組み込んだ展開。  
身近な問題として分かりやすく紹介することで、生活者（一般市民）へのより一層の普及啓発に繋げる。

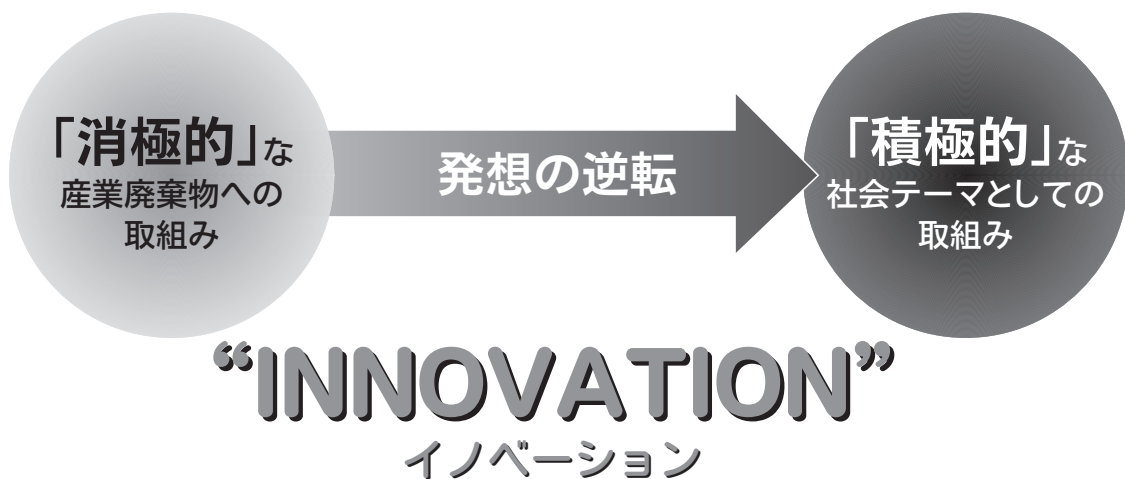
ポイント  
3

単年度事業としてではなく、年1回、3年（3回）の実施により目標達成できるテーマを設定。  
ただし、1回限りの参加であっても満足いただける内容を設定。

本フォーラムを通じて下図のようなイメージで幅広く多くの人に地球環境保全に関心を持っていただくようアプローチ。



公益社団法人として、業界団体にとどまっていた産業廃棄物に関するテーマをより広く一般的なテーマとして理解・認識していただく。



イノベーション（INNOVATION）とは物事の「新結合」「新機軸」「新しい切り口」「新しい捉え方」「新しい活用法」（を創造する行為）のこと。一般には新しい技術の発明と誤解されているが、それだけでなく新しいアイデアから社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらす自発的な人・組織・社会の幅広い変革を意味する。つまり、それまでのモノ・仕組みなどに対して全く新しい技術や考え方を取り入れて新たな価値を生み出して社会的に大きな変化を起こすことを指す。



## 3年間で達成すべき目標

社会共通資本としての産業廃棄物処理業の高度化を生み出すイノベーションを社会テーマ化する。

<フォーラムタイトル>

## 地球環境保全のための3R推進フォーラム

2013  
年度

<テーマ>

### 地域における社会イノベーションと地域に根ざした企業の社会的責任

「行政」（大阪）が進む方向と未来像、そして、そこで企業に求められる地域に根ざした社会的責任について考えてみる。

※産業競争力、雇用確保、資源リスクの観点から関西圏域内で閉じた高度な循環型社会構築の重要性を指摘する。

2014  
年度

<テーマ>

### 企業における社会との関係性にかかわるイノベーション

「企業」セクターと、地域社会との関係性はますます重要になってくる。従来のCSRを越えた、これからの関係性について考えてみる。

※地域社会のために、企業、行政、処理業者が連携して、高度な循環型社会システム構築の重要性を指摘する。

2015  
年度

<テーマ>

### 企業とNPOによる社会と企業の関係性を見守るイノベーション

「市民」セクターが、企業が自ら住まう地域社会に根ざしたCSRを戦略的に行っているかを、いかに見守るかについて考えてみる。

※高度な循環型社会システムを構築するために、企業、行政、処理業者が連携することを、後押しする評価の重要性を指摘する。

第1回  
地球環境保全のための

# 3R推進 フォーラム

～地域における3R社会の未来～



未来の地球環境を考える。



開催日時：平成25年12月6日(金) 13時30分～16時30分

開催場所：阪急うめだホール(阪急百貨店うめだ本店9階)

当日来場者数：325名

■主催 公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会

■後援 近畿地方環境事務所／大阪府／大阪市／堺市／豊中市／高槻市／東大阪市  
大阪湾広域臨海環境整備センター／日本環境安全事業株式会社大阪事業所

プログラム：開会挨拶 國中 賢吉(公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会 会長)

第1部 基調講演

### 『産廃行政は“三方よし”で』

北川 正恭氏(早稲田大学 公共経営大学院 教授)

第2部 パネルディスカッション

### 『地域における3R推進への道筋』

〈パネリスト〉

北川 正恭氏(早稲田大学 公共経営大学院 教授)

小川 雅由氏(NPO法人 こども環境活動支援協会 事務局長)

臼杵ひろみ氏(株式会社ファンケル CSR推進事務局 事務局長)

〈コーディネーター〉

原田 知恵氏(フリーアナウンサー)

閉会挨拶 片渕 昭人(公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会 副会長)

## PROFILE



### 北川 正恭 氏(きたがわ・まさやす)

早稲田大学 公共経営大学院 教授

1967年早稲田大学第一商学部卒業。1972年三重県議会議員当選(3期連続)、1983年衆議院議員当選(4期連続)。1995年、三重県知事当選(2期連続)。「生活者起点」を掲げ、ゼロベースで事業を評価し、改革を進める「事業評価システム」や情報公開を積極的に進め、地方分権の旗手として活動。達成目標、手段、財源を住民に約束する「マニフェスト」を提言。2期務め、2003年4月に退任。現在、早稲田大学大学院公共経営研究科教授、「新しい日本をつくる国民会議」(21世紀臨調)代表。平成20年3月「地域・生活者起点で日本を洗濯(選択)する国民連合(略称：せんたく)代表(2009年9月活動終了)。平成21年地域主権戦略会議構成員。



### 小川 雅由 氏(おがわ・まさよし)

NPO法人 こども環境活動支援協会 事務局長

1983年、西宮市役所環境局に配属。「こども環境活動支援協会(LEAF)」の発足に携わる。2003年には、西宮市環境都市推進グループ課長着任、環境都市宣言を受け、新環境計画の策定、環境基本条例などの制定を行い、2005年、市民・事業者・行政の協働による環境まちづくり組織「西宮市環境計画推進パートナーシップ会議」「環境計画評価会議」「エココミュニティ会議(中学校区を基本単位)」などの組織づくりを行う。2007年4月、NPO法人こども環境活動支援協会事務局長就任。現在は、国内だけではなく海外にも積極的に活動の場を広げて環境問題に取り組んでいる。



### 臼杵ひろみ 氏(うすき・ひろみ)

株式会社ファンケル CSR推進事務局 事務局長

筑波大学大学院 経営システム科学卒業(経営学修士)。  
2001年大手百貨店より株式会社ファンケルに入社。  
経営企画、関連会社管理の業務を経て、2008年より、環境、企業文化等CSR業務に携わる。



## パネルディスカッション 『地域における3R推進への道筋』

【司会】皆様、お待たせいたしました。ただいまからパネルディスカッションを始めさせていただきます。

それでは、パネリストの皆様をご紹介します。

先ほどご講演いただきました北川正恭さん。(拍手)

NPO法人こども環境活動支援協会事務局長、小川雅由さん。(拍手)

株式会社ファンケルCSR推進事務局事務局長、臼杵ひろみさんです。(拍手)

なお、本日パネリストをお願いしておりました田中正敏さんは、事情によりご出演いただけなくなりました。皆様、どうぞご了承くださいませ。

そして、コーディネーターは、私、原田が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。(拍手)

それでは、これより、パネルディスカッション形式で皆様と議論を深めてまいりたいと思います。

ディスカッションのテーマは、「地域における3R推進への道筋」です。

ここで、パネリストの皆さんの自己紹介を兼ねて、日ごろどういったお仕事や活動をされているのか、お話しいただきたいと思います。

まず、小川さん、お願いします。

【小川】皆さん、こんにちは。今紹介いただきましたこども環境活動支援協会の事務局長の小川と言います。事務所は兵庫県の西宮市にあります。この大阪の地で兵庫県の団体がお話するというのは、何かちょっと変かなと思ったりもしたんですけども、もともと生まれが大阪の鶴橋ですので、この地元のいろんな問題をご一緒に考えさせていただくというのは非常にありがたいと思っております。

私たちの協会は、平成10年に西宮市役所が呼びかけ人となって、市民と事業者と行政が連携して、未来、次の時代を担う子供たちの環境教育、それから持続可能な社会づくりをどうするかということで設立した団体でございます。私は設立時より西宮市役所で環境の担当者として関わり、8年前に環境都市推進グループというところの課長をさせていただいたことを最後に市役所は早期退職をして、今現在、この協会では働いております。

私たちの協会、西宮市が呼びかけ人となったということもあって、コープこうべさん、それから地域

の商工会議所の方々にはかなりご支援をいただいて設立しております。そういったことから、西宮地域における子供たちの環境教育の仕組みをどうつくるかということもありますが、企業の方々との連携をして、どういうふうにご子供たちに社会の仕組みを学ばせるのかということを中心に重点を置いて取り組んできました。

当初は80社ぐらい企業がありましたが、今は66社になりました。廃棄物の関係の処理業者さんが最初たくさん入っていただきまして、まず最初にやったのは、廃棄物の処理業者の方々は今どういう状況にあるかということをお聞きしました。それから、瓶のメーカー、紙のメーカー、油や鉄・金属関係、布などのメーカー、それから一般廃棄物、そういった方々からも現状をいろいろ聞きました。そうすると、皆さん一様に困っておられました。何でや。ごみが、資源が集まり過ぎる。そうすると、安くたたかれてしまう。こんなんやったら回っていかない。何でそんなことになったんか。

行政は、住民には補助金をおろしてどんどん資源ごみを集めさせるのに、業者のほうには何も手当てが行われない、集めっぱなしでほったらかしの状態、「えーっ」と思いました。そのとき、私、市役所の職員でしたからそういう仕組みがわからなかった。ですから、製造の関係の方々企業さんにも入っていただいて、またいろいろ考えていきました。

そういったことをしながら、西宮では企業の方にどういうふうにして地域の子供の環境教育にかかわっていただけるか。また、西宮は山、川、海がある自然豊かな町ですので、この自然体験を通じて子供たちにいろんな力をつけてもらいたい。そして、あと1つが日本の子供たちが海外の子供たちともいろんな交流をできるようにしたいという三本柱で始めました。今現在は、国際協力機構（JICA）さんのお仕事でアジアの諸国の方、それから中南米の方々、あと大洋州、オセアニアの島の方々の行政間対象の廃棄物の研修をやらせていただいております。ここにもまた企業の方々のご支援をいっぱいいただきまして、今、子供の環境教育から持続可能な社会づくりに向けて企業と行政と市民、どんなことができるか、こういったことを取り組んでいる団体です。

今日皆さんのほうに、「LEAF」という私たちの機関誌をお手元に配らせていただいています。これはJICAの研修で廃棄物の研修をやったときに、講師の方々にしゃべっていただいた内容をまとめたものです。またよろしければご覧いただけたらと思います。

最初の自己紹介は以上でございます。よろしくお願いいたします。

**【司会】**ありがとうございます。

では、続いてお隣の臼杵さん、お願いします。

**【臼杵】**初めまして。株式会社ファンケルから参りました臼杵と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、私のほうからは会社の概要と、私が行っている業務についてのご説明をいたします。

株式会社ファンケルは、横浜の会社です。約33年前に横浜で創業いたしました化粧品と健康食品をつくって売っている会社です。会社の経営理念は、「もっと何かできるはず」という、非常にわかりやすく、インパクトの強い経営理念ですが、もともとベンチャー企業として、お客様のためにもっともって何かできるんじゃないかというチャレンジ精神をうたった理念となっております。

具体的な事業活動は、1つは無添加化粧品です。こちらの化粧品には防腐剤とか香料とか、一切入っておりません。特徴的なのは製造年月日が入っておりますので、つくってからあけてなくても1年で使っていただきたい化粧品です。洗顔パウダーは、今すごくコマースで流れております。もう1つは、サプリメントと発芽玄米、青汁です。サプリメントは昔は、高く、マルチ商法みたいで、ちょっと疑わしいような商品でしたが、今は皆さんが手軽に買うことができます。そういったきっかけをつくったのがファンケルです。そのほか、99年に発芽玄米、2000年に青汁の事業を始めました。そして自分たちでつくって、自分たちで売っています。販売チャンネルのメインは通信販売で、具体的にはカタログ、インターネットです。そのほか、直営店舗が全国で172店舗あります。こちらの阪急百貨店の2階にもファンケルショップがございますので、ぜひお帰りにお立ち寄りいただければと思います。

さらに、昨今はやっておりますスーパーマーケットやコンビニのプライベートブランドでメーカー機能としてそれぞれのお店のロゴマークをつけた商品を卸しております。さらに海外でも中国を中心に展開しております。

私は、CSR推進事務局という組織に属しております。CSRは、先ほど先生が説明していただきました

ように、Corporate Social Responsibility、企業の社会的責任の略語ですが、CSRのルールは、ISOとか国連とか、あるいはGRIとか、いろいろな基準がございます。ファンケルはこのISOと国連の基準に沿って活動しております。

具体的に言いますと、組織統治（コーポレートガバナンス）、人権、労働慣行、環境、公正な事業取引、消費者課題、コミュニティ参画と発展といった、テーマがあり、それぞれの配下に課題が与えられています。それぞれの課題を解決し、社会的責任を果たしていくため、我々の組織は業務を行っています。昨今は、特に廃棄物関係の環境の法律が非常に厳しくなっておりますので、注力して推進しているところです。

以上です。

**【司会】**ありがとうございました。

そして、北川さんにもパネリストとしてお入りいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、本題に入ります。今日は2つのテーマに沿ってディスカッションを進めてまいります。

まず最初のテーマが、こちらです。地域に根ざした3Rの取り組みと現状ということで、「三方よし」といって、そう簡単にはいかないということと、いろいろな問題が立ちだかっていることと、その理由と解決策を考えていきたいと思いますが、まず、パネリストの皆様のそれぞれの取り組み事例をご紹介いただきたいと思います。

小川さんからお願いします。

**【小川】**先ほど自己紹介の中でお話ししましたが、私たちの協会を立ち上げる時、私は市の職員で、いろんな企業を回りました。大体150社ぐらい回らせていただいて、会員になっていただくお話をしたんですが、そのときに一番、私自身が学んだことは何かといいますと、いろいろな企業、清酒メーカーや銀行、事務用品メーカーなどさまざまな製造業などいろいろいらっしゃいますが、皆さん、ほんとうに環境に関する取り組みというのを一生懸命されているということでした。

ただ残念だったのは、会社に取り組んでいる環境への取り組みというのが社内に向かって活動されていて、社外に向かって発信されていませんでした。

それと、それぞれの企業はそれぞれ頑張っているのに、企業同士の横のつながりというのがあまり見えませんでした。この2つのポイントというのは私たちの協会が企業とおつき合いです上でとても大事なポイントではないかということを感じました。

協会をつくって、いろんな企業の方に集まっていただいて、先ほど言いましたように、まず最初は静脈の一番下流のところの話を聞きました。次に製造業の話を聞きました。

まず、文具メーカーの方々に集まっていただいて考えたんです。なぜかという、子供が一番使うのは文具です。この文具にもエコ商品というのが少しずつ出始めました。けれども、このエコ商品の中のリサイクル系のは各メーカーによっても対応がばらばらです。全部エコ商品にかえているところもあれば、一部バージンのものを使う、一部リサイクルのものを使うというふうにはばらつきがありました。

それは、先ほど言ったように、リサイクルそのものがちゃんと社会の中で回っていない。また、それを販売している量販店、小売店の方も、そういう商品が出回っていることと自分たちが会社で行っているISO14001の取り組みとかもつながっていない。

こういうつながりをどうしたら見えるようにできるのかなということから、2003年に環境省から助成金をいただきまして、今、お話ししたような関係の業者さん30社に集まっていただいて、衣類と食と住とエネルギーと瓶、これは、西宮は酒のまちですから瓶、それから文具という6つの分科会で循環型の社会を子供たちに考えてもらうためのプログラムづくりをやっていただきました。企業の方は、今まで単発で学校に説明に行ったりとかというのはあったんですが、そういう関係者が全部集まってプログラムをつくるというのは過去なかったんですね。そういったことを西宮市の行政、それから教育委員会、経団連の方にも入っていただいて、プログラム、システムを作って世の中に出していったんです。

これはNPOと企業のパートナーシップ大賞というのをいただきました。こういう事例をやることで少しずつ子供たちに伝えていかなければならないものというのは、行政が環境を守りましょうというような大きなテーゼから来る運動ではなくて、実際の社会を支えている方々に、やっぱり現実を子供たちに見せて、消費者である子供たちがどういう生き方をすべきかということを考えてもらう。こういうことがとても大事だということを感じて、その中には当然リサイクル、リユース、リデュースといういろんな考え方も入れてやりますけれども、基本的には循環型社会というのは何かということを学ばせていただきました。

あともう1つは、地域でエココミュニティー会議というのをつくって、市民の方たちにごみ減量に取り組んでいただきました。ごみ減量をどうしたら見

える化できるかということで、西宮の一般廃棄物の収集業者さん、リリーフさんというところをお願いしまして、ちょうど事業系のごみを計量器つきパッカー車で回収されており、収集した段階でごみの重さがわかると。それを西宮地区のステーションをずっと回りながら、ごみの重量を記録で残しながら、地域の人にごみを見てもらいながら減量運動をやらせようということをやったんですね。これは11%ごみを減らすことができて、数字で見せるということを一家庭ごみの段階でやることができました。このとき行政は入っていません。行政がやったのは人口統計を出していただけです。これも大事な仕事なんですけれども、でも、我々はそのときにわかりました。地域の方、それからパッカー車をつくらせている会社、それからごみを収集する人たち、行政、こういったものがどう連携すると実際に大きなお金をかけたりとか、行政が前面に出なくても地域が動くかということがわかったんです。ところが、その運動をやめるとまたごみが増えてきます。住民心理ですね。

でも、こういったことを1つきっかけにして、3R、特にリデュースの活動をどうしたらいいかということをおこなって活動で行ってきております。

【司会】ありがとうございます。

北川さん、小川さんの取り組みを伺って、いかがでしょうか。

【北川】市役所はどちらかということ、今まで一方的にやってやるとか、そういうことだったと思うんですけども、民間の方を交えてみんなでやろうという、そういう雰囲気は非常にいいと私、今感心しながら聞いていたんですね。製造業の関係の皆さんは、意識がどのように途中で変わっていったかというようなことも具体的に触れていただければうれしいですね。

【小川】まず、さっき言いました子どもの環境学習の取り組みの中に製造業の方も入ってやっていただいたときに、こんな集まりは初めてだとおっしゃってました。これは製造業の方もそうだし、運搬・収集されている方もそうだし、販売されている方々も、処理されている方々も、一堂に集まってこんな議論をしたことは初めてだ。要は自分たちが1つにこうやってつながっているということがわかったということです。ですから、今までは製造したら廃棄物は業者さんに投げると、やってもらうというだけやったけど、社会全体の仕組みで考えたら、自分たちが出したらこういう流れの中で、最後また自分たちに返ってくると。またそういうふうな意識と構造にしないとだめなんだということ、皆さんが自分



で子供向けのプログラムをつくるプロセスでどの業界でも感じていただいたと思っています。ただ、それが実際の経営とか社会の産業の構造にすぐに生かされたかという、そこまで行ってはないと思いますが、そういうきっかけはつくれたかなと思っています。

**【北川】** 今、こんなことは初めてだと製造業の方が言われた。そういうことだと思うんですね。私も今まで行政はこんなものだ、市役所の職員が思い込んでいるんですね。だから、予算分配業と許認可受付業で、言うこと聞かんやつはいじめたれと、こういう感じから脱却してまちへ出てほしいんですね。一緒に一遍やってみたら、市役所もなかなかやるじゃないかと。製造業もつくって利益ばかり考えているんじゃないしに、こういうことで世の中は回っているんだねというのを、そういうのを地域でつくってほしいなと思います。そんなことを期待します。

**【司会】** ありがとうございます。

では、臼杵さんのほうから取組事例をご紹介ください。

**【臼杵】** まず、3Rのリサイクルについてご説明します。

先ほどご説明の中で、事業の中で青汁事業をやっていますということをお知らせしましたが、こちらが青汁事業のリサイクルの事例です。青汁は愛媛県の伊予市というところでつくっております。ポンジュースで有名な地域です。この青汁の原料はケールというキャベツ科の野菜で、青汁を飲むと花粉症になりにくいとか、青汁を飲むと風邪をひきにくいなど、非常に栄養価が高い野菜ジュースです。実は青汁をつくると大量の産業廃棄物、ケールの搾りかすが出て青汁事業の収益を圧迫するという大きな課題がございました。

そこで、愛媛県の伊予市の地元の方々が、乳牛のえさに改良して食べさせたらどうかということで、搾りかすの入ったエサを、牛の農家に買ってもらい乳牛に食べさせたところ、非常に栄養価が高く、美味しい牛乳になり、愛媛県農林水産賞をとったという循環の事例がございました。この牛のふんをケールの畑の肥料にしているという循環もしているのがリサイクルの事例です。

リデュースの事例は、自然エネルギーを企業として活用しているというのを紹介します。まず森についてです。横浜は、神戸と匹敵する港町ですが、横浜の水は赤道を越えても腐らないおいしい水ということで、150年以上前から船乗りさんにはとても評判のいい水です。その水源は神奈川県ではなく山梨

県にあります。山梨県の森を神奈川県の子会社が保全活動をしています。実はこの森を育てるとCO<sub>2</sub>をたくさん吸ってくれますので、温暖化対策にもなるということで、ここでリデュースとなります。

それからもう一つ、横浜港に大きな風力発電事業があります。横浜に本社がある企業とともに、協賛をしています。本社の1階の電気は風で賄って、CO<sub>2</sub>相殺をしています。

それから、次に太陽です。ファンケルの化粧品は滋賀県と千葉県に工場がございます。滋賀の工場は太陽光パネルを敷き詰め、全体の17%を太陽の力でつくっています。わかりやすく申し上げますと、日焼け止めクリームを太陽の光でつくっています。

それから、もう一つがリユースです。ファンケルの本社は、横浜中華街や山下公園などがある港のすぐ近くですが、本社から歩いて5分くらいのところに日本三大寄せ場、大阪で言うといりん地区でしょうか、の3つのうちの1つの寿町というまちがございます。生活保護者、そして路上生活者が約5,000名住んでいらっしゃいます。このまちをきれいになりたい、何かいいことはないかと考え、男性の普段着のジャージなどを、ごみとして捨てるならください！と社内で募集しています。また、出張などで、ビジネスホテルで提供される歯ブラシやカミソリなどを集めて持ってきていただいて、寿町のNPO法人に寄附をしています。この活動のもう一つの理由は、従業員は会社周辺に住んでいませんので、会社周辺エリアは私には関係ないと思ってしまいます。また、リユースという習慣はヨーロッパやアメリカでは非常に当たり前ですけど、日本では人の使ったものを着るとか、使うというのがまだ慣れていないということで、社員教育の一環でもあります。

最近、ワンポイントのブランド物の中古を出された従業員が「最近おじさんたちきれいな身なりだね」とコメントをくれたり、従業員が地域に目が行くようになっていきます。つまり、教育も兼ねたリユースをなっています。

もう一つ、産業廃棄物の問題の解決方法として、ファンケルは長野県の上田で発芽米のお米の工場を持っています。当然食品ですので検品作業があります。検品した商品はお客様に販売することができません。これは産業廃棄物として捨てております。これを寿町の食堂に寄附をしています。実はこういった寄附をしているところはローソンさんとか、ほかのコンビニさんでもお弁当の材料を提供しています。地域の企業が提供しているというのがリユースの事例です。



以上になります。

【司会】ありがとうございます。

ファンケルさんではリデュースという点が、ごみ減量という意味じゃなくてCO<sub>2</sub>の削減ということになるんですね。

【臼杵】はい。もちろんショッピングバッグは要りませんと言うと、お客様には5ポイント差し上げるとか、紙ごみ、原料の資源の削減は当然やっております。ここではCO<sub>2</sub>、今、なるべく自然エネルギーを活用してよりよい社会をつくっていきましょうという企業姿勢のPRも兼ねてこのリデュースのご紹介をいたしました。

【司会】ありがとうございます。

北川さん、臼杵さんの取り組み、いかがでしょうか。

【北川】企業はほんとうに一生懸命やっています。例えば人権の問題とか、男女共同参画とか、こういったCSRというのは、企業はほんとうに取り組んでいると思うんですね。ところが、市役所はどうか、県庁はどうかというと、これ、ものすごくにぶいんです。僕は、市役所なんか何が何をしてもらいたいかというと、大企業がやっているような、こういう人権とか男女共同参画とかCSR、環境の問題なんかを地域で、さっき西宮でやっていただいたでしょう。地域でやってもらいたいと思うんです。向こうにたくさん大人の方がいらっしゃるの、選挙に出てくれませんか。それは私の早稲田の教え子で、女性ですけども、30代の若い子が、自分たちは東京の江東区に住んでいて、自分は大企業に勤めていて、子育てとか男女共同参画って、ものすごく恵まれていると。だけど、地域へ行ったら、江東区で言ったら駅のそばは全然男女共同になっていないし、バリアフリーになっていないし、公共というのは一体何なんだというので区議員に立候補して当選したんですよ。それで、そのことを専門にやっているんですね。あまりにも市役所、市議員とか県議員さんとか、そういう人がおっさんばかりでしょう。こういうことが一番わからん人がいっぱいなる。大阪を除いてですよ。ほんとうに鈍い、今までどおりのようなことばかりやっているからなかなか変わらないんですけども、今日はこの中から1人ぐらい廃棄物業者さんからも、製造業からも出ていただけませんか。それがCSRなんです。社会参画なんですが、その点、ちょっと小川さん、済みませんけど、企業はほんとうにやっているところはあと思うんですね。地域の問題をどうしますかね、これ。

【小川】私が学校の先生の研修をやったときに、今まで環境教育の一般の研修をやっていたんですけど、

やっぱり現場を見せたいなというので学校給食をつくっている西宮の牛乳をつくっている会社さんとか、ハムをつくっている会社さんとかへ行って、そこで自分たちが子供に食べさせている給食がどんな場所で、材料がどんなところでつくられているかというのをまず見ていただこうと。と同時に、その企業がどれだけ環境の対応をしてやっておられるかという、その裏をちゃんと見せてもらうという話で先生を連れて行って現場視察をさせるんですが、企業の方の説明でISO14001ということがぼっと出て反応できる先生が30人のうちほとんどなかったんです。これ、2年ぐらい前の話です。

あと、学校の先生、給食室から子供に給食をとってこさせるんですけど、給食室の中のことはわからない。給食室の人たちは、材料がどこからどう来るかわからない。ここもまた切れているんですね。学校の先生たちに、今、ISO14001って、企業の方やったら大体わかりますよと。先生たちがそういう世界で子供に環境を教えているというところの問題を1つ考えてくださいねと言わざるを得なかった。それと行政の方に、ISO26000のお話をしたんですね。これはなぜかということ、CSRじゃないです。あらゆる組織の社会的責任です。もうこれ、動いていますと。NPOも当然責任を負います。行政も負いますと。でも、行政職員でISO26000が自分たちにかかってくると感じている人というのはこれまた少ないです。認識が、当初おっしゃられたみたいに、やっぱりお上の意識というか、自分たちがコントロールするのでコントロールされるという概念があまりないんですね。けど、今、ISO26000というのができた段階でその構造は変わっているんですけども、その教育が公務員の中にはまだ十分できていない。これはこれからいろんな物事を考えていくときに対等な関係をつくるためには、やっぱりお互いが相互に責任を果たしているかどうかをチェックし合う、そういうことをもっともっと両者が考えないといけないなということをつくづく考えています。感じています。

【北川】そうだと思うんですね。私、今、弁護士の皆さんを公務員になれという運動をものすごくやっているんです。弁護士さんも裁判の裁判所だけではないかと。企業に入ってM&Aをやるときに、中国なんか100人も弁護士を連れてどーんと来るのに、日本は裁判所の弁護士だけなんですね。今度は市役所も県庁も終身雇用ですから、任期つきで途中で入ってくるのは嫌うわけですよ。私も知事に就任したとき、民間人が入ってきたというのでどれほど嫌われたかという、そういう習慣があるわけですよ。だ

けども、ほんとうに分権になったら法律的にきちんと判断できる職員でないと、真面目な行政判断をしたら逮捕される場合があるんですね、善意で。だから、弁護士さんよと、公務員になってくれと運動をものすごくやって、現在大分増えてきました。

それで、議員さんにもなってくれと。今まで議員さんってこんなものだということじゃなしに、例えば業界団体でも自分たちの利益とは別に、例えば廃棄物業界でほんとうに環境に優しい地域をどうやってつくっていくんだというような、そういう人が出てくると、今までの地域の利益誘導とか、御用聞き議員ばかりでなしに、目的を持った議員が地方にも出てくると、ほんとうに社会を変えていくんですね。そうすると、小川さんのような頑張ってもらえる職員さんと議員が、外に開かれたという、そんなことに僕はつながっていくと思いますから、そういったこともぜひ、これだけいて3人ぐらい出たら世の中変わると思うので、来年期待しています。お願いします。

**【司会】** 皆さん、お願いいたします。

3Rへの実現というのはほんとうに難しいと思うんですけども、実際、関心というのは、度合いは北川さん、どうなんでしょうかね。頑張っている企業とか、地域とかはやっぱり浸透していると思うんですが、それ以外のところ、知らない人たちはやはりしないですね。そのあたりをお話しいただければと思います。

**【北川】** そうはいつても立ち位置によって違うんですけども、大分変わってきたと思います。例えば、自動車も、いわゆるハイブリッドだとかエコだとか、そういうものしか売れないでしょう。あるいは冷蔵庫とかいう家電製品もそうになってきて、非常にシビアになったというのは1つの3Rが浸透してきた証拠で、これは資源循環型の法律がきてきたということです。これは、制度補完といいまして、1つの法律ができると、そのようになってきます。だから、今度の特定秘密保護法案でも、あれになっていたらほんとうにみんなやられますよというような、例えばそういうふうな制度補完、法律がそのように向けてきますね。だから、今度はまさに3Rは、そういう法律によってだんだんそっちのほうへ向いていきますから、早く気がついたほうが自分たちの社会もよくなるし、地域もよくなるし、家庭もよくなるということに気づいていただくために、小川さんのおっしゃられた製造業の方は厳しい環境の中で頑張っているから意識が高いんですね。学校の先生とか、市役所の職員というのは比較的そっち

は競争の社会じゃないですから、やっぱり一般よりは鈍いと思いますね。だから、製造業の方がどんどん子供さんを教えるとか、先生方に教えるとか、そういう政官財民と一緒に活動するこういうネットワークができ上がることが非常にいいことだと期待いたしますね。

**【司会】** そうですね。ほんとうに北川さんのおっしゃるように、小川さん、企業だけが頑張ってもだめですし、地域だけが頑張ってもだめ、行政との連携が成立しないと成り立たないですね。

**【小川】** そうですね。基本的に行政というのは大きな枠組みをつくっていく、最後の社会を制度化していくための仕事をやらしてもらわないとだめやと思うんですね。けれども、やっぱり実態論がなかなかつくれないと思うんです。実態というのは地域の住民の生活であり、企業活動なんですね。だから、行政が、私も環境教育の担当をしていたときに環境啓発係という名前から環境教育になって、環境学習というふうな、だんだん時代とともに変わってきたんですけど、昔の啓発というのはごみを出さないようにしようという行政が呼びかけて、それで言うことを聞いてちょうだいよという世界です。環境教育は、もうちょっと理屈をちゃんと教えて、行動を変えてもらおうという段階に入ってきて、それからもっと今度は住民自身、子供自身が自分で主体的に考える力をつけていきたいと思いますというので環境学習というふうな、流れが変わってきたんですけど、やっぱりまだ行政の体質というのは啓発の段階からなかなか超えられていないんです。地域のほうは徐々に自分たちの問題という認識が高まってきたんですね。自分たちの問題ということを考えていったときに、やっぱり自分たちだけでもごみの問題とかは解決できませんから、先ほどのように民間の企業さんが計量器付きのパッカー車でごみをはかってくれて、一緒に減らす努力をしてくれる。また、そのパッカー車を持って学校へ行って、子供たちにごみ学習の入り口のところをやってくれる。こういうふうなことを普通に学校もできるようになって、こういったことが、例えば、まだ今は一部ですけども、行政がほとんどの学校で学習するときは役所のほうの清掃車もそうですし、民間企業の清掃車も、みんなが自分のエリアの学校をまず学習していくと。そのことで従業員の人も子供に話すのは難しいですから、ちゃんと頭の中に入れておかないといけないので、社員さんの教育にもなると思うんですね。

そういうことを一緒にやりながら、やっぱり理屈ではなくて仕組みを一緒につくっていけば、行政が

それをまたそこでうまくサポートできる仕組みにもつくってってもらえるでしょうし、民間企業さんがやってくれたごみをはかって、それを提示するというやり方を、今度、西宮市がホームページで、1週間か2週間遅れで市民が出すごみ量を毎回提示していこうということも言うてくれるようになりました。やっぱりこういうことで少しずつ、どこが連携のポイントになってくるかということをやっぴりお互いがいろいろ議論していかないとすぐには仲よしということではないだろうと思うんですね。そういう点ではいろんなやり方、いろんな方法論を使って、共同の道筋を行くまでの活動の芽生えみたいなものを起こしていく必要があるかなと思います。

【司会】ありがとうございます。

今までお話を伺った中で、3Rを進める上での課題が2つほど挙がってきたように思います。1つは、3Rについて関心を持ってもらわないといけないことですね。地域の3Rとなると、やっぱりまだインパクトが小さいということ、そしてもう1つは、関係者との連携、特に行政との連携構築が必要だということだと思います。

そこで、続いてのテーマがこちらになります。

地域に根ざした3Rを進めるに当たっての行政との新しい関係ということでお話を伺ってまいりたいと思います。企業代表として行政との連携について、臼杵さんからお話を伺えますか。

【臼杵】まず、行政から求められていることというのは大きく3つございます。1つは、環境法令を守ってくださいという発信。特に条例です。各県、各市が独自に設けている厳しい条例、特に廃棄関係は非常に厳しいです。それからもう1つが協賛金を求められることです。先ほどご説明しました風力発電や森の保全活動は、例えば森ですと水ですので水道局、風ですと環境事業本部とかから企業は協賛を求められます。

それからもう1つは、地域のイベントに商品を提供してください、広告を出してくださいと協賛関係のことを求められます。

というように、企業からすると求められることが多くて一方通行な感じがします。企業にとってメリットは何だろうかを考えず、おつき合いだからしょうがないということでお支払いしているというのが現状で、やはりメリットを感じるようになりたいというところが本音です。社会のメリットが企業のメリットにもなる。企業は収益を求めます。利益は配当金として株主様に還元するという大きな使命がございますので、収益が落ちると、どうしても地域への貢

献も当然減ってきます。今ちょっと会社の中で懸念材料が、廃油の関係ですが、廃油の回収も自治体でちゃんとやってほしいというのがあります。

それから、協賛をするからには企業としてはPRをしたい。テレビだとかマスコミに行政としてPRをしてほしいというリクエストをさせていただきたいです。やはり一方通行、行政からこうしなさいというのではなくて、企業も、これをやれば収益だとか、企業のPRになるというウイン・ウインの関係じゃないと、企業は売り上げが下がると、赤字になると何も貢献できませんので、継続的にするためにはお互いにメリットがあるようなことを相互に見いだしていきたいなと思っております。

【司会】ありがとうございます。

北川さん、なかなかウイン・ウインの関係も難しいようなんですが、知事時代も振り返っていかがでしょうか。

【北川】行政は公平、公正って税金を預かっていすから、ファンケルさんだけ褒めるのはどうかとか、そういうことになっちゃうんですよ。これからの行政は褒めりゃいいんですよ。それは貢献していただいたところはどんどん、それを首長が判断していけばいいわけですね。したがって、公平、公正だけではなしに、いわゆる経営的な感覚で地域にこれだけのメリットを与えていただいたら、それだけのメリットを返すという、そういうことができるように分権はできているわけですから、自分のところは徹底的にエコに優しいとなったら、その協力会社に力を求め、そして、お金でなくても名誉とか、ほんとうに熱心な企業という、そういう宣伝の媒介を進めていくことが1つですね。もう1つ、方法論として公共体はやっぱり税金ですから公平、公正で、それ以上のことはあまりできないねという、鉄則があるわけですね。僕はそれを超えよと思っていますが、先ほど小川さんがおっしゃったようにNPO的な人と一緒にやれば、NPOの皆さん方はそういうことで企業が貢献いただいたら、みんなの仲間にこのように貢献していただくであそこはすごいよというようなことが伝わっていくという、行政が直接やらずともお互いのステークホルダーといいますか、関係者としてNPOの皆さんに任せて、そしてファンケルさんはこのようなことをやっていただいていますとかいうことをきちっとお伝えするという、そういう手法も考えないと、法律条例に基づいてだけ仕事をしていると、管理だけの仕事になりますから、やっぱり地域を起こしていくとか、より価値を高めていくという、私は行政体に節度を持ちながらも踏み込



んでいてほしいなど、そんなことを思いますが、経験者の小川さん、どうですかね。難しい点もあるけれども、もう踏み込むべきだと思いますが。

【小川】以前に県下の職員の研修をやったときに、今日、ファンケルさんも会社の理念をおっしゃっていましたが、行政の中でもしあなたのまちのまちづくりの理念は何ですかと言われたら、ほんとうは都市宣言とかというのをすぐに挙げないといけないんですね。都市宣言というのはものすごく大きな意味を持つわけですね。西宮の場合は文教住宅都市宣言、平和非核都市宣言、環境学習都市宣言という3本をやっているんですけども、100人ぐらい職員がいて、あなたのまちの都市宣言は何ですか。知っている人、手を挙げてくださいますと、手が挙がらなかったんです。1人だけ、プライダル宣言をやっていますというのが、プライダル都市宣言をやっているという女の人が1人手を挙げたんですが、それ以外びんとこないんです。

行政の職員というのは、要は自分のところの会社である市役所、市ですね、自治体がどこに向いて走っているかということあまり考えないというか、考える習慣をつけられていないんです。もう末端は末端で自分の仕事をやります。企画は企画ということで調整をやりますけれども、全体がどこかの方向に向いているかということ、そこが弱い。ですから、結局縦割りというのはそこから出てくると思うんですね。やっぱり自分たち一人一人の職員が、じゃ、自分たちはどういう仕事をして、どう街を持っていくのか、うちの街の理念はこうだし、マスタープランではこうなっているから、自分の仕事は税金だけでも、税金からこうアプローチしよう、福祉からこうアプローチしよう、環境からこうアプローチしよう、絶対そういう発想でつながらないといけないんですけど、そこがなかなか弱いというのは自分も体験していますし、今でもなかなかその壁は越えられていないと思うんですね。

僕がやってきた中で、これはすごい成果やったと思うのは、西宮の小学生は1年生から6年生まで全員が4月にエコカードというカードをもらうんです。これ、1年から6年に全員に環境局がつくって、学校の先生を通じて子供の手元に渡るんですね。親には活動の手引きというのが渡ったりするんですけど、そのエコカードには学校と地域と家庭という、お店の3つの欄があって、活動するとそこにそれぞれの人がスタンプを押してくれるんです。満遍なく10個集まればアースレンジャー、地球を守る人で表彰されるんですが、これを全市一斉にやろうとしたとき

に、子供の数がその当時でも2万5、6千人いました。スーパーマーケットから文具店から、自治会とか子供会、ボーイスカウト、それから学校の先生、あと、いわゆる行政施設とか、いろんな人たちが全部同時にスタンプを預かってくれないと一斉にできないんですね。こういう仕組みをつくっていくのは行政が丁寧に事業の説明をして1個1個の手続を踏んで了解していただくようお願いできるんです。そういうことをやって、今、15年目に入っているんですね。市内のスーパーマーケット、文具店はみんなスタンプを持っていますから、企業さんも行政もそこで応援する。学校の先生も応援する。でも、温度差はあります。けど、そういう仕組みを行政が長期的な視野でつくってあげればいろんな力を活用できる。子供の環境教育を何か特別なものとしてやるのではなくても、日常生活でいろんな企業の力や市民、団体の力や行政の力も使うことができる。そういう発想をしないと、民間企業の方がやっておられる、行政がやっておられる、NPOがやっている、同じことだったら、どれが一番費用がかかるのかといったら行政ですね。そういう発想はそろそろ必要かなと思います。

【北川】おっしゃるとおりですね。3Rは時間もかかりますが、今日はファンケルさんが出ていただいているでしょう。ふだんからやっていらっしゃるから出ていらっしゃるんですから、メリットじゃないですか。ということに僕はなっていくと思うんですが、それをお互い認め合う、ウイン・ウインの関係ですよね。だから、私は今日のこのシンポジウムは、言い過ぎかもわかりませんが、何か決めて、5年、10年続けていかなきゃ、そら定着しませんですね。だから、まさに公益な社団法人になられたわけですから、そういうふうなことをやっていただくというので、ある市役所を絞ってもいいし、ある環境の関係のものに絞られてもいい。それは組織でやられて、それを継続していくというので、例えばこのお二人なんかにお力を借りて、どういう方向でやっていこう、西宮がどれが失敗で、どれが成功で、どの点がよかったと。じゃ、はんこでいこうとか、学校の先生の教育でいこうか、あるいは子供さんにとか、そういうふうなことを私はこの会でも具体的に決めていただいて、進んで、1年たったならこう変わった、2年たったならこう変わって、3年でこういう成果が出たとか、そういうふうに進めていただくと、総論だけでなしに具体論も取り上げていただいたら成果が数値にあらわれてくると思いますので期待したいと思います。

【司会】ありがとうございます。

臼杵さん、メリットもあるということですが。

【臼杵】たくさん宣伝をさせていただき、ありがとうございます。

【司会】北川さん、北川さんは環境先進県づくりを掲げてリードしてこられましたよね。やっぱりトップリーダーの意識というのも必要になってきますよね。

【北川】これははっきりしてしまして、分権自立ですと、国の言いなりになっている首長は絶対選んではいかんですよ。それだけ損ですね。だから、市役所の皆さんに市役所の目的は何かと言うたら、ほとんど語られませんよ。それは、企業理念がなくても前例に従ってやっておればがなく済むからです。だから、はっきりと、例えばファンケルさんがもっと頑張ろうよとか、もっと気づこうよという、こういうアグレッシブなことがあるから、それでやっぱり社員の方はそのように向いていく社員になるんですね。

ところが、前例に縛られて、法律条例に縛られているから、それ以上出ないという公務員が、そんなものだという中央集権に縛られた発想があまりにも多いんですね。だから、首長ががっと腹を固めたら、ほとんどのことは市役所でもできるんです。それができないからだめなので、これからはできないからだめだと言っていた市役所は滅びますね。だから、危険覚悟で臨むですよ。その責任は全部首長がとればいいんです、そんなの。やめたから言います。そんなことをほんとうに誰かが本気でやらなければいけない。その市長や知事や、町長を選ぶのは皆さん方ですから、ほんとうに選んでいただけたらありがたいのと、よくマニフェストを読んで。よろしくお願いします。

【司会】ありがとうございます。

では、これから行政ですとか地域、企業と連携構築に取りかかる企業さんなどもいらっしゃると思いますが、関係者の方に何かアドバイスがあるとしたら、成功者の小川さん、何かポイントを教えていただけますか。

【小川】決して成功者とは思っていませんけど、今、私たちは冒頭言いましたけど、JICAさんの研修を受託させていただいて、廃棄物のいろんな仕組み、それから現実的技術、知恵を海外の方に伝えているんですけど、我々がそれをやるのではないんですね。それこそ行政の清掃工場も見に行ったりしますけれども、民間のリサイクル関係の事業者さん、ごみの収集の人たち、製造業とかに行きますけど、皆さん

あまり自分たちの持っているスキルとか、技術のすごさを自覚されていないんです。ごみを収集するプロセスで安全管理とかいろいろな物事を考えながら、どれだけ効率よくごみを収集しているか。こういうことを大抵現場の間人はあまり思っていないですね。けど、海外の人を連れていって見せると、それはびっくりするわけですね。一つ一つがびっくりなんです。時間をきっちり守る、安全管理、礼儀、衛生管理、いろいろな面で日本のやっている、働く現場の人たちというのはほんとうにすごくきっちりしたことができています。そういうことを自分たちでは自己評価をなかなかできないので、他者評価というのがものすごく要ると思うんです。

これは企業の方だけじゃなくて、今、西宮の保育所で、それこそ3歳、4歳の子が、給食で出た野菜くずを園庭にあるコンポストに入れて、すぐ横ではまた栽培活動もやっているわけです。近くにビオトープの池をつくって、生き物とも触れ合う。3歳、4歳からそういうことをやっている現場を見せるんですね。そうすると、海外の人にとったら教育というのは小学校、中学校以上のものやと思っていますから、こんな幼児期から、言葉もちゃんとわからない段階から、ちゃんとミカンの皮はそこに入れたりとかして、それがちゃんと土になっていくということがわかる。だから、教育レベルというのはほんとうに幼児期からいろんなことができるんですね。そういうものの積み上げで、やっぱりリデュース、リユース、リサイクルというのを体験的に学びます。これは理屈じゃないと思うんです。実際の生活の中にそれが入ってくると、幼児からでも十分できると。そういうことを大人がちゃんと目を開かなあかんと思うんですね。ふだんなかなか一般の人たちって保育所なんかに行く機会はないですけど、意外とそういうこともやられています。だから、もっとお互いが3Rを軸としてやったときに、幼児期からシニアまで、いろんな世代で、どんなところでどんなことが可能なのかというのを情報交換して、とにかく現場ではすごいことがやっているんだという自信と他者の評価をうまく入れることで、やっぱり自分たちのモチベーションを上げていく、社員のモチベーションを上げていく、それが会社としてさらにまた上がっていったというふうになると思うので、そういうことをこれからどうやって制度的にも進められるようにしたらいいか、これをちょっと考えていったらいいかなと思っています。

【司会】北川さん、幼児期からなかなか3R活動に取り組むという発想がなかったんですけど、そ

のあたり、いかがでしょうか。

【北川】これは思った以上に進んでいると私は素直に思います。

私、知事のとときにたばこのポイ捨て条例をやろうと言ったんですよ。当時、40歳位上はあきらめましたね。そういう教育を受けていないのでたばこは窓から捨てるものやと思っているんです。それで、あきらめたんです。大人はだめだと思った。新しい価値創造ですからね。だから、やるのは子供さんだと思って、子供さんの教育を徹底してやったんですよ。そうすると、家でお父ちゃんが運転していてぱっと捨てると、子供が隣で、お父ちゃん、それはだめだと、こう言うんですよ。これは効きましたね。だから、子供の教育は徹底的にすることによって大人はあきらめることですかね。例えば子供の環境教育を、今、小川さんが盛んにおっしゃっていただきましたけども、いろんな角度でここにいらっしゃる方が仕掛けて、子供のときから自然になじますですね、体に。そんなものだと。ポイ捨てはやめるとか、ビオトープでみんなの生物は大切にするとか、あるいはバクテリアでコンポストに入れて、生野菜は全く外へは出さないとか、そういう環境教育をやりたい。もう1つは、私は三重県でやってよかったなと思った取組ですが、製造業の皆さんは売り上げとか製品を開発するとかいうのはほんとうに熱心なので、みんなが協力し合ったり、勉強する会には、公共がやるとすぐ寄ってきていただけましたが、逆にほんとうに困られること、例えば廃棄物対策などは実は皆さん悩まれているんですが、こんなこと言うとしかられると思われるのか、秘密にされるんですね。だから、そういうネットワークを公共体が、市役所とか府庁が中心になって声をかけて真剣にやると、お互いの信頼関係ができたらどんどん出てくるという体験を、私、しているんです。したがって、表の業界団体の集まりというのも僕は必要だと思いますが、いわゆる静脈産業のことも表に出していただいて、それで全体で産業界は成り立っている、地域経済は成り立っているんですから。私、静脈関係のグループといいますか、その団体が公共を動かし始めると、ほんとうにいい社会ができてくると思うので、ここには関係の皆さんが多いので、そういったグループ、ネットワークも製造業でつくっていただく。そして、産業廃棄物の業界の経営者も入って、お互いがよりいい社会とか、よりいい企業をつくっていくという、そういうことを私は2点、今日原田さんに振られたので、環境教育をどのように普及させるのかということ、いわゆる静脈産業のネッ

トワーク化、業界団体がどうしてくれるかというようなことも今後ご検討いただければなど、そんなふうに思いました。

【司会】ありがとうございます。

臼杵さん、今日は企業を代表してお話を伺いましたけれども、いかがですか。

【臼杵】すごく勉強になりました。ありがとうございます。

実は、私たちも「もっと何かできるはず」という経営理念の下に社会貢献の方針がございます。社会貢献の方針は、ハンディキャップを持った方々と地域です。私たちの取り組みの中で、このリサイクルの活動を、ファンケルの特例子会社に収益を稼いでもらう目的で、私たちの事務所にある分別のごみ袋の中の資源ごみをピックアップしてもらって、彼らが原料として販売をし、ファンケルがトイレットペーパーとして仕入れるという活動を数年前からやっております。ハンディキャップを持った方々というのは社会にはたくさんいらっしゃいます。ぜひ行政の方たちとNPOの方たちとも、ハンディキャップを持った方々と環境で何か一緒にできたらいいなと思っております。

【司会】小川さん、いかがでしょうか、今のお話を伺って。

【小川】今、私たちが取り組んでいる大きなポイントに農業があるんですね。西宮はほとんど住宅だと思われているかもしれませんが、実は六甲山があって、その南側の斜面のところに昔からの農地がまだ残っているんです。いわゆる里山・里地の景観なんです。その農地で子供の農業塾とか、大学生の農業塾とか、一般家族とか、企業さんのいろんな食農教育の事業をやっていて、当然農家さんとも連携してやるんですけど、経費も賄わなければいけませんので、ここだけで1,000万ぐらいのお金が動いているんですね。それは受益者負担や企業の支援やら、いろんなところからお金を生んでいるんですけども、何で私たちが農業をやるかという、その景観を残したいというのがまず1つあります。それから、子供たちに自分たちでそういう物をつくる、野菜をつくる、米をつくる、そういう経験をさせたいし、親にも経験をさせたい。

もう1つは何かというと、山の落ち葉をとってきて堆肥をつくって、その堆肥で苗をつくったりとか、田んぼに入れたりとかという、自然の中の循環を考えてもらうようなことを仕掛けているんです。これ、ごみの問題なんです。さっき言いましたように、保育所の子供でもコンポストにミカンの皮を入れる、



この間、違う保育所がやってくれたのは、その違う土のところにビニールとか、新聞とか、いろんなものを入れて、1週間たったらそこを掘ってみるといふのをやるんです。そしたら、プラスチックとかは当然腐らないです。これだけで自然の中に返るものと返らないものが子供たちはわかるわけですね。農業というのは、まさに自然循環が大事です。その自然循環がちゃんと回るといふことを自分が食べるものとやっていくことで、農をすることはいずは自活力ですから、自活力も備わるし、大きな自然の仕組みも学ぶことができる。有機栽培されている部分といふ、同じ循環なんですけども、そういうことを小学生とか、幼児から小学生からずっと積み上げていって、そういうところにごみの収集車の会社であったり、ハウス食品みたいな製造メーカーであったりとか、いろんな人たちがかかわっていただいて、次の時代に向けて、ごみの問題だからごみからだけ攻めるといふのではなくて、大事な概念のところから攻めていって、そこでまた新しい価値観とか考え方を生んでいくとか、そういう多重的な取り組みもやっていく必要があるだろうと思ひます。

だから、地域とかハンディキャップを持っているとか、今の子供たちからは自然体験、社会体験、生活体験がなくなっているといふから、そういうことをどう保障するのかとか、きっとそういう全体の中から3Rで一番大事な自分たちが自立して、循環型の社会を築く根っこのところが、もしかしたらもっともっと築いていけるのと違ひかなといふこともあって、ちょっと話は変わりましたが、そういうアプローチも我々としては進めていきたいと思ひています。

**【司会】**北川さん、お二人のお話を聞いて、いかがでしょうか。

**【北川】**やっぱり意識を持っていただくことが大事だと思ひました。私は18年前に環境先進県といふのを選挙のマニフェストにして、みんなに叱られて落選するといわれながらも、当選したんですけども、環境先進県で県庁の職員の方にどうやって意識を持ってもらおうかといふときに、ごみ箱をゼロにしろと言ったんですわ。机の下に置いてあるごみ箱をゼロ運動といふのでゼロにしろと言ったんです。そしたら怒られて、我々は3S運動をやっている。整理整頓、清潔とか何とかやっているのに、ごみ箱をゼロって知事の横暴だといふてすごくしかられたんです。

**【司会】**ごみはどこへ行くんですか。

**【北川】**そうやって怒られたんです。それは、ごみ箱があるといふ前提で聞くんだったら、こう言うん

ですよ。そうすると、ほんとうにごみ箱をゼロにしたんです。5時間もそれだけで部長会議をやったわけですから。ゼロにしたら、8割減りましたよ、ごみは。

**【司会】**どういふことですか。

**【北川】**といふことは、まず、ほとんどが紙のごみなんですわ、県庁なんかは。そうすると、当然当時はまだ高度経済成長ですから、メモ用紙は表だけですよね。それが表と裏とすぐ使うようになるんです、それは。断固といふので、今までのごみを減らすといふのは、賢いから1割、2割くらい、公務員はすぐ減らすんです。だけど、ごみ箱がゼロになると困るでしょう。そうすると、当時はまだなかったんですけど、すぐ分別箱ができるんです、ワンフロアに。そして、自分たちは鼻をかんだときにはなかみはどうするんだ、鉛筆を削ったときのそれはどうするんだといふでしょう？文句を言うといふやつはすぐ自分で小さな紙でつくって、そこへ入れているんですよ。できたじゃないかといふので、ごみ箱をゼロにしたら8割ごみが減ったんですよ。そのごみ箱は全部花のポットにして、花が植わったんです。発想の転換でしょう。だから、環境先進県といふのはそういうことだといふので頑張り抜いて、私も相当しかられましたけど、職員から。だけど、やったらできる。立ち位置が変わるといふことはそういうことですから、行政が変わればいいんです。今まで自分たちの前例で、絶対そうしなきゃいかんといふ生物連鎖のトップに来てたでしょう。だって、お金と許認可を持っているんですけども、こんな怖いことはないですよ。だから、それではやれていかない世の中になって、今日のテーマであるウイン・ウインの、みんなが、お互いがステークホルダーで助け合ったほうが地域はよくなりますよ。皆さんも税金が上がりなくて済むんですよ。ソーシャルコスト、社会にかかるお金が少なくなりますからといふ、そういう社会を私は関西からつくっていただけたらといふふうに思ひます。

だから、ごみ箱ゼロといふのがよく効きましたね、あれは。今、原田さん、質問したでしょう、僕に。無理じゃないかと思ひているのよ。

**【司会】**はい。思ひました。

**【北川】**それは今までの思い込みといふことで、やったらできるんですわ。だから、ごみを減量しろじゃない。ゼロにしろ、ごみ箱をといふのは、あれ、効いたですね。

**【司会】**斬新ですね。

**【北川】**ちょっと変わったでしょう。

**【司会】**はい。



【北川】原田さんも変わったんですから、皆さんもぜひ変わっていただいという、そういう価値観が変わる。今、CSRということを言われましたけど、レスポンスビリティで責任だというので実にいいんですけども、これからはファンケルさんのように、レスポンスビリティから新しい社会の価値をつくっていくんだと。最近CSVと言うんですかね。バリューという、そういう言葉で社会全体が変わっていかないとほんとうにいけないねと、こういうことで、企業人間であった人々がやがて地域に帰っていったら、家族のところへ帰っていったらただの濡れ落ち葉でしょう。そんな人ばかりですね、これ。相手にされません。私もそうですから、家へ行ったら。そういう社会は高齢社会ではだめなんです。だから、地域とか家族にどうやってかわいがってもらえるかというのはぼつぼつ考えていったほうがCSVと、新しい価値をどうつくっていくかということは、私、重要なことだと思います。以上です。

【司会】ありがとうございます。

では、そろそろお時間も迫ってまいりましたので、最後に、今日お越しいただいた皆さんに、これだけは言っておきたいということをもとめてお願いしたいと思います。

小川さん、お願いします。

【小川】今日の本題の3Rなんですけれども、実は先ほど言ったJICAの仕事で大洋州の島々、人口が少ないところやったら何万という国ですね。でも、そういう島々に我々が使っているのと同じこういうペットボトルからアルミ缶から、いろんなものを輸入して生活の中に入れてきてしまったんですね。そうすると、焼却場とか、そんなはありませんから、結局ごみは全部埋め立てる、もしくは野積みするしかないんです。今までこういう商品が入ってこないときは、大体が全部自然に戻るもので生活していましたから、ごみという概念すらもとまなかった。そこにいろんなものがどっと入ってきて、それも特に中国なんかから安く入ってくるものですから、みんなそれを買っちゃう。使った後、ぽいと捨てる。結局処理できないんです。処理できなくて、じゃ、どうするかというのでJICAなんかでは今まで埋立地をつくるための支援をしてきました。けれども、埋立地は、先ほどおっしゃった三重県でもそうですが、だんだん埋まっていくわけですから、次がカバーできなくなってくるというので3Rをやろうということで3Rの運動をJICAでやっているんですが、3Rできないんです。リサイクルできないんです。製造業もなければリサイクル技術も工場もないんで

す。結局何かといたら、全部一方通行で入ってこみになるだけなんです。

これを何とか変えなあかんというので、今、ニュー3Rという運動をしようと言っているのは、それは何かと、使うのは使うけど、最後、資源としてきちり分けて、それをリターンさせる。製造会社とか輸出した国にリターンさせて、そこでリサイクルしてもらって、また回すというような、そういう新しい考え方を持ち込まないと、大洋州の諸国は絶対ごみのあふれた島になってしまいます。これはアジアの途上国でも同じです。

翻って考えたら、私たちの国、どうなっているのかなと思って考えたら、日本もあまりかっこよくなくて、どんどん製造は出て行って、リサイクル関係の工場とかは出て行って、物までどんどん流れて行って、日本の国民がやっているのは消費しかなかったという落ちが今ついてきているような気がするんです。

できればほんとうにこの3Rの推進というのは大事なんです、ほんとうにこれから日本が急激な人口減社会に入っていくって、自立循環の地域づくりとか国土づくりとか経済づくりとかを考えないといけないときに、どういう自分たちの物の流れをつくっていくのかという前提でやっぱりこの3Rということをしきりと捉えていかないと、今、我々はものすごく反省をしながら研修をやっているんですけれども、次は自分たちに問われてくることかなと。そういったことが次の都市の1つのテーマとして、もう一遍私たちが自分たちの暮らしをしっかりと見直した中で3Rをどう考えるかということもテーマにしてもいいのかなというふうなことを、今日の私のまとめとさせていただきます。

【司会】北川さん、リターンということで、リサイクル可能な資源として持ち帰らせるという発想はなかったですよ。

【北川】そうです。だから、環境政策を費用と考える、負担と考えるよりも、投資として考えて、そして前向きにいくと、いわゆるCSRとかCSVがおのずと備わってくるという、そういうことで三方よしのことは、結局は自分に返ってくる。だから、近江商人は、ほんとうに信用とかのれんとか伝統というのを大切にされる。そのことをしないとたないよと、こういうことの教えが三方よしだと思うんです。だから、情けは人のためならずということで、自分の立ち位置がほんとうに正しいと。どこから見てもやっぱり社会貢献をしているよねとか、あるいは目に見えないところでもきちっと正しいことをやっていらっしゃるねと、人格ですね。法人格という、そ

れを持っているねという、そういう努力が結果、積み重なって、あの企業があんな失敗をしたのはおかしい。どこかが間違っていたんだよね、社会がと。あの会社が間違っただけは当然だよね、あの会社の雰囲気はというの、この違いがこれから、いわゆる企業の勝敗と言ったらおかしいですが、生き残るか、生き残れんかの大きな、私は要素になってくると、そのように思うわけです。

【司会】ありがとうございます。

白杵さん、では、最後にまとめとしてお願いします。

【白杵】CSRの私の仕事をベースにまとめさせていただきますと、企業は商品やサービスを提供して株主に配当を提供して存続しています。これは企業として最低限ですが、それプラス、法律を守る、人を育てるといような基盤的なCSRがあります。ただそれだけでは人間に一人一人個性があるように、企業の個性は出ません。繰り返し申し上げますが、「もっと何かできるはず」のような、独自の経営理念をもとに、独自のCSRをして企業市民としてよりよい社会に貢献するということが大切と思っております。

例えば、先ほど申し上げましたハンディキャップを持った方々を支援しますというのも1つの企業の特徴であります。私たちは化粧品や健康食品を販売しておりますので、学校や福祉施設に行き、メイクセミナーとか健康セミナーを行っておりますが、健康者は残念ながらお断りしております。特別支援学校や知的障害の方々の施設や、認知症で闘っていらっしゃる老人ホームなどに出向き、みなさまに生きがいを持って生きていただく、ちょっと特徴ある活動しております。企業のPRにもなりますし、特徴にもなります。NPOさんや行政さんと一緒に弱者の方々を支えていく世の中にしていきたいと思っております。

環境も、横浜では3つのRの夢と書いて、横浜3R夢（スリム）運動ということで、独自の活動をしています。同じ3Rでも行政によって特徴がありますので、ぜひその独自の特徴を生かして協力してよりよい社会を目指していきたいと思っております。ありがとうございました。

【司会】ありがとうございます。

白杵さん、先週、環境大臣表彰を受賞されたということで、これはどういった内容で受賞されたんでしょうか。

【白杵】今週の水曜日、石原環境大臣から環境大臣表彰をいただきました。受賞理由は、ファンケル独自の取り組みとして、CO<sub>2</sub>が一番出ているのは家庭からに着目し、従業員の家庭で電気、ガス、水道を

全国平均よりも減らしてくれた家族に、家族人数分だけギフトカードを贈呈する運動を5年間ずっと続け、大体5年間で甲子園球場50個分の森ができたことが一つ。

もう一点は、横浜市がCO-DO30というCO<sub>2</sub>削減の目標を掲げており、企業も目標値を設定して日々取り組んでいるんです。もし企業の目標値が達成できなかったら役員報酬の固定部分、いわゆる生活給を削減するという環境報酬を削減するという環境報酬を5年前から取り組んでおります。ちなみに企業のCO<sub>2</sub>削減は、ユニバーサルスタジオ全体が森になったCO<sub>2</sub>削減の吸収量ということで賞をいただきました。

【司会】ありがとうございます。

では、最後に、総括としまして、北川さん、お願いします。

【北川】今日は2人のすばらしいパネラーの皆さんに教えていただいて、ありがとうございました。

「もっと何かできるはず」という、そういうことで私もそう思います。それで、よい政治の競争というので善政競争というのを私はやっておりまして、よいことをやった人を褒めていくんですね。それをマスコミに、あるいは文章にする。そして、お互いが競争していくという善政競争というのをやっていて、あそこの企業がやっているのならうちもできるとか、あそこの市役所でやったことをちょっとばくってきて僕もやろうとか、こういう運動を行政で私はやっておるんですけども、今日、この三者が、原田さんを入れて四者が話したの中で、そうだなと、おれもやってみようとか、私もやってみようというのがあれば、やっぱり実践していただきたいんですね。今日はそんな話だったなと、まあまあいい話だったなということになしに、一遍うちでやってみようよというので小さなことから始める勇氣、自分たちのできる範囲で、例えばご家庭に帰られて、ご家族と一週議論していただくのも結構ですと。地域でも結構です。当然企業でも、ファンケルさんがいろいろ、自分のところの企業としてのあれだけじゃなしに、自分のところの従業員に対してでもそういうことをやっていらっしゃるのなら、やっぱりファンケルさんのいいところをまねして、うちもやってみよう。それが、私は1日にしてファンケルさんの企業風土ができ上がったわけじゃなしに、やっぱり長い間、根気よく続けられてきてDNAになってきたと。したがって、小さなことから始める勇氣、それを大河、大きな川にする根気というので、勇氣・根気論で、ぜひ今日、こんな辛気臭いシンポジウム

に、ほんとうに誰も帰らずに、業務命令かどうか知りませんが、ほんとうに熱心に私は参加をいただいて、すごいなと正直思っているんです。だから、そういう問題意識はやっぱり高いんだと思いますので、実践をしていただいて、その取りまとめのようなことがこの公益法人の役割になったら、これはほんとうに3年続けたら大分変わるのではないかなということを素直に思いましたし、うれしかったですね。小さなことから始める勇氣、それを大河にする根気ということで、ぜひ今年より来年、来年より再来年がこの輪が大きくなることを期待したいなど、そのように思います。

**【司会】** どうもありがとうございます。

以上で、パネルディスカッションを終了させていただきます。皆様、どうもありがとうございました。(拍手)

パネリストの皆様はしばらくそのままでご着席くださいませ。

それでは、最後に、閉会のご挨拶を、3R推進プロジェクト実行委員長、片渕昭人から申し上げます。

#### ◆総括◆

**【片渕】** ただいまご紹介をいただきました片渕でございます。

本日は、師走のお忙しい中、多数の方にご参集いただきまして、ほんとうにありがとうございます。また、北川先生をはじめ、パネリスト、コーディネーターの方におかれましては、貴重な事例やご紹介をいただきまして、ほんとうにありがとうございます。まことに本フォーラムは有意義なものとなりましたことを心からお礼申し上げます。

さて、先ほどのパネルディスカッションの中で、くしくも共有価値の創造に関する言及がございました。従来環境の保全といえば法による規制を通じて、これを強制的、一方的に維持しようとする対策が主流でしたが、2000年に循環型社会形成推進基本法が制定されたことにより、廃棄物を資源としてとらえようとする、いわゆる3Rの概念が国の施策に本格的に反映されるようになってまいりました。

しかしながら、その一翼を担ってきた私ども廃棄物処理業界からは、以上の経緯を見ますと、3Rの推進は必ずしも順調なものではなく、紆余曲折、試行錯誤の連続であったと申し上げざるを得ません。3Rを推進するためには、まず、そのような取り組みに積極的、協力的である優良な廃棄物処理業者が企業から選ばれるようにならなければなりません。では、企業がそういった行動をとるようになるため

には何が必要でしょうか。それは、優良な廃棄物処理業者を選ぶことにより、3Rを推進する企業の製品やサービスを市民が好んで購入するような社会を築くことにほかならないと私どもは考えております。

産業廃棄物という、企業側の課題であって市民には関係ない代物であると思われがちではありますが、そうではなく、市民こと当事者意識を強く持つことが3Rを推進する大きな原動力となることをどうぞご理解いただきたいのであります。

ただ、戦略性のない、情緒的なCSRにより持続可能な3Rの推進を企業に期待することは、昨今ではもはや限界を迎えつつあります。先に申し上げました私どもが目指す社会においては、3Rの推進をすることにより、1、企業は市民から自社の製品やサービスを支持されるようになり、2、産業廃棄物処理業者は、企業からの受託の機会が増えるようになり、3、市民は3R社会という豊かな生活環境を享受できるようになることとなります。基調講演にもございましたが、そこにはまさに事業者にとってよし、処理業者にとってもよし、市民にとってもよしの三方よしの精神がかいま見えます。ここに3Rの推進について企業、廃棄物処理業者、そして市民が共有できる新たな価値が創造されることにお気づきでしょうか。

持続可能な3Rの推進を精神論で語るのではなく、これにかかわる全ての利害関係者に対してインセンティブとなる利益を見出しているのです。重要なことは、この価値観を共有しているという点であり、そのためには企業、廃棄物処理業者、市民、そしてそこに行政機関も含めた連携体制を整備、強化していかなければなりません。本日の基調講演とパネルディスカッションを通じまして、私どもが皆様に発信し、受けとめていただきたかったメッセージはその1点でございます。

それから、第2回のシリーズ、これも引き続き本フォーラムを開催するつもりでおります。本日の講演での議論を踏まえまして、その中で支持いただいた共有価値の創造について、さらに深掘りすべく、これに先進的に取り組まれている企業に焦点を当て、理念や市民とのかかわりを中心に皆様とともに考えてまいりたいと思います。詳細が確定いたしましたら、改めてご案内を申し上げます。ぜひご参加いただきますようお願い申し上げます。閉会のご挨拶とさせていただきます。

本日は、どうもありがとうございました。(拍手)

以上



第2回  
地球環境保全のための

# 3R推進 フォーラム

～地域における3R社会の未来～



未来の地球環境を考えよう



開催日時：平成26年12月5日(金) 13時30分～16時30分

開催場所：阪急うめだホール(阪急百貨店うめだ本店9階)

当日来場者数：362名

■主催 公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会

■後援 近畿地方環境事務所／建設副産物対策近畿地方連絡協議会／大阪府／  
大阪市／堺市／豊中市／高槻市／枚方市／東大阪市／  
大阪湾広域臨海環境整備センター／日本環境安全事業株式会社大阪事業所

プログラム：開会挨拶 國中 賢吉 (公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会 会長)

第1部 基調講演

『創発的破壊～リサイクルとイノベーション～』

米倉誠一郎氏 (日本元気塾塾長／一橋大学イノベーション研究センター教授)

第2部 パネルディスカッション

『共有価値の創造に向けた企業の挑戦』

〈パネリスト〉

米倉誠一郎氏 (日本元気塾塾長／一橋大学イノベーション研究センター教授)

太田 健氏 (キリン株式会社 CSV本部 CSV推進部 企画担当 主幹)

赤澤 健一氏 (公益社団法人大阪府産業廃棄物協会 理事

リヴァックスホールディングス株式会社 代表取締役社長)

〈コーディネーター〉

木場 弘子氏 (キャスター・千葉大学客員教授)

閉会挨拶 片渕 昭人 (公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会 副会長)

## PROFILE



**米倉誠一郎 氏** (よねくら・せいいちろう)

日本元気塾塾長／一橋大学イノベーション研究センター教授

1953年東京生まれ。アーク都市塾塾長を経て、2009年より日本元気塾塾長。一橋大学社会学部、経済学部卒業。同大学大学院社会学研究科修士課程修了。ハーバード大学歴史学博士号取得(PhD.)。1995年一橋大学商学部産業経営研究所教授、97年より同大学イノベーション研究センター教授。現在、プレトリア大学GIBS日本研究センター所長、季刊誌『一橋ビジネスレビュー』編集委員長も務める。イノベーションを核とした企業の経営戦略と発展プロセス、組織の史的な研究を専門とし、多くの経営者から熱い支持を受けている。著者は、『創発的破壊 未来をつくるイノベーション』、『脱カリスマ時代のリーダー論』、『経営革命の構造』など多数。



**太田 健 氏** (おおた・たけし)

キリン株式会社 CSV本部 CSV推進部 企画担当 主幹

1961年東京生まれ。1984年4月慶應義塾大学商学部卒業。専攻はマーケティング(村田昭治研究会)1984年4月、キリンビール株式会社入社。1990年5月東京支店にて輸送、営業を経て以降、経営企画、物流、調達、の業務を経験。株式会社横浜アリーナへ出向。キリンビール株式会社復帰後CSR推進部での業務を経て、2013年1月よりキリン株式会社CSV本部CSV推進部 企画担当者主幹に就任。現在CSVの創出に向けてキリンビール・キリンビバレッジ・メルシャンの各社と協働中。



**赤澤 健一 氏** (あかざわ・けんいち)

公益社団法人大阪府産業廃棄物協会 理事／リヴァックスホールディングス株式会社 代表取締役社長

1961年兵庫県生まれ。同志社大学大学院博士前期課程修了(修士)。1984年大栄サービス株式会社(現株式会社リヴァックス)入社。2004年代表取締役社長就任。同社発行の「CSR報告書2013」は環境省などが主催する「第17回環境コミュニケーション大賞」環境報告書部門で奨励賞を受賞する。2014年株式会社リヴァックス代表取締役社長を辞任。現在、リヴァックスホールディングス株式会社代表取締役社長として廃棄物処理業の新たな可能性を求め様々な取り組みを行っている。



**木場 弘子 氏** (きば・ひろこ)

キャスター／千葉大学客員教授

岡山市生まれ。千葉県出身。千葉大学教育学部を卒業後、1987年TBSにアナウンサーとして入社。在局中はスポーツキャスターとして、『筑紫哲也ニュース23』など 多数のスポーツ番組を担当。1992年、与田剛氏(NHKプロ野球解説者)との結婚を機にフリーランスに。現在は妻、母、キャスターの三役をこなす存在として、テレビ出演、コーディネーター、講演や執筆活動など多方面で活躍。教育や環境・エネルギーに関わる活動が多い。生活者の視点を大切にメディアや国の審議会等で発言している。昨年4月に千葉大学客員教授に就任した。

## パネルディスカッション

## 『共有価値の創造に向けた企業の挑戦』

【司会】皆様、お待たせいたしました。ただいまからパネルディスカッションを始めさせていただきます。

まずは、パネリストの皆様をご紹介します。

舞台中央より、先ほどご講演いただきました米倉誠一郎さんです。(拍手)

キリン株式会社CSV本部CSV推進部企画担当主幹、太田健さん。(拍手)

公益社団法人大阪府産業廃棄物協会理事で、リヴァックスフォールディング株式会社代表取締役社長の赤澤健一さんです。(拍手)

そして、コーディネーターは、キャスターで千葉大学客員教授の木場弘子さんです。(拍手)

ディスカッションのテーマは、「共有価値の創造に向けた企業の挑戦」です。

それでは、皆様、よろしくお願いいたします。

【木場】順番は私でよろしいんですね。皆さん、こんにちは。きょうは、ようこそいらっしゃいました。また、お招きくださいませありがとうございます。米倉先生、先ほどのご講演、ありがとうございます。大変示唆に富んだ、そしてアクティブで、これから90分座っていただくの大丈夫でしょうか。よろしくお願いいたしますと思います。

さて、今回は第2回目ということでございますけれども、第1回目は、「地域における3R推進への道筋」をテーマに、行政の取り組みについて、どうやらお話をじっくりとされたと同っております。その中で提案されたことは、1つは、ウイン・ウインの関係が大切で、お互いがステークホルダーで助け合えば地域はよくなっていくということと、2つ目は、“三方よし”といえますか、3Rを推進するためには、事業者よし、処理業者よし、市民よしでいこうというお話、それから3つ目が、きょうのテーマにも関係するんですが、これからはCSRではなくということはないですが、CSRからCSVへ新しい価値をどうつくっていくかということで、3つのことが整理されたというふうに伺っております。

そこで、今回のテーマでございますが、今回は行政の役割から企業の役割に焦点を移しまして、今後3Rを進めていくためには、原動力となるCSV（共有価値の創造）について議論を進めてまいりたいと

思います。

それでは、ディスカッションに入る前に、新たに登場したお二方につきまして、自己紹介も兼ねて、日ごろどういったお仕事をされているか、活動されているか、お話をさせていただきたいと思います。

まず初めに、キリンの太田さんから、どうぞよろしくお願いいたします。

【太田】皆さん、こんにちは。キリンの太田でございます。本日はフォーラムへのお招き、どうもありがとうございます。きょうは、東京の中野の本社のほうから、日帰り出張でやってまいりました。泊まれなくて、ほんとうに残念。私、震災の後4年間、ずっと大阪のほうの統括本部でもって仕事をしておりました。大変懐かしく大阪のまちをきょう見て、随分変わりましたね。

きょう、CSVのお話を差し上げることになるんですけども、今、木場さんのほうから、“三方よし”というお話があったと思うんですけど、私も、1976年、明治19年になるんですけども、スプリングバレーブルワリーという、横浜の山手で一番最初に日本のビール産業が始まったところの歴史を汲むものなのですが、三菱系のグループです。三菱では三菱三綱領というのがありまして、140年間ぐらい、ずっと商売の指針にしているもののしょっぱなに所期奉公というのがあります。つまり、期するところは社会へのご奉公でありますと、それができれば皆様に物を買っていただける、こういう考え方ですね。CSV、多分全く同じような考え方、日本で古くからあった考え方ではないのかと思います。初めてCSVという言葉聞く方もいらっしゃるかもしれませんが、私、できるだけ事例や何かを紹介しながら、こういうことかなというふうにお話ができたらばなと思ってきょうは参りました。

ちょっとだけ、うちの会社の沿革を。先ほどお話しさせていただいたとおり、日本で最古のビール醸造所の流れを汲む会社なんですけど、1907年にキリンビール株式会社ができ、その後にキリンビバレッジ、つい最近ではメルシャンという会社が一緒に仕事をするようになりました。どうでしょうね。このような形でもって、例えばビール、ビバレッジはキリンだよと思うんですけど、メルシャンぐらいまでく



ると、そうかいと。つまり、私たちの企業が今一番やらなきゃならないことというのはブランドです。ブランド、いかに1つのキリンというものを皆さんに知っていただいて好きになってもらえるかという活動、その1つの手段としてCSVを使っているということでございます。

キリンというふうに言いましたけど、先ほどお話ししたとおり、新しくできた会社です。キリンビールとビバレッジとメルシャンが一緒になってという形です。国内で総合の飲料を全部束ねた会社ということになります。どうでしょう。この話は後でちょっとしようかなと思っていたんですが、先ほど、シュンペーターさんのイノベーションの話が先生がされていたと同じような形でもって、それから10年後ぐらいででしょうか、1962年にアルフレッド・チャンドラーという人が、この人、経営戦略の大家ですけども、『ストラテジー・アンド・ストラクチャー』という本で、組織は戦略に従うのだというふうに言っているんですが、日本の会社で戦略に従って組織を変えているところってなかなか少ないんじゃないのかな。それを愚直にやったという事例のお話を、きょう、ちょっと差し上げられるのではないのかなと思っています。

国内の話をは今日はいたしますので、海外の話は参考までにということになりますが、こんなような会社群を世界で展開しているのがキリンホールディングスで、国内では、先ほどお話ししたような3社が1つの会社になったという形になります。

ちなみに、ビールとかビバレッジの製品、よく御存じだと思いますけど、ウイスキーなんかですと、後で話も出ますが、富士山麓とか国産でつくっているものがありますが、ジョニーウォーカーとかホワイトホース、J&B、あと、フォアローゼス、ヘンリーマッケンナ、I.W.ハーパー、こんなようなものも私どもがライセンスで扱っているものですから、いつも大変ご愛顧いただいているのではないかと思います。高いところからご挨拶させていただきます。ありがとうございます。

それで、先ほどもちょっとお話がありました、ブランドの約束というのを新しい会社になってつくりました。飲み物を進化させることで、みんなの日常を新しくしていくんだというふうに言っています。これ、きょうお話を聞いて私も納得がいて、こういうふうにとまとめればいいんだなど。僕、ずっとイノベーションだと実は言っていたんですけど、イノベーションというと、ストラクチャーを全部変えなきゃイノベーションにならないのかなと思うんです

が、飲み物でできるイノベーションももしかしたらあるのかな。例えば200円ぐらいでもって、世界を変えるとは言いませんが、自分の日常の行動を変えるようなことができるということももしかしたらイノベーションかなと思っていて、先ほど先生の話聞いて、ああ、ちょっと結びついたなと思って納得しました。

例えば、ボルヴィックなんていうのは、ワンリッター・フォー・テンリッターというキャンペーンをさせていただいています。水の会社が水を使ってアフリカの水をきれいにする。1リットル買っていた分、10リットルの水にするみたいなキャンペーンをずっとやってきました。これって、1本買えばよろしいということですよ。わざわざアフリカに行かなくてもいいし、何か募金箱にお金を入れる必要もなく、自分が飲みたいと思ったときに1本買うと、そういうふうなドネーションができるなんていうのも、もしかしたら日常をちょっと変えることができるのではないのかなと思っています。

先ほどお話ししたとおり、キリンはCSVを経営戦略の中心に置きましたので、CSV本部というものをつくり、CSV推進部、私が所属している組織体をつくりました。新しい商品を次々に生み出していくということで、R&Dを一括にし、それから、その商品と生活の中で豊かな共有価値をお客様と一緒につくっていく形を推進していくということでCSVをつくっている形になりますが、多分、日本の会社の中で一番最初ではないかと思いますが、部門名称を変えたという形になります。この部門名称を変えた働きという話を、きょう、後でさせていただければありがたいなと思います。

もし、ご興味がある方、こういうような本が出ています。一番左側にありますが、マイケル・ポーターさんが一番最初に言っている、多分、2011年6月のハーバードビジネスレビューだと思いますが、CSVを一番最初に語った論文そのものです。それから、真ん中が『CSV経営』という本になります。これは水上さんとか赤池さんが書いていらっしゃる本でしょうか。うちの会社、初期のころのCSVの考え方についてまとめられています。次が『会社は社会を変えられる』、これは東京財団さんが書いた最新の本ですけども、こちらでも私どもの考え方をちょっと載せさせていただいておりますので、もし、もうちょっと勉強されたいという方がいらっしゃったら、ぜひこのような著書を読んでいただいたらよろしいかなと思います。

【木場】 どうもありがとうございます。今のページ



そのままに、一番下の3行に触れませんでしたけども、「CSV キリン 太田健」で検索されますと取材ページが出てくるということで、ご興味のある方はぜひこちらも検索してみてください。

今、ほんとうに導入の部分のキリンという会社についてご説明いただきましたけれども、米倉先生、何となく全般的にキリンのイメージってどんなふうに捉えていますか。深い話はまた後にしますけど。

【米倉】ビールでしょう。

【木場】ほんとうに全般的ですけど。

【米倉】痛風の僕としてはビールですよ。宿敵キリン。キリン、好きですよ。

【木場】先生、痛風なんですか。

【米倉】痛風です。紛れもない痛風です。

【木場】でも、随分歩き回って、60分、90分の講義で、相当運動量あると思いますけど。

【米倉】あそこで消化した分、飲むんですよ。

【木場】わかりました。すいません。

【太田】最近、実はプリン体ゼロでそういうような商品も出ているので、痛風の人もいいかな。

【米倉】あれがね、まずいの。

【木場】ああ、そうなの。

【米倉】僕は言いたい。ちょうど言いたかったんです。昔の端麗Wのほうがよかった。新しくしてまぶなくなった。

【太田】すごい。端麗Wを知っている方がいらっちゃった。随分と昔から病歴をお持ちで、ありがとうございます。

【米倉】ばかにしてるな。

【太田】いえいえ、違う違う。

【木場】痛風向けでもおいしいものをつくるのを次のまた1つの課題としていただければ。どうもありがとうございます。

では、続きまして、今回、赤澤さんには業界も代表してということでございますが、自己紹介よろしく願いいたします。

【赤澤】ありがとうございます。リヴァックスホールディングズの赤澤と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まず、当社の概要を少しご説明させていただきますと、当社、ホールディング会社の下に事業会社が3社ございます。まず工場系の廃棄物、産業廃棄物をメインに扱って、泥状の廃棄物、いわゆる汚泥ですね、有機性廃棄物を燃料や肥料原料にリサイクルするためのプラントを持つ株式会社リヴァックス、そして伊丹市、西宮市で、それぞれ家庭ごみ、そして事業ごみの回収、いわゆる一般廃棄物の収集運搬

を行う会社が2社ございます。そして、それぞれの会社で4年ほど前から、いろんな新しい事業も展開しているというところでございます。

当社の経営理念なんですが、まず、パートナーへの貢献。私ども、社員をパートナーと呼んでいます。パートナーへの貢献、そしてお客様への貢献、地域社会への貢献、そういった理念を持っております。これは、いわゆる労働環境や会社に不満がある社員、従業員がお客様や社会に貢献できるはずがない。まず、会社という組織は社員、従業員とベクトルを合わせて事業を行う。そして、ベクトルが合う、イコール、持続成長可能な事業の構築と一緒に取り組む。そして外部に向けたいわゆるCSR、企業の社会的責任として、お客様への貢献、地域社会への貢献になると考えて、最初のころから社内向けの取り組みを行っていたと。そして、それと同時に、十四、五年ほど前からNPO団体と一緒に、地域にかかわるような社会貢献事業と一緒に取り組んでまいりました。このあたりはまた後ほど詳しくお話をさせていただきたいと思うんですが、そのあたりの経験を中心に、皆さんのお役に立つようなお話ができればいいなと思っております。

以上でございます。

【木場】どうもありがとうございます。今のお話を伺ってまして、非常に会社の中のコミュニケーションを大切にされているのかなというのが伝わってきました。米倉さん、こういう経営者が、やっぱり会社の経営環境あるいは労働環境に不満がある社員がお客様に優しくできるはずがないという、こういう発想は非常にうれしいですね、社員だったら。

【米倉】うん、ほんとうですね。しかし、すごい振りですね。うれしくないと言ってほしいんでしょう。

【木場】ええ。私、休憩させないコーディネーターと言われておりまして、気を抜けない。自分の番じゃないときも矢が飛んでくるので、非常に構えてお待ちください。

【米倉】もっといい矢がいいな。

【木場】ほんとう？ さっきのビールはよかったんですね。

【米倉】あれはよかったですけど。こういう会社はいいですねって、悪いって言いようがないじゃないですか。いいですよ。

【木場】そうか、わかりました。申しわけありません。

それでは、本題にそろそろ入らせていただきたいと思っております。

最初のテーマは、CSRからCSVへということでご

ざいますけれども、きょうは3つのテーマを用意いたしましたので、1つ目はこれでございます。やっぱり3R推進のためには企業自身の努力や協力というのは不可欠でございますけれども、今後は、先進的な企業においてはCSRの取り組みにとどまらず、CSVに向けてやっぱり取り組みをしていかなければいけないというふうになっておりますけれども、太田さん、伺ったところによりますと、キリンさんはもちろんなんですが、日本の中でCSVというセクションをつくっているのはまだ四、五社しかないんじゃない、そんなレベルですね。そんな中でも、今、先進的な企業の1つがキリンさんということなんですけれども、このCSVを経営戦略の中心に据えるということになった経緯なども、ちょっと出だしから教えていただけたらと思います。

**【太田】**ありがとうございます。今、先進的というふうにおっしゃっていただいたんですけど、決して先進ではなくて、先行しているだけで、進みたいなと思って、今、もがいている最中というふうに思っていたらと思います。

先ほどちょっとお話ししたとおり、3つの事業会社を束ねました。一番必要なことは、企業ブランドというのをやっぱり立たせることが必要だということで、そうなることで、どうでしょう、飲み物はやっぱりコモディティ化していますから、安売りにさらされますし、飲み物ですからそんなに差別優位性があるわけではありません。もちろん機能性がついているようなものというのもあるんですけども、じゃ、どうしたらいいんだというのが、多分1つ、経営者の課題なんじゃないかなと思います。

私、今はキリン株式会社のCSVなんですけれども、その前の部署はキリンビールのCSRの担当者でした。今、CSR部門はないです。CSVに全部統合されてしまっているんですけど、私どもの社長がまだホールディングスの重役だった時代に、ダボス会議とか、あと、ザ・コンシューマー・グッズ・フォーラムとかに行くと、海外の経営者たちとちょっと話をしたら、どうもニュートリションとかウオーターとか言っていて、日本の会社の経営者の言っていることとちょっと違うなど、社会課題がやっぱりすごく中心になっているみたいだなという印象を受けて帰ってきたと聞いています。

その後、震災があって、私ども仙台工場は被災してしまっただけなんですけども、やっぱり同じような形で、企業のほんとうの存在意義って何なのかねと。どうでしょう。価格競争とか物の競争というのもいいんですけども、そうじゃなくて、やっぱり社会に共

有するような価値を出し続けて、それをサステイナブルだと思って物を買ってもらえるような側面もどうしても必要なんじゃないかと思ったというふうに聞いています。ですので、キリンの場合はいきなりCSVをチャレンジ始めたというよりは、いろんな経緯があってCSVにチャレンジを始めたということになります。

先ほどお話ししたとおり、ブランドを機軸とした経営、またはキリンだとすぐにCSVとお思いになるかと思いますが、実はこの図のとおり、商品ブランドと、それからCSVで選んでもらう会社になりたいなという戦略で考えています。

CSVって、基本的にこの図のとおり、社会課題の解決、それから企業の成長を両立するものだということに言われていますが、これ、ダイレクションですね。方向性を示すもので、決してCSRがこの位置にあるわけじゃないです。青いところ全部がそうでしょう。なんですけど、より社会的価値と、それから経済的価値を両立するものというような考え方で、この図をつくって利用しています。上に書いてあることはポーターさんが言っていることと全く同じです。

CSVの部門ができるときに、私、部長と一緒に社長のところに行きました。いろんな図をかいてきました、CSRがあって中がCSV、逆があったりとか重なってる図とか。いや、そうじゃないんだよなど。やっぱり一歩進み出て、ここにもイノベーションと書いてありますけれども、一歩進んでCSRから脱却してCSVに、言っておきますが、私、CSRを否定するものでは全然ないです、というような経営コンセプトを進めたいのだ、だから、社内ではあんまりこれがCSRかCSVとかという問題じゃなくて、バリューをどういうふうにやってお客様と一緒につくっていくかとか考えようじゃないかということです。

CSRに詳しい方は御存じかと思います。いわゆるマテリアリティと呼ばれているものです。かたいですね。会社が重点的な課題として捉えるものは何ぞというふうに言われたら、こういう図を書いています。人権、労働とか公正な事業慣行とか環境みたいなものというのは、必ずどこの会社でも守らなければいけないものということでもあります。食品会社ですから、もちろん食の安全安心がついてこなかったら成立しません。プラス、飲み物があることで人と人、人や社会がつながったりとか、ほっとしたり、よかったねとかと思えるような状況をつくりたいとか、あとは健康みたいなところでやっぱり先進国でありますとどうしても課題としては大きなもの

があると思っておりますので、この2つを二大テーマ、キリンならではのテーマと考えております。

後で詳しくお話しはいたしますが、CSVは3つのアプローチがあります。これもそこに書いてございます。商品・サービス、バリューチェーン、それから地域社会ということになるんですけど、じゃ、これってどんなことというのは次のセッションのところで詳しくお話をさせていただきたいと、事例をもってお話をさせていただきたいと思っています。

**【木場】** じゃ、これは次のテーマの目次みたいな……。やっぱりCSVって、正直、このお仕事を頂戴したときもあまり私も理解しておりませんで、世の中的にはCSRはかなり定着した感があり、私も、例えば企業さんが出すCSRレポートというところで、社長対談というような仕事もここ何年か多いんですけども、どうもイメージとしては、社会的貢献ではあるんですが、本業というよりは、例えば環境のためにどこどこに森林を何万本植えましたとか、そういうことを何かPRされるようなイメージがあったんですが、CSVというのは、まさに本業においていかに貢献して、自分たちの企業も潤うかというところなんじゃないかな、そのあたりの取り方。

**【太田】** そうです。考え方としては、多分、CSRの本業への統合とか戦略的なCSRと呼ばれているものと何ら変わりはないと言っては何ですけども、考え方としては全く同じだと思います。

ただ、後でまたお話しする機会があるかもしれませんが、私、CSRの部門にいるときに、うまくCSVを本業統合することが残念ながらできませんでした。ところが、ちょっとコンセプトを変えると、やっぱりある意味では社会と共有できる価値というのはつくりやすくなるのかなとかというのがありますので、1つの解決方法としてはCSVというのは経営コンセプトの中では有効なのではないのか。全部CSVにしたらいけないか、そんな不遜なことは全然言いませんが、そういうチャレンジもありなのではないのかなというふうに考えています。

**【木場】** どうもありがとうございます。

では、続いて、赤澤さんにとってのCSVについて、お考えをお聞かせください。

**【赤澤】** ありがとうございます。ほんとうに10年ぐらい前から多分そうだろうなという思いの中、ちょっと信念っぽくなるようなお話なんですけど、私にとってのCSVという捉え方をお話しさせていただきます。

この図にあるように、まず、日本の昭和20年代から30年代はモノがなかった時代、つくれば売れる時代ですね。大量生産によって手ごろな価格であれば

売れる時代、いわゆるプロダクトアウトの時代ですね。しかし、そうやっているうちに日本中にモノが行き渡ってきて、だんだん大量生産ではモノが売れなくなってきた。そこで、消費者の声を聞こうという時代になってきたと。マーケットインですよ。

しかし、そこからもう1つ進めて、成熟した現代では消費者自身も何が欲しいかわからなくなってきていると。一方、社会が成熟化して、そして超高齢化に向かっている現代社会ではさまざまな社会問題を抱えていると。働く人たちのスタイルや会社が事業を行ういわゆる事業環境、社会環境そのものが変化してきているなというのを感じている、そして、みんなが悩んでいる時代じゃないのかなと思います。

そこで、地域の社会や生活者の人たちの中に入って行って、実際にいろんな話を聞こうよと。ソーシャルインという考え方だと思います。これこそ、ステークホルダーそのものとの対話というふうに思っています。そして、社会問題に対して、自分たちの持っている、企業が持っているリソースが生かされていることが、いわゆる共通価値の創造、CSVだと考えています。そして、その目標が地域社会のインフラストラクチャーである私たちだからこそ担える役割、事業があるんじゃないのかなと思っています。そこからソーシャルアウト、ビジネスアウトですね、いわゆるソーシャルビジネスというような概念に発展していて、それが自社の事業に少しずつおりてくるんじゃないのかなと思っています。そして、そういったことを考えていくのがCSVじゃないのかなと思っていますね。

実際、私もなんなんですけど、そういった思いがありまして、NPO団体と協働で社会貢献事業や学校への出前事業、あとは大学生、中学生、高校生を受け入れたり、JICAプログラムで外国人研修生を受け入れたりとか、あとは自治体の研修会なんかにも出向いて、環境のこととか自然のこととか、そういったのをお話をさせていただくと。そういった自分たちの活動をどんどん社外に発信していかなきゃ、だんだんやっていくことがたまってきました、たまってきたというか、社内で経験が増えてきましたので、そういったものをどんどん外に出してこうよということで、10年以上前から毎年、報告書、報告書を出したときは環境報告書、途中から環境社会報告書という形になってきました。

それで、事業が少しずつ成長してきて、やはり経済面もちゃんと皆さんに報告しなきゃいけない。環境、社会、経済という切り口になったので、その当時、経済同友会が環境、社会、経済のトリプルボト



ムラインがCSRだよねみたいなお話になったものだから、そこからCSR報告書というような形になりました。

ただ、途中から、ISOで議論されている26000のドラフトをもとに、大体2006年からCSR報告書というものに形を変えて、そしてコミュニケーションツールとして、どんどんどんどん外に発行しています。現在、CSR報告書の発行部数が、リヴァックスだけで多分9,000冊ですね。年度末にはそれがほぼ全部なくなってしまうという感じになります。

そういった発信をすることによって、我々のステークホルダーからのフィードバックが皆いろいろな勉強になりますし、そのような関係性をベースに、内部、外部、内部は社員、従業員を含めて、外部はさまざまなステークホルダーとの対話によって構成されるもの、そうしたものが気づきでありCSV、共通価値の創造じゃないかなと思っています。

そして、私たちでは、そのような地域の社会問題から生まれた事業が今少しずつ育ちつつありますので、また後ほどそういったお話もさせていただきたいと思います。

**【木場】**ありがとうございます。今のページで、何年に何をという、これですね。これ、今触れませんでしたけれども、青字の部分を見ると、さまざまな賞を毎年のように受賞している報告書なんですね。非常に印象に残ったのは、コミュニケーションツールとして外部にどんどん報告書を出しているという点で、何となく一般の企業って、とりあえず形だけCSR報告書をつくっておかなきゃという何か義務感的なイメージを持つんですが、これをツールとして9,000冊活用するというのは、ほんとうに地域、住民にわかってほしいという気持ちが、私、そこが非常にすごいと思うんですが。

**【赤澤】**ありがとうございます。情報公開という言葉があって、当然ディスクローズ、情報公開していきましようということなんですが、よくあります。わかってくれないからどうしてこうみたいな話じゃなくて、それはアカウントビリティだよと、説明責任だよ。わかってもらえるまで徹底的に自分たちが責任を持って情報発信していこう、そうしたことによって初めて理解していただけるというスタンスが必要じゃないのかなと思っています。

よくあります。モノを買ってくれない消費者が悪いと言った途端に、メーカーはアウトですよ。買ってもらうためにどうするんだというのと全く同じ考え方が必要じゃないのかなと思っています。

**【木場】**つくって終わりじゃなくて、それをわかっ

て伝わって初めて生きるというお考えでしょうね。ありがとうございます。

米倉先生、お二方の発言を聞いて、いかがでしょうか。

**【米倉】**ほんとうにいい傾向だと思うんですね。社会的な価値と経済的な価値は、かつては矛盾しててもいいんだと。そういうときに、やっぱり一致していくという方向でこういういろんな言葉が出てくるのはいいんですが、実はこれ、昔からちゃんとやられたことだと思うんですね。

僕、マイカル・ポーターでちょっと足りないと思うのは、シェアードバリューと一番初めに言ったのはトム・ピーターズたちの『エクセレント・カンパニー』で、あのときに、企業文化というのをどういうふうに訳すかという話だったんですね。企業文化というとき、彼らはシェアードバリューだと、会社の中で共有されている価値が企業文化だと言ったんですね。文化というのは、我々が持っている文化でもタブーというのがあるわけですよ。これはやっちゃいけないと。いい国もあるんですよ、文化が違うから。そのときに、これ結構大事だなと思ったのは、例えばホンダだったらホンダのシェアードバリューの中で、おやじだったらどうするかな、本田宗一郎さん、おやじだったらどうするかなというのが非常に大事な価値なんだと。

僕、これから行くときに皆さんも絶対に抱えるのは、普通の状況は絶対いいですよ。社会的価値と経済価値は一致している、それが一番だ。みんなそうなんですけど、残念ながら、我々の日常企業活動であると、これ絶対に矛盾するときに来るんですよ。例えばキリンさんでも、しょせんアルコール売っているんでしょ、アルコールよくないじゃないですかと言ったときに、そうか、うちは何でここを切り分けるんだと。産廃するんだって、もともとごみが出るからおかしいんじゃないですか。そこに手をつけないで、後からやってもしょうがない。いろんな矛盾が出てきたときに、我々はここで手を打っているんですと。それをきちっと社員が言えるための実はシェアードバリューなんですよ。だから、お題目で、みんながこれから経済的価値と社会的価値を一緒にしていこうと、これ、誰も否定しないと思うんですね。

ただ、我々が例えば近代化、こんなに電気をたくさん使ってすばらしい暮らしをしているわけですよ。今まで地球って無限だと思っていたから、それ、いいじゃないと。ところが、ここでこういう暮らしをしていることが北極のシロクマに問題があると、

じゃ、そこをどこで折り合いをつけるかという話なので、シェアードバリューといったときは、結構重い課題を背負う。ですから、これ、みんな考えていかなきゃいけない話だと思うんですね。それはやっぱり今赤澤さんが言ったようにアカウンタビリティで、我々はここまでこういうことで考えている、これしかないんですよ。絶対価値はないから。

そういう意味では、とてもいい方向に行っていると思うんですが、シェアードバリューって、お題目でこっちだったらみんな納得する、いいよねではなくて、ほんとうに矛盾が起きたときにどこで自分たちを決着づけるかをきちっと考えるプロセスで、それを社会に表明していくプロセスだということを忘れてはいけなかなと思いました。

【木場】ありがとうございます。太田さん大きくうなずいていましたけど、やっぱりそういった相反する価値がぶつかり合ったときに、どう説明するかというところは出てきますね。

【太田】そうですね。例えばアルコールの会社の場合だと、必ずARP、ARPってアルコール・リレーテッド・プロブレムというんですけども……。

【木場】そのすごく長い言い方はどういうこと……。

【太田】アルコール関連問題を取り扱う部署って必ずあって、やっぱり適正飲酒の問題だとか、あと飲酒運転の根絶の問題だとか、真剣に取り組まないと社会からやっぱり取り残されてしまう。当たり前のことですよ。というようなことが例えばあったりとか、あと、私どもの会社だと、意外かもしれませんが、例えばキリンライトビールとか、すごい昔から結構アルコールが低いものでありますとか、あと、味の問題はあるかもしれませんが、プリン体が低かったりとか糖質が低かったりというものをつくっています。

例えば、来年なんですよ、のどごしという商品があって、のどごしオールライトというのがあるんですが、これ、糖質がゼロでプリン体がゼロでカロリーが低い。だから、気にしているお父さんも、まあ、ちょっとごくごく飲めるかなというような、選択肢の1つですね。そういうのを広げたりして、じゃ、どれを飲まれますかというような努力をしたりってやっぱり不可欠ということになりますね。

【木場】さまざまな選択肢をお与えするということが、今のお話を伺っていると、ビールをつくるだけではなくて、その後の飲み方、飲んだ後に起きる事故、そっちのほうまでもやっぱり目を向けておかなきゃいけないということですね、会社としてね。

【太田】そうですね。会社のサスティナブルってど

うということかと言ったら、やっぱり長く、たくさんとは言いません、短い時間にたくさん飲んでもらいたいわけじゃなく、長くずっとアルコールを楽しんでもらう、食事と一緒に楽しんでもらうというのが使命だとしたらば、そういう選択肢はやっぱりあったほうがいいのかと思いますね。

【木場】赤澤さんも、米倉先生のご提言どうでしょうかね。

【赤澤】私、ピーター・F・ドラッカーの言葉が好きで、組織、企業はやっぱり社会に生かされているということ認識しなければいけないという、まずそこが大前提になると思います。そして、生産向上も含めて、事業活動で何らかの環境負荷を与えるわけですよ。例えば煙が出たり、あとは車を走らせれば化石燃料が必要で、かつ、そこからはCO<sub>2</sub>、ばい煙が出ると。ただ、それを必要悪と考えるのではなくて、我々の事業活動において、そういったものはしかと出るんだと。出るということちゃんと理解して、かつ、それを無駄にしない、もしくはその使った以上の価値をお客様なり社会なり地球なりに出していくというような、そういったことを常に考えていく事業活動というのが必要じゃないのかなと考えるところですね。

【木場】リスクはリスクとしてきちっと公明正大にお伝えした上で、それをどうカバーしているかというところもきちっと。

【赤澤】当然、低減というのも前提になります。それを減らしていくという取り組みですね。

【木場】透明性が大事だということがよく伝わってきましたけれども、さて、本フォーラムのメインテーマはやはり3Rでございまして、3R推進の重要性についてもちょっとここで整理をしたいと思うんですけども、2000年に循環型社会形成推進基本法が制定されたのを契機に、やはり3Rの概念というのが、ここ14年になりますか、国の施策に随分反映されるようになったんではございますが、しかし、近年、リサイクルされたものの受け皿であるものづくりの海外移転があったりですとか、新興国の製造業との熾烈な価格競争があったりして、その取り組みというのが少し下がってきている、関心が下がってきているように感じられるところもあります。

そこで、地域における3R推進の重要性について、ここで再度お二方にお話を伺いたいと思うんですが、まず、赤澤さんからよろしく願いいたします。

【赤澤】おっしゃるとおり、3Rの推進とか廃棄物の適正処理、これはやっぱり企業とか排出事業者にも責任を求めて、それをしっかり進めるものだという

ことなのですが、現実には不適正な処理事案というのが発生しているというのが現実問題としてあります。

いわゆるCSR、企業の社会的責任とかコンプライアンスというのをよりどころにしているということであれば、やはり企業は直接的にメリットが感じられないものに対しては腰が引けるといえると思います。端的な言い方をすれば、廃棄物処理法や各種リサイクル法の趣旨に沿わないことによるリスクよりも、事業コストが上がる、そのリスクのほうを強く受けとめているような感じがありますね。

そういった意味では、従来のCSR、企業の社会的責任とかコンプライアンスとは異なる、いわゆる関係者がともにつくり上げていくアプローチというCSVの考え方の登場は、当然、我々にとっても非常にこれから目指すべき方向だと考えて、今は、協会内部で勉強会とか、そういった研究の議論を進めているところだと思っています。

1つの成果としては、本日、皆さんのほうにお配りしています産業廃棄物処理業に関するBCP、策定ガイドライン、こういったものをもって、自分たちの事業、そして地域社会のインフラストラクチャーとしての責任をしっかりと果たしながら進めていくことを今やっているところでございます。

**【木場】**それが刷りたてほやほやで12月1日にできたようなので、私も「はじめに」はじっくり読ませていただきましたが、なぜそれを策定したかという経緯の説明は非常にいいですね。つまり、この業界に合ったものが国が言っていることの中になじらないかということで、内容は相当いいなと思って拝見、皆さんもぜひ後でゆっくりごらんください。

さて、3Rに関しまして、太田さんはいかがでしょう。

**【太田】**きょう、事例を幾つか持ってきているので、お話を差し上げたいと思います。

CSVには3つのアプローチがありますという話で、商品・サービス、バリューチェーン、それから地域社会、これ、クラスターとほんとうは呼んでいるんですけど、あまりに難しいので地域社会と言っていますけど、このバリューチェーンの話が3Rのお話にはフィットするんじゃないのかなと思います。

CSVの中でバリューチェーンの話は、環境負荷への低減と、それから企業のコスト削減、つまり競争力強化、これとすごく相性がいい取り組みなんです。実のことをいうと。ただ、コスト削減のためにやるぞ、これはすごい底が浅くて、やっぱり使いやすくなければだめよということになると思います。

ですから、エコなパッケージを求めている方がほんとうに使いやすいよねというふうに言ってくれて、それが実際にCO<sub>2</sub>の排出とか環境負荷への低減、それと実は企業のコストのリダクションにつながっているみたいなものが、やっぱり一番理想的な社会の課題と企業の競争力の強化の両立というような形になるんじゃないのかなと思います。

ここに載っているのは昔にやったことです。例えば、缶の径を小さくしてアルミの使用量を減らす。これ、実は酸素の含有量も減るので酸化しづらいつつ、すごくいいこともあったり、あとコーナーカットカートンですね。これ、右側にあるやつですけども、コーナーのところをカットしてあるんですが、これ、資源が少なくなるんですね。資源が少なくなるとトラックに積載する量も多くなりますから、CO<sub>2</sub>の排出量も減るんですけど、実はコーナーが持ちやすくなるんですね。おなかをぶつけたりしないということになりますし、あと、軽くなったりとかすると、お酒屋さん、たくさん運びますよね。スーパーマーケットの酒類の方たちも腰が痛くなったりとかするんですけど、痛くならないとは言いませんけども、そういうようなところにも役立ったりということを企業は率先してやります。

あと、例えばこういうものです。きょう並べていただいたんですけど、午後の紅茶おいしい無糖、これ、メカニカルリサイクルといいまして、ペットボトルから100%再生してつくったものです。すごく小さく横っちょのところに書いてあるんですけども、午後の紅茶はというような形でもって書いてあるんですけども、そういう製品をつくったり、あとデイリーワインについては、やっぱりペットボトルにしたりとかします。これも輸送したときのCO<sub>2</sub>の排出が減ったりとか、あと逆に、家にスーパーマーケットから持って帰って、鍵を開けようと思ってよこらしょっと置くと、パチンと割れちゃって奥さんが泣いちゃうとかというようなこと、ペットボトルだとなかったりとかするので、逆にデイリーワインなんかだったらガブガブ、ガブガブとは言いませんね、毎日適量飲んでいただくのに、やっぱり軽くて、それでトリートしやすいようなペットボトルを使ってくるというやり方もあるのではないのかなと思います。

最後のご紹介なんですけれども、実はキリンは大瓶は全部軽量化が終わりました。大瓶はご家庭で使われることがどちらかというと多くて、今度、軽量化したのは中瓶です。中瓶はどちらかというと業務用ですね。居酒屋さんで使われていることが実は非



常に多いです。中瓶の数量より大瓶のほうが数量が多かったので、全て外側をコーティングして、割れにくくしてというような形でもって変えました。これを中瓶にも使わせていただいて、2015年の秋から全国展開をするという形になります。これでやっぱりCO<sub>2</sub>の排出量が930トンぐらい減ったりということが起きます。同じようなことでもって、全部ケースで持ったときに1.3キロぐらい軽いとか、そんなようなことが多分起きます。

個人的には、ご家庭だと缶という感じはあるかなと思いますが、究極のリサイクルはやっぱりこういう瓶類かなと。減ってくるのはもうしようがない、致し方ないかなとは思いますが、でも、やっぱり居酒屋さんとかで使っていくような瓶をこういうふうにしてやって開発していくのも悪くない手だてかねと、ちょっと思っております。

【木場】どうもありがとうございます。そういう工夫があるとはあまり考えずに日ごろ飲んでおりますが、全然関係ないことを、太田さん、ごめんなさい、ここにある午後の紅茶おいしい無糖、これ、どの会社もおいしいって使いたいと思うんですけど、おいしいって使うのは自由なんですか。

【太田】「おいしい」は、一気に商標登録すれば大丈夫です。

【木場】みんな、おいしいって入れたいですね。

【太田】はい。必ず入れたいですね。でも、全部おいしいだったら区別できなくなっちゃうから、これもなかなか……。

【木場】そうか。紅茶の中でも相当おいしいと。

【太田】そうですね、難しいところですね。

【木場】どうもすみません。ありがとうございます。

【太田】ありがとうございます。とんでもないです。

【木場】さて、米倉さん、お二方のお話を聞いてと、それから、やはり3Rの重要性について、一言お願いします。

【米倉】ほんとうに大事だと思います。あんまりしつこくしてもしょうがないし、イエーイ、そうだけ行けというふうに言いたいんですけど、こういうことがブームとかに終わらないためには、ある意味、シェアードバリューというのは文化をつくるわけですから、やっぱりいろんな覚悟が必要だと思うんですね。

ですから、先ほど言われた、コストが高いといったときに何がCSRだよと言っていたのに対して、CSVという概念で赤澤さんがちょっと勉強していかなきゃいけないかなと。キリンさんも最後おっしゃられましたけど、ほんとうだったら、ドイツとかがやっているように瓶だと、缶は使わないというぐら

い言えばこれはこれでいいんですけど、やっぱり腰が引けるわけですね。そのときに、いや、バリューだからこれ行くだということぐらいの覚悟なんですよね。それは我々がすごく不便するんですよね。

僕はさっきも思うんですけど、やっぱり企業がほんとうに主役になってこないと、政治はインチキですよね。例えば、僕たちは（消費税を）10%にするというある意味選んだような気がするんですよね。それが2年半も在任期間を残して、今なら勝てるから勝てるうちにやっちゃおうと。我々は結果を見なければ判断しないというふうにいるのに、そういうことをやると。多分、皆さんうれしいと思うんですよ。消費税上がらなかった、よかったです。でも、1,000兆借金がある国が、こんなことをやり続けられるわけがないんですよ。本来でいえば日本はやらざるを得ないと。だって、アメリカでさえ8%いってて、スウェーデンとかヨーロッパに行けば19とか24%でみんな頑張ってるのに、日本だけが8%とかでいいわけがないわけですね。

なぜこういうことになるかということ、一方で苦しいことはあると、10%にいけば苦しいと。でも、一方で、これをやるから絶対にそれを上回るものがあるんだという規制緩和も出てこないし、一体何をやるのかも見えてこないし。CSRからCSV、口で言うのは簡単なんですけど、皆さんにご迷惑をかけることがありますよ。あるいはリデュースですから、まず一番大事なのは使わないほうがいいと。やっぱりどう考えても、今、何もかも過剰包装ですよ。それをやらないと絶対に文句言うんですよ。何かもっとちゃんとしないのかと。「新聞紙で巻いていけ」なんて言ったら絶対文句出ますよ。

それから、曲がったキュウリ。いいじゃない、自然なんだから。でもなぜやらないかということ、消費者が買わないからですよ。消費者一人一人「どう思いますか」と聞くと、「曲がったキュウリでも全然いいですよ」。買わないじゃないですか。それを無駄な廃棄物にしないために、我がスーパーは曲がったものを出しますよと、それで皆さんに問うてくださいといったときに、皆さんが、「いや、やっぱり真っすぐなほうが高くてもいい」と言う社会は変わらないですね。これはバリューが共有されていないからですね。だから、そういう社会をつくるって勇気の要ることだと思うんですよね。

ただ、うれしいのは、例えば和郷園という千葉の農業組合、元つっぱりお兄ちゃんたちがつくったんですけど、彼らはすばらしいことを考えて、みんな曲がったキュウリとか傷んだトマトを捨てていると。



それを集めてカット野菜にして、スーパーに農協を通さないで納めたんですよ。彼らはそんなことないって言うんですけど、言っちゃ悪いですけど、原料はただですよ。だって捨てていたんだもの。それを加工して、JAなんてあほな機関を通さないで、スーパーに行ったら、今、我々、160円とか240円で買っているんですよ、あのカップに入ったサラダを。これが実はイノベーションなんですよ。捨てていたものを価値のあるものに変える、あるいは何か新聞紙を持ってきたらいいことがありますよ。かなり負担をかけるけれど、えっ、それ、3分の1でほんとうにビジネスが成り立つんだと。そういう仕組みを何かクリエートしていくことが、まさにクリエーティング・シェアードバリューなんですよ。

だから、今のお話だと、何かこんなふうによっていけば、消費者もいいね、会社のイメージも上がるし。だけど、実はその先にある矛盾、消費者に我慢をさせる、嫌なことを言う、会社にプロフィットと大きな矛盾があるときにどっちをとるんだと。これは実は国でいえばまさに国のビジョン、企業でいえば企業のビジョン、それがバリューなんですよ。

ですから、3Rってものすごく重要な取り組みだと思いますし、これがなければ日本の未来はないし、これを日本が確立し世界に行けばますますよくなると思うんですが、実は我々が覚悟して向かわなければいけないところですよ。だって、みんな知っているんですもの。例えば、こういうものを初めからリサイクル、リユース、リデュースできるというと、不細工になると思いますよね。

でも僕が思ったのは、話は全然違うんですけど、iPodが出てきてウオークマンが駆逐されたですよ。あのときソニーに言ったのは、iPodとソニーが何が違うんだと言ったら、全部地球に戻るプラスチックだと、使っている部品は全部、リユース、リサイクルできるという話だと、これで文句あるかという戦いにしない限り、僕はアップルに絶対に勝てないと思ったんですよ。

昔は、嫌だな、そんな不細工なのと言うけど、不細工、格好いいじゃないかというのが実はバリューをつくることなんですよ。僕たちのは地球に戻るんだものと、君のは格好いいけれど産業廃棄物になって地球を壊すんだもの、ここですよ。もしこれをつくったら、U2のボーノは絶対にソニーに転向すると思うんですよ。これも全く受けなかったですけど、大事な話だと思います。

**【木場】** すいません、何かまともに近いぐらい本質的な話をしていただきましたけど、格好の悪いキュ

ウリがそうやって役立つ話とか、ブサ格好いいものが認められる時代が来ない、つまり本質的にはキュウリはキュウリ。私も例えば今、お鍋の時期ですけど、規格外のカキなんてものすごく安いですよ。規格にはまらなかったというだけで倍以上買えちゃうんですよ。お鍋、ほんとうに美味しいんですけどね、私は。

そういうところで、本質とは何かということと、ほんとうに格好いいのは、そうやって地球に戻せるものなんだよ、廃棄物をつくるものじゃないんだよと、その価値観の変革みたいなところ。何かもうフォーラム終わっちゃいそうです。3つのうち、まだ1つしか終わってないんですけど、そういうふうに感じました。

では、次のテーマに参りましょう。

次でございますが、今回のフォーラムは3Rが中心でございますけれども、じゃ、実際に取り組んでみて直面する問題、難しさというのはどんなものがあるかというところを、お二方に実体験からちょっとご紹介いただきたいと思います。

まずは太田さんからお願いします。

**【太田】** 商品・サービスのCSVの事例の話です。価値、新しい価値をつくっていくというのはやっぱりなかなか大変かなと。今ここにあるんですけど、氷結和梨という製品があります。今、おかげさまでメーカー在庫がほとんどなくなりました。発売2年目なんですけれども、福島を応援する製品です。氷結は御存じのとおり、チューハイのカテゴリーでナンバーワンのブランドです。これを使って福島県をパッケージ製品で応援するという考え方になります。もとはといえば、うちの前の社長が架け橋プロジェクトみたいなのでもって、スーパーマーケットや何かでもって福島とか仙台とかいろんな被災地のものを売って応援しようみたいなことで、一生懸命、福島県前知事、佐藤さんが売ろうと思ってPRしていただんですけど、やっぱりなかなか手にとってもらえない。それを見ていて何か応援できないのかねというふうに思い、実際に会社に帰ってきてつくられた製品です。

何の話かということ、CSRの部門にいらっしゃる方はおわかりかもしれませんが。CSRの部門の方は、社会貢献活動でほかのステークホルダーの方とはよくお話をしたりとかするんですが、社内で一緒に価値をつくって、それをお客様に企業ごとの価値として受け渡すというような作業はあまりされてないように伺います。うちのマーケティング部、品物ができましたと、とはいえ、CSVまたは社会に受け入れて

いただくような発信として、どういうことを言ったら一番お客様がそうだねと言って応援して買ってくれるのかなというのがわからんという話があって、これもCSRのご担当者さんだとどうですかね。

よくマーケットとか営業が言ってくるのは、イベントが終わった後に募金が集まっちゃったから、これを寄附する先を教えて頂戴と。事後ですね。ではなくて、事前に打ち出しの方法を相談されたりとかということで働き方がやっぱり随分変わってくる。企業の働き方を随分変えないと、逆に、1つの部門だけでもってお客様に価値を伝えるということはやっぱりできないと思います。

あと、もう1つだけちょっとお話し差し上げたかったのが、残念ながら、私、キリンのCSRにいたときに、キリンビールならではのCSRまたは事業統合、戦略的なCSRをやれというふうに言われて、僕の先輩たちも同じ課題をもらったらしいんですけど、なかなか実際こういう品物になったようなものって全然なかったそうなんです。

なぜかという、CSRって、1つ丸くくりというか、うちの会社もいいことをやっているんです。木を植えたりとか水源の森を守るためにやるんですけど、それ、どこの会社もやるんですね。森林の前に立ったときに、どこの会社が何をやっているか区別ができない。また、なぜその会社がそんなことをやっているのか、お客様に理解していただけないというようなところがあるんじゃないか。だから、CSRって多分、企業のレピテーションとしては丸っとした漠然とした感じのもの。

ところが、これは福島を応援しましょうというふうに言っているんですね。それで、いいねと言っている人が応援消費してくれる。だから1対1の関係なんです。こいつが売れないということは、多分これは社会的な課題をちゃんと解決する商品に至ってない。だから1対1対応です。なので、これがちゃんと売れるような形の発信をするのか、いや、原材料がもうちょっと福島全体のものである必要があるのか、また、もしかしたら東北全部のものもってオールスターでつくっちゃえばいいのかとか、そういうふうに変えていくことがもしかしたらCSRの取り組みよりたやすいのかもしれないという意味で、昔できなかったことが今できるというお話を差し上げました。

**【木場】** 結果的には、コンセプトというか、福島を応援しようという企画意図は消費者には受け入れられて、こういう結果になっているということですよ。

**【太田】** そうですね、おかげさまで。昨年売って、今年は2倍の梨の量を使うことができたんですけど、それも大体年内で多分売り切れて、スーパーマーケットはまだ買えるかな。もしかしたらアップルヌーヴォーに変わっちゃっているかもしれませんが、それはそれで青森のリンゴを応援することになりますからよろしいんじゃないかと思えますけれども。それは冗談ですけど、いいねというふうに言って買われて、これが続いていくということがやっぱり1つ必要なことかな。

先ほど、ちょっと先生もおっしゃっていたんですけど、全部変えるというのはやっぱり勇気が要るんですが、1つ突破口を探して行って、こういうことだったらきっとお客さんと共有価値が見出せるのじゃないかというふうにやっていく。うちの本部長も言うんですけど、やっぱり売れないとシェアードバリューにならん、売れるにはやっぱりそれなりの理由が必要だということなので、そういう入り口のやり方もありかなという感じがしています。

**【木場】** キリンさんとして、まさに御社の商品の中でストーリー性を持たせて福島を応援するというのが非常に成功した例だと思いますし、先ほども、CSRの方々が最初、初期のころ何をしていたかわからないということがあって、たしかエコバッグを頻繁に配っていたイメージがあるんです。ただ、エコバッグというのは、私たちいただいても、趣味もありますし、好きじゃないものだと結局使わないとかごみになるというのは、エコバッグ自身をつくるのにも工場CO<sub>2</sub>が発生したりしていることを考えると、無駄を生み出しているということになるので、この本業の中で何かをするというのは、まさにこれわかりやすい事例として本当に大変ありがたいと思いました。ありがとうございます。

では、赤澤さん、どうでしょうか。

**【赤澤】** ありがとうございます。少し私どもの卑近な例で申しわけないんですけど、参考になればということで申し上げさせていただきたいと思います。

実は、私どもグループ会社で4年ほど前から、新規事業として遺品整理業を行っております。私たちが最初に事業を始めたときは、非常にグレーな事業として、社会的評価がとても低かった記憶があります。ただ、現実問題として孤立死、孤独死が発生して、困っておられるご遺族の方々がおられた、そういった方々につけ入って法外な費用を請求するとか、そういった詐欺まがいの業者もほんとうにいるような状態でした。

私たちが参入するに当たっては、やはり、じゃ、

この事業をどういうふうに捉えていくんだ。そこで、ミッションとして遺品整理業の社会化、サービス産業化を目指そうということに掲げました。ただ、スタート当初は誰からも理解はされなかったです。当時からかわっていた社員さえも、こんな事業がほんとうに社会から受け入れられるのか、世間から受け入れられるのかということはほんとうに懐疑的でした。

それと、ステークホルダーというんですか、実は、この業に非常に関係深いのは葬儀会社さんとか介護事業所さんですね。そういった方々の意見を聞きながら事業をつくっていったということもあって、社員、従業員からは非常に回り道をしているようにも見ていたと思いますし、また、従来の既存の事業とは全く違う考え方が必要です。今までは出てきたごみを処分すればいいと。そうじゃなくて、我々がサービスをちゃんと提供していくと。廃棄物処理業じゃなくて、サービス業としてそこに入っていくということで、頭の切りかえが非常に苦労したということもありましたので、スタート当初は開店休業という、多分半年以上、1年近く開店休業の状況だったと思います。

ただ、先ほど申し上げたとおり、介護とか葬儀の業界の方々、そして、たまにご依頼いただくご依頼主の方々のご意見を聞きながら、いわゆる顧客目線でサービスをつくり上げた結果、徐々に皆さんから好評をいただくようになって、今は順調に推移していますし、社員も今はみずからの事業と考えるようになって、積極的に取り組んでくれたということがございました。

今から、この事業がそれなりの形になってきたというのを考えれば、いわゆる我慢の時期はありましたけど、多少なりとも社会のお役に立つような形になったのは、遺品整理業の社会化、サービス産業化というミッションを明確に掲げてぶれなかったこと、そして社員、従業員と会社のベクトルをちゃんと合わせて、かつ、紹介いただく方、もしくはお客さんとのウイン・ウインの関係をつくるようなことを一生懸命みんなで考えて進めていった、そういったことが1つ効果があったんじゃないのかなというのを感じているというところです。

**【木場】**ありがとうございます。伺っていると、今までの事業、つまり廃棄物が出てご担当されるというより、一步踏み込んで、ご遺族の方と家の中で、これは要る、これは要らないという選別のところからコミュニケーションしてということでございますよね。

**【赤澤】**そうです。

**【木場】**そうしますと、仕事の種類というか、ある意味、心のケアみたいなどころも含めて、また違った分野にもう一步入り込んだ感じがしますね。

**【赤澤】**おっしゃるとおりですね。当初はまず、こんな事業が事業として成り立つのかということと、自分たちは単に目の前にあるごみを処分するというのが仕事、だからたくさんあったほうがいいんですけど、そこから家の中に入って行って、要るもの要らないものを分けて、ちゃんとリサイクルできるものはリサイクルしていきましょう、処分するものは処分していきましょう、そういった形で進めていった。そこに1つ乗り越えるハードルがあったんですけど、ただ、成功体験が積み上がっていくに従って、徐々にこなれていったという感じはしますね。

**【木場】**ごみと申しますか、廃棄物と申しますか、とにかく遺品として捨てるというものが出てきたときには、その先どう選別するかはお得意分野でございますものね。

**【赤澤】**そうです。

**【木場】**私事ですけど、私も今年、父を亡くしまして、まだそういった整理ができておりませんで、興味深く打ち合わせのときにこの話を伺った次第でございますけれども、ほんとうに何をどこに持っていいか、右も左もわかりませんので、ワンストップというのはほんとうに社会的貢献という、私、特に今年はそのように思いながらお話を伺っておりますけど、これから先、ほんとうに孤独死という問題もあって、どうしたらいいんだろうと。大家さんが困ってしまう、住んでいる本人がいなくなってしまう。そのあたりでも、やっぱりいろいろと貢献すべきところはありますね。

**【赤澤】**そうですね。実は遺品の方も含めて、孤独死も含めて社会的な問題になりつつありますので、そこをちゃんと解決していかなくちゃいけないなというところなんですけど、まだそこに関しては、どういうふうにやっついこうというのは関係者と打ち合わせながら、やはり次のステップ、次の取り組みに上げていきたいなと思うところです。

**【木場】**米倉さん、お二方の取り組みを伺って、いかがでしょうか。

**【米倉】**今の話はすごいですね。我々、学生に教えるときに、ビジネスをやりたいと、マーケットはあるか、グローバリゼーションの可能性はあるかとよく言うんですけど、マーケットすごいですよ。これから3,000万人減ると言ったでしょう。これから毎年120万件のお葬式が必ず出るんですよ。120万ということは、ここに宮崎県出身者います？山形県出身



者、いない？ これから日本から宮崎県1個が毎年消えていくんですよ。これとんでもないマーケットですよ、ある意味で。

それで、テイクアンドギヴ・ニーズという、結婚式をネットでやっている会社の社員、専務だったのが、これからは結婚式じゃない、葬式だといってやめたんですけど、失敗しました。なぜかという、結婚式は随分前から日取りを決めるんですけど、ネット予約は、寝込んでいるおやじの前で、葬式、次の12月3日ぐらいがいいんじゃないかなとか言ったらやっぱりだめですよ。これはだめだったんですけど、遺品は必ず出ますからね。これ、すばらしい。

しかも、もう1つおもしろいのは、日本で「おくりびとアカデミー」というのがあるんですよ。これは、お葬式の納棺師をやった、モデルになった人が始めたあれなんですけど、ちゃんとお棺に入れるときにきれいに化粧するという、その一連の作法を教えるアカデミーがあるんですよ。これが今、台湾でブレイクしているんですね。この次は中国もいくだろう。やっぱり仏教、儒教の国の中では死者をきちっと丁寧に葬るといのがあって、その種のきちとした作法というのを大事にしたいという人たちが多いので、納棺師というのが非常に重要な職業になる。これも同じですよ。ほんとうに悪い言い方ですけど、中国も孤独死がたくさん出てくるので、ある意味では、あまり言いたくはないんですけど、巨大なマーケットがあると。でも、考えてみたら、これまさに、これもよくないのかな、リユース、リサイクルの世界でもあるし、本業が十分生きるのかなど。

僕、キリンさんのこの取り組みは、これはいいですね。買いたいと。きょう、帰り買って帰りたいなど。アップルでもいいんですけど、ぜひこれはいきたいなど。しかもプリン体がないんですけど。

でも同時に、キリンはどうしようもないんですよ。このおいしい紅茶に何でディズニーに金を払うのかと。これ、みんな我々が飲んで、キリンに払っているんじゃないんですよ。我々が払っているんですよ。もっと最低なのがグリーンラベル。ついこの間まで、誰をキャラクターに使っていたか知ってます？ 知ってる？

【木場】俳優さんでしょう？

【米倉】俳優さん、誰。

【木場】誰だったっけな。白髪の頭の、五十二、三の……。

【米倉】ジョージ・クルーニーですよ。ジョージ・クルーニー、知ってる人？ 結構いるね。だめだね、これ。でも、グリーンラベルを飲む人にとって全く

関係ないですよ。あれ、ハリウッドからどれぐらい払ったでしょうね。10憶では足りないぐらい。

【木場】えっ、俳優さんに払ったお金も乗ってるんですか、ビールに。乗ってないでしょう。

【米倉】乗ってますよ。

【木場】全部乗ってるの？

【米倉】もちろん、全部乗ってますよ。

【木場】じゃあ、全然有名じゃなくていいですよ。

【米倉】有名じゃなくて、ピンぼけでしょう。あれ、だました電通、博報堂もあれだけ……。

【木場】しかも変な日本語しゃべらせてね。

【米倉】だまされたキリンもキリンで、全く無意味なああいうことをまだやっていると。だから、キリン、一方ですぐシェアードバリューだとか言いながら、全然わかってないですよ。だから、僕はこの氷結は100点。でも、こんなものにディズニーとかジョージ・クルーニーに金を払うというバブル時代の発想、もうやめてほしいなと思うんですが、これはグーですよ。失礼しました。

【木場】ありがとうございます。

さてさて、それでは最後のテーマに参りたいと思いますけれども、どうぞ。

CSVを後押しする地域市民、NPOの役割について、最後、お話を進めていきたいと思えます。やはり地域市民にどれだけ協力してもらおうかということが鍵になってきますけれども、企業が取り組んでいる環境への取り組み成果というものを市民、私たちはなかなか見えにくくて、まだ浸透していないような気がするんですけども、そうであれば、大人はもちろんなんですけども、やはりこれから担っていく学生さんですとか子供たちに、NPOの皆さんをパイプ役として出前授業をするですとか、何か発信、見える化をしていくということも求められてくると思うんですけども、そういった意味では、先ほど、赤澤さんのご説明の中に出前授業なんかがあったんですが、どういうことを地域市民と一緒にやられているかというところ、事例をお願いいたします。

【赤澤】ありがとうございます。私自身、会社で働く人、そして取引先、お客様、地域社会から顔が見えて、コミュニケーションができる会社というのを1つキーワードとして以前から持っていました。そこで、地域社会と協働で行う取り組みみたいなものを進めたいという考えがありましたけど、やはり取り組むノウハウが全くない。私たちが社会貢献したくても、どこでどのような形で行えばよいかわからない。ただ、一方で環境系の知識とかそういったものは当然持っている。これはコンテンツの部分です

ね。あります。

そこで、我々、ノウハウはないので、西宮市内で子供の環境活動を支援するNPO団体があったんですけど、こども環境活動支援協会というNPOですね。そこと組んで、市民対象の社会貢献事業と一緒に10数年進めてまいりました。取り組みや、いわゆる社会貢献のプログラムを実施するに当たっては、当然、資金の協力といったものは行いますが、そればかりでなくて、社員をボランティアスタッフとして参加させています。社員自身も楽しんでくれるばかりでなく、外部の方々からいろんな意見を聞いて、それが勉強になって成長してくれているなど。

今、いろんな取り組み、CSRの報告書なんかも、実は社員がリヴァックスなんかは全部つくります。それはやっぱり、そういったNPOと一緒にいろんな活動をしてきたと、地域の方々とのコミュニケーションをとったところから学びにつながって、成長につながって、それが結果に映ってきているという感じがしています。

以上です。

**【木場】** NPOの方々はやっぱ、どこの学校でどんな事業をするかというところのセッティングは非常に上手にやっていただけるんですけど、中身の部分で非常に協力されていると伺いましたが……。

**【赤澤】** そうなんです、すいません。NPOの方はやっぱり社会性が高い。小学校も非常にハードルが高いものですから、一般企業はなかなかすんなり入れてくれないんですね。そこをやっぱりNPOという1つのスクリーンを通ることによって、社会性を帯びると。ただ、NPOは先ほど申し上げましたとおり、どういった小学校でどういうニーズがあって、どんな事業をやったらいいかというのはわかっているんですけど、そのコンテンツそのものを持っていないので、そのコンテンツとして我々が参加すると、そういうところでやらせていただきたい。そういったことを幾度か経験することで、我々がステークホルダーと協働する力が身についたというような感じは受けております。

**【木場】** 赤澤さんならではの情報を子供たちに提供することによって、自分たちが出したごみがどんなふうな経路をたどってどうなるかということに、やっぱり驚きなんかがあるんじゃないですか、実際に行くと。

**【赤澤】** そうですね。実は我々が考えつかなかったことを反対に言ってもらうことがありますね。だから、どうしてごみはなくなるんですかという話ですよ。当然ごみがたくさん出て我々が事業とし

て成り立っているわけなんですけど、やっぱりごみがないほうがいいというのは素直にぶつけてくるわけですよ。そこはやっぱり、先ほど先生がおっしゃったような矛盾があるわけですよ。

その矛盾にちゃんと対峙して、ああ、そういうことを言われたと。わかっているけど、潜在的にはわかっているけど、それをはっきり言われたときに、それが社会のあるべき姿やねと、じゃ、そこにどう向かっていくというような、ちょっとしたことなんですけど。そこで気づきとか考えるきっかけをいただいたというのはあります。今は私が行かなくて、社員、どんどん社員が行ってきて自分たちで楽しむ。教えることを楽しんで、教えるために自分たちも学んでいくみたいな、そういった好循環が生まれているという感じですね。

**【木場】** どうもありがとうございます。

キリンさんは、地域の方々との協働という部分ではいかがでしょうか。

**【太田】** 実は震災が起こる前までは、あまりうまくなかったというふうに思っています。例えば森林を守る活動、NPOの方とかもちろん地域の方に協力いただいたりとかしましたけど、それは一方的にこういうことをやろうよとかというようなことで、サスティナブルかということ、もしかしたらそうではなかったのかもしれないですね。

震災を機にキリン絆プロジェクトというのをやりました。3年間で60億円ぐらい拠出したものなんですけど、これ、事案を形成するのは、ほとんどが逆に地域の方とか、あと、お困りの内容って何なんですかねというのをやらせていただいて、1つずつ事案を形成していったという形になりますので、とっても時間がかかったんですね、実のことをいうと。なんですけど、逆に終わってみるととてもユニークな取り組みになっていて、例えば、すいません、自治体なんかは義援金としてぼんとお金を入れるとかということは全然やってなくて、それがたまたま社会貢献から始まって、だけどサスティナブルに回っていくとか、サスティナブルを回るとかバリューを生むということは、つまりそれが継続するからそういうふうな形に変わるということなのかなという経験をちょっとしました。

この間、日経のNICESが発表になりました、残念ながら順位はもちろん落としたんですけど、前年度の日経のNICESは、私たち、社会性のポイントで1位をいただきました。これは、絆プロジェクトがそういう愚直なまでのニーズをつかんでやらせていただいたということじゃないかと思うんですね。

例えばなんですけど、これ、農業トレーニングセンタープロジェクトというのをやらせていただいて、被災した農家の方たちを、いわゆる家業じゃなくて、もうちょっと企業みたいな感じでもって、効率的に何かブランドしたりとかできないのかねということをやりました。片や丸の内朝大学って、丸の内でもって毎週水曜日、講座があるんです。こっちはお金を払うんですけど、丸の内に勤めている人たちがそれをプロデュースするみたいな仕組みですね。農家の人とプロデューサーががっちゃんこして何ができるかねみたいな。農家の人は考えました。やっぱりブランド化したものってつくりたいよねと。ところが、農家の方は残念ながら、つくるまではいくんですけど、それをどうやって売ったらいいのとか、あと、逆にお店の人がどうやってお客さんに勧めてくれたら売れるのとかということまでいかないんですね。

ところが、丸の内に勤めている人たちはそういうところ、たくさん飲んだりとかしているんで、こんな感じの例えばテーブルテントみたいなものとかマークをつくったりとか、あと逆に、これ、キリンシティで今年売ったんですけど、店員さんが、これこれこういうものです、よかったら食べてみてねみたいな感じで、シシトウみたいなものですね。シシトウをフリットしたものなんですけど、おもしろいことに、9月の大体終盤に近いほうになると当たりが出ちゃうんですね。当たりって、10個ぐらい食べると1個ぐらい、めっちゃくちゃ辛い。農作物ゆえ、どれが当たっているかわからないんですね。それを逆におもしろいからといって食べてくださるような方がいて、これ、前年に出した復興の茶豆があるんですけど、それを抜いて1位になったかな。2カ月で1万6,000皿ぐらい売れたですかね。売れたからいいという問題ではなくて。

というような形で、最初は支援で入ったものが、それはやっぱりブランド化したいよな、ブランド化するにはこういう売り方ってほんとうは必要だよなみたいな、知恵や何かがいろいろと重なってきたものが、これまた次年度も売られると思いますけど、サステナブルに回っていくみたいな事例がたくさん出てくるとやっぱりいい。でも、それって現場にしかない困りごとなんじゃないのかなというふうに思います。

【木場】やはり協働という部分で、意見を吸い上げるということが大事なんじゃないかな、皆さんが何をしてほしいのかという。こちらが何かしてあげようじゃなくて、何をしてほしいのかというところを具体化してあげるということが非常に大事で、あ

と、今の10個に1個当たるとかいろいろありましたけど、このあたりも、農家の方は一生懸命いいものをつくる、その先にストーリーを持ってどうやってお客さんにおいしさを伝えるかという、そのあたりのコミュニケーションも大事なんじゃないかなという感じがします。

【太田】そうですね。多分、机の上で考えているとわからないことが非常に多いんですね。

【木場】やっぱり現場感覚から来る……。

【太田】逆に、私たち、NPOさんとかステークホルダーさんとのダイアログがうまくなかった分、何もわかってなかったんで、ストレートに聞いたというところでもしかしたらよかったのかなということじゃないかと思えます。

【木場】ああ、あるほどね。非常にいいですね。ありがとうございます。

お時間がないので、もう少し進めさせていただきますけれども、赤澤さん、前回のテーマでやったんですが、行政、それから各企業ともに3R推進に向けて頑張ってはいらっしゃるんですけど、どうなんですかね。横のつながりというのは、まだまだ何か課題がありますか。

【赤澤】横というのは？

【木場】企業と行政がもう少し協働してという、今、地域の方の話は出たんですけど。

【赤澤】先ほど、太田さんと同じように、出向いて話しして体験するみたいな、そういったところかなという感じがしますね。みずから自分らが発信していくというんですか、いろんなところに発信していくことによって、返ってくる意見、言葉、それが気づきなり次のステップのテーマになっていくんだろうなという感じがします。

【木場】ありがとうございます。太田さんは、行政、企業、地域の市民、このあたりの関係性の理想型というか、もっとこうあればいいというのはありますか。

【太田】そうですね、ですから、最近、自分の会社で聞くシェアードバリューってどうなのかなというのは、よくわかるって言っちゃ失礼ですけど、本業を通じて何ができるのか、逆に何ができないのかというのがわかるようになってきました。私たち、ただか飲み物の会社ですから、先ほど、ブランドの約束みたいなお話をちょっと差し上げましたけど、飲み物を進化させることでもってみんなの日常を新しくしていくみたいな、飲み物のイノベーション、イノベーションもそんなにでかいものじゃなくてよくて、買うだけで、飲むだけでみたいなものなんです



が、飲み物の会社だから限界があります。

ということは、やっぱり、縦でもって行政とかNPOさんと企業が組むのもいいんですけど、企業が幾つかで組んだりとかすると、もしかしたらもっと広いエリアの社会課題の解決につながるができるのかもしれないなんていうことは最近思うようになっていきます。

**【木場】**ありがとうございます。

さあ、今回のテーマ3で、「CSVを後押しする地域市民の役割」というところですが、お二方の意見を伺って、先生、どうでしょうか。

**【米倉】**いいと思います。ただ、僕、今言われたストーリーをつくるって本当に大事なんですけど、それは要望を吸い上げることではないと思うんですよ。やっぱりバリューをつくるですから、一人ではできないんですよ。会社がバリューをつくったからどうぞというもおかしいし、向こうが望んでいるからそれに応えましたじゃない。やっぱりともにつくるしかあり得ないと思うんですよ、共有で。

僕、竹中平蔵さんと話しして、いいことを言ったなと思ったのは、「米倉君、政治が国民のレベルを超えることはないんだよ」と。ということは、今の政治は我々のレベルなんですよ。あれがもっとレベルを高くしてほしいというのは、我々がレベルを上げるしかないんですよ。同じように、CSVをつくるとか3Rを推進するというのは、我々のレベルを超えることはないんですよ。

ですから、地域社会に行ってやるというのは大事なんですけども、やっぱり、これ、あれだよねと。だから、さっきの話じゃないけど、別にいいんですけど、このディズニーのついた紅茶と、1リットル買ったらアフリカに10リットル水が送られるボルヴィック、同じ値段でどっちを買うと。こっちは水で、こっちはおいしいかもしれないけど、どっちを買うといたときに、子供たちが、「それはボルヴィックを買うさ」というのが、実はやらなきゃいけない仕事なんですよ。

同じようなことでいえば、リデュースするって実は面倒くさいことだよと、ガムを一枚一枚包むということはあり得なくなるんだよと。でも、それはやるさと。だって、自分たちの国、自分たちの地域なんだからという、実はバリューをつくるプロセスなんですよ。だから、そこがこれからほんとうに我々が取り組んでいかなきゃならないフロンティアで、実は、ずっと我々はどういうものをつくってきたかという、便利なものをつくってきたんですよ。これからは残念なことに不便なものをたくさんつくっ

ていかなきゃならないし、不便なことにお金を払ってもらおうという社会をつくらなきゃいけないので、これはまさにクリエイティング・シェアードバリューですよ。つくるんですから、空から降ってくるわけじゃなくて。そのプロセスをやるときに、地域市民と一緒にやるってものすごく大事だなと思って。そのストーリーをみんなが語り始めると、これ、我々はすごくいい国じゃない、日本っていい国だよねということは、このバリューはそのまま世界中に広がっていくんですよ。

僕、この間、ほんとうにうれしかったのは、アフリカのプレトリア大学の学生を連れてきて歩いたときに、大阪は知らないんですけど、東京の地下鉄に乗ったときに、僕もすっかり気がつかなかったんですけど、彼らが、「先生、ごみがない」と言うんですよ。「ごみ、ごみ、あれ？」と言うわけ。僕も見てもみたら、つい10年くらい前は、たばこの吸殻はあったし、ガムもあったけど、今、東京の地下鉄、ほんとうにごみがないんですよ。

**【木場】**ごみ箱もないですよ、なかなかね。それ困るんだけど。持って帰らなきゃいけない。

**【米倉】**うん、ごみ箱もない。そうそう。すごいと言われたときに、我々が知らない間にすごく進化しているし、いい国になってるなと。ところが、まだこれはアメリカの消費社会では超えられてない壁。だけど、ヨーロッパはちょっと先に進んでいる部分もあるんですよ。

これからアジアが一番近い我々が提供しなきゃいけない価値って、ほんとうに実はこのフロンティアがあって、さあ、これをつくっていくぞと。でも、そのことは絶対に未来につながると、これがビジョンなんですよ。根拠があるのかと言われると、ビジョンに根拠は要らないと。みんなで頑張って、3RとCSVでも何でもいいんですけど、我々がくり上げたストーリーを世界に展開していく、そんなことが大事なような気がしましたね。

**【木場】**易しいからじゃなくて、難しいことを選んでくださいね、先生。

**【米倉】**だから、これは買わない。これは買う。

**【木場】**一言、太田さん、もらいましょうか。随分ディズニーへの……。

**【太田】**そうですね。担当者として、多分2つあるのかな。今の先生の話と同じですけども、クリエイティング・シェアードバリュー、やっぱりなかなか理解されずづらいので、スモールインは必要だよなという気がします。なので、例えば氷結和梨みたいなものをつくったりすると、社員は、あっ、こうい

うものがうちの会社の目指しているものだよなど。全部これになったらそれはさすがによいのですが、なかなかそういうふうにはいきません。

ですので、こういう小さな成功を積み重ねていくと、それが束になったときにキリンがやりたいことというのがわかるのかと。ところが、束というか、机の上で考えると、ほんとうはだから方針とか戦略でもってこれをやり出すというふうには言えと言われるんですが、例えば、ネスレとかはCSVだというふうに、事業自体がそうだとはいっていますけど、なるまでにやっぱり10年ぐらいかかっている、長いスパンの中ではやっぱり小さな成功も必要ですし、最後、長期でもっていかなきゃならないところもあるし、両方やらなきゃならないのかなというのは、非常にジレンマではありますけれども、あるかなと思いませんね。

**【木場】** じゃ、これは買います。ありがとうございます。

赤澤さん、何か言い残したことがあれば。もうそろそろ……。

**【赤澤】** ああ、そうですか。じゃ、ちょっと遺品整理の話に戻しますけど、4年前にスタートするときに、社員から、どうしてするんですかという話があったんです。いや、困っている人がいる、我々のリソースが提供できる、そこに庭があいているような気がするというような形でスタートしたんですね。成功するんですかと聞かれたときに、いや、きっと成功すると思うよと。全然疑いはなかったですね。そのときに、それをぶれずに進んでいくということ。

先ほどもおっしゃるとおり、簡単どころじゃなくて、困難なところからまずスタートすることによって乗り越えるべきものがたくさんあると、そういうところに取り組むことによって組織はステージがどんどん上がっていきんだらうな、そのステージが上がっていくことを目指していくというのがすごく大事なことなだらうなと思います。

そして、4年前にスタートした事業なんですが、それなりの形になってきて、今、グループ内でも、じゃ、既存事業じゃない、何か新しい事業も自分たちでできるよね、自分たちには自分たちで要するにできるよねという意識が芽生えつつあると。それがおそらく大事なことで、常にそういったことに取り組む姿勢、取り組んでいくことをビジョンとしてやっていくということで、社会課題みたいなものがだんだん解決していきんだらうなという気持ちがありました。

**【木場】** 先ほどおっしゃっていた太田さんの小さな

成功体験というのは非常に大きな自信となって、次の事業展開に結びつくということでございますね。ありがとうございます。

さて、そろそろお時間になってまいりました。5分以上オーバーしないように厳しく言われておりますので、ここで、皆さんに一言ずつ会場の皆さんにメッセージをいただいて終了したいと思うんですが、赤澤さんは今話されたので、じゃ、太田さんからでもいいですか。お願いします。

**【太田】** きょうお話しした中で、1つ大切なことがあるかなと思っています。私たち、47都道府県で事業を展開して、8つの工場があったりという形なんですけど、先ほどもちょっとお話ししたとおり、その地域の中で不可欠な会社になっていかないと事業が継続していかんということじゃないのかなと思いません。

ということは、やっぱりその地域の中でステークホルダーの人たちとほんとうに真摯に向き合って、何がその関心事なのか、難しい言葉で言ったら、何が地域の社会的な課題なのかということにも向き合えるようなことがあれば、わかりませんが、例えば地産地消のものをもうちょっと売りたいとか、それを全国に売りたいのだから、もうちょっと飲み物でもってこういうソサエティをつくりたいのだから、ということがあって、それにお応えすることができれば、きっと会社としての本業を通しての継続性というのが続いていく可能性が高いのじゃないかなと思っています。

ですので、いろいろご批判もあろうかと思えますけれども、キリンはキリンらしいとか、キリンならではのものをやっぱりずっとやっていきたい。そうじゃないと何の会社だかわからなくなっちゃうよねというようなことじゃないのかなと思いますので、やっぱりステークホルダーの方たちとどういうふうに接していくのか、しかも地域で接していくのかというのが非常に大切なことじゃないのかなと思いません。

**【木場】** どうもありがとうございます。

では、赤澤さん、業界を代表しまして。

**【赤澤】** そうですね、業界としてちょっとお話しします。

業界としては、まだCSVという概念は学習段階で、議論の途中だということなんです。ただ、実は、協会とかそこに加盟している会員企業さんは、非常に多くの社会貢献事業に取り組んでおられるというのは実態としてあります。一例を申し上げますと、協会を通じて、多くの会員企業が大学生のインターン

を受け入れています。インターンシップが単位となっている大学の担当者さんは、学生のために受け入れ先企業を探すのに非常に苦労していると。他の業界に比べて、産廃業界は非常に多くのインターン生を受け入れてくれている、これほど積極的だとは知らなかったと知ってくれるんですね。ほんとうにありがたいと言ってくれています。

ただ、こういった情報、個々の会社さんは受け入れたということは大したことはないように思っていますが、でも、実は非常に役に立っている。社会貢献としてもあるわけですし、そういった情報を個々でまた発信するには限界があると思うので、やはり協会という大きな枠組みの窓口としてそういったことをどんどん発信していくことが、それがステークホルダーとの信頼につながっていくと。また、少しずつやりとりしながら次のステップに入っていくんだと思います。そういったことの積み重ね、大したことではないかもしれませんが、多分こういった積み重ねがCSVに近づく一歩じゃないのかなと思っています。

**【木場】**確かにインターンシップを受け入れるということは大変ありがたいと思いますね。どうもありがとうございました。

では、最後に米倉先生、一言お願いいたします。

**【米倉】**先ほども言ったんですけど、CSVというのが我々のレベルを超えることはないんですね。ですから、日本でCSVが低いということは我々のレベルが低いということで、3Rを推進することも実は我々にある意味不便を強いることになるし、それを我々が受けとめなければいけない。でも、これが実は次のフロンティアなんですよ。

僕、キリンさんに全然敵がい心もないし、僕はビールの中で一番キリンが好きなんですけど、これが並んでいたときに、日本人はいくらディズニーがついていてもこれを買うよね、いくらこっちが安くてもこれを買うよね、これが我々のレベルなんだと思うんですね。ですから、キリンがこういういいことをやった。でも、やっぱりディズニーがついているほうが売れるよねといったら、これ変わらないですよ。そうすると、キリンの問題ではなくて実は我々の問題だと。これは全てのところに言えると思いますね。ですから、厳しいいろんな不便を我々が我慢する、でも、その先に実は21世紀があるんだということを経験した。ありがとうございました。

**【木場】**どうもありがとうございます。先生のお話を伺っていると、どちらを選ぶんだという価値観を

何となくキリンさんに私たち試されているような、そんな気がしてきました。

さて、お時間になってまいりました。まとめのほうは私のほうは割愛いたしますが、今後の話をちょっとさせていただきませうけれども、来年、3回目は、やはり地域市民に焦点を当てて皆様とともに考えていきたいと思っているんですね。地域市民の意識改革という点では、私も含め、まだまだこの3Rの重要性というのを認識が足りないなという感じもいたします。私も今回のお仕事で少し勉強させていただいて、やっぱり物がつくられて売られて、私たちが使って捨てられると。その先のことまであまり思いを馳せていなかったなという反省を持っております。

これは、私も小学生の皆さんと同じような衝撃というか、感動を覚えたところでございますけれども、私たちの社会というのは廃棄物が適正に処理されなければ、生活を環境を保全していくことも、また公衆衛生の向上も図ることができないわけで、そういう意味では、ほんとうに電気やガスのようなインフラと同じライフラインであるということでございますね。そういうことを十分に来年は住民の皆さんに理解していただくためにはどうしたらいいかということ、皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

ということで、お時間になりました。以上をもちまして、90分にわたって皆さんとともに、「共有価値の創造に向けた企業の挑戦（チャレンジ）」について話し合ってきました。どうも最後までご清聴いただきましてありがとうございました。

お三方に大きな拍手をお送りください。（拍手）



第3回  
地球環境保全のための

# 3R推進 フォーラム

～地域における3R社会の未来～



開催日時：平成27年12月4日(金) 13時30分～16時30分  
 開催場所：阪急うめだホール(阪急百貨店うめだ本店9階)  
 当日来場者数：386名

■主催 公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会  
 ■後援 近畿地方環境事務所／建設副産物対策近畿地方連絡協議会／近畿経済産業局／大阪府／大阪市／堺市／豊中市／高槻市／枚方市／東大阪市／大阪湾広域臨海環境整備センター／中間貯蔵・環境安全事業株式会社大阪PCB処理事業所／一般社団法人廃棄物資源循環学会関西支部

プログラム：開会挨拶 片渕 昭人 (公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会 会長)

第1部 基調講演

『人類と地球の関係が変わる21世紀～未来予想図～』

安井 至氏 (一般財団法人 持続性推進機構 理事長／東京大学 名誉教授／国際連合大学 元副学長)

第2部 パネルディスカッション

『サステナブルな大阪へ、私たちのこれから』

〈パネリスト〉

安井 至氏 (一般財団法人 持続性推進機構 理事長／東京大学 名誉教授／国際連合大学 元副学長)

森 摂氏 (株式会社オルタナ 代表取締役社長・編集長)

濱田 篤介氏 (公益社団人大阪府産業廃棄物協会 理事／株式会社浜田 代表取締役)

〈コーディネーター〉

辛坊 治郎氏 (ニュースキャスター／株式会社大阪総合研究所 代表)

〈企業事例発表〉

当麻 潔氏 (大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 主席研究員)

閉会挨拶 井出 保 (公益社団人大阪府産業廃棄物協会 副会長)

## PROFILE



**安井 至氏** (やすい・いたる)

一般財団法人持続性推進機構 理事長／東京大学 名誉教授／国際連合大学 元副学長

1945年東京都生まれ。1973年、東京大学大学院博士課程修了、工学博士。1990年、東京大学生産技術研究所教授。2003年、国際連合大学副学長。2005年、東京大学名誉教授。2009年、(独)製品評価技術基盤機構(NITE)理事長(現在は名誉顧問)。環境省中央環境審議会委員ほか多数就任。専門分野は環境科学(環境負荷総合評価、ライフサイクルアセスメント、環境材料、グリーンケミストリー評価尺度、リスク科学)。著書は、「市民のための環境学入門」(丸善)、「環境と健康 誤解・常識・非常識」(丸善)、「地球の破綻」(日本規格協会)ほか多数。主催するホームページ「市民のための環境学ガイド」は継続19年目でアクセス数865万以上。鳥瞰型・俯瞰型環境学の重要性を、門外漢にもわかりやすく解説している。



**森 摂氏** (もり・せつ)

株式会社オルタナ代表取締役社長・編集長

東京外国語大学スペイン語学科を卒業後、日本経済新聞社入社。流通経済部などを経て1998年～2001年ロサンゼルス支局長。2006年9月、株式会社オルタナを設立、現在に至る。主な著書に『ブランドのDNA』(日経ビジネス、片平秀貴・元東京大学教授と共著、2005年10月)など。訳書に、パタゴニア創業者イヴォン・シュイナードの経営論「社員をサーフィンに行かせよう」(東洋経済新報社、2007年3月)などがある。一般社団法人グリーン経営者フォーラム代表理事。特定非営利活動法人在外ジャーナリスト協会理事。『サステナブル・ブランド国際会議』日本プロデューサー。



**濱田 篤介氏** (はまだ・とくすけ)

公益社団人大阪府産業廃棄物協会 理事／株式会社浜田 代表取締役

1963年大阪府生まれ。大阪電気通信大学工学部卒業後、ソフトウェアエンジニアとして一般企業へ就職。1993年株式会社浜田入社、2003年代表取締役就任。1998年より大阪府産業廃棄物協会青年部会長を2年務めた後、全国産業廃棄物連合会で青年部協議会の設立に関わり副会長を経て、2005年から2期4年間会長を務める。2005年社団人大阪府産業廃棄物協会理事就任。2015年、「地球と子どもたちの未来を救う」善意の力で疎なる資源を密に集める」をキーワードにNPO法人Future Earthを設立し理事長に就任。同法人の最初の取組として、使用済みクレジットカードの回収スキーム構築を目指す。



**辛坊 治郎氏** (しんぼう・じろう)

ニュースキャスター／株式会社大阪総合研究所 代表

1956年鳥取県米子市生まれ大阪府岸和田市出身。1980年早稲田大学法学部卒業。同年読売テレビ放送株式会社入社。アナウンサー、キャスター、ドキュメンタリープロデューサーなどを担当。1993年報道局解説委員。1996年USIA(アメリカ国務省文化交流庁)の招きで米国メディア研究。1997年～1998年ニューヨークベネズエラ大学客員研究員。2000年報道局情報番組部長。2004年芦屋大学客員教授。2009年読売テレビ解説委員長。2010年読売テレビ放送株式会社退社。同年(株)大阪総合研究所代表就任。現在(株)大阪総研代表、読売テレビ、ニッポン放送等でキャスター、ニュース解説を担当。



**当麻 潔氏** (とうま・きよし)

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 主席研究員

1954年奈良県生まれ。1977年大阪市立大学工学部卒業。大阪ガスに入社後、供給部門、技術開発部門を歴任後、(財)エネルギー総合工学研究所(経済産業省所管)に転出。帰社後環境部を経て現職。エネルギー・環境リテラシー向上活動を積極的に展開。吹田市環境審議会委員。寝屋川市環境保全審議会委員。NPO法人こども環境活動支援協会(LEAF)理事。NPO法人奈良ストップ温暖化の会理事。

## パネルディスカッション

## 『サステイナブルな大阪へ、私たちのこれから』

【司会】皆様、お待たせいたしました。それでは、ただいまからパネルディスカッションを始めてまいります。

では、早速、パネリストの皆様をご紹介させていただきます。

まずは舞台中央より、先ほどご講演いただきました安井至さんです。(拍手)

続きまして、株式会社オルタナ代表取締役社長で、環境とCSRにフォーカスした日本唯一の雑誌「オルタナ」の編集長、森撰さんです。(拍手)

続きまして、公益社団法人大阪府産業廃棄物協会理事で、株式会社浜田代表取締役、瀧田篤介さんです。(拍手)

そして、コーディネーターはニュースキャスターで、株式会社大阪総合研究所代表、辛坊治郎さんです。(拍手)

さて、今回のディスカッションのテーマは、「サステイナブルな大阪へ、私たちのこれから」です。

それでは、皆様、よろしくお願いいたします。

【辛坊】よろしくお願いいたします。進行の辛坊でございます。

今回は、第3回地球環境保全のための3R推進フォーラムということで、過去2回にわたって、去年、おとしとやってまいりましたフォーラムの3回目、そして集大成でございます。今日、一定の大きな結論を導いて、この3回を締めくくればいいなど考えておりますので、今日のパネリストの皆さんは、過去2回に比べると、ずっと重責であるということで、ひとつよろしくお願いいたします。

1回目のディスカッションは、「地域における3R推進への道筋」というタイトルで、行政の取り組みに焦点を当てて、おとし、お届けいたしました。中で結論というほどではありませんけれども、大きな方向性として「三方よし」という言葉が取り上げられまして、「事業者よし」、「処理業者よし」、そして「市民よし」、これを目指すべきであると。

そして、去年ですが、第2回目は、「共有価値の創造に向けた企業の挑戦」というテーマで、企業の役割に焦点を当てて、今後この3Rを推進していくための原動力となるべきは、CSRからCSVであると。ご存じのようにCSR(Corporate Social Responsibility)

ですか、企業の社会的責任として何をやるかという価値観ではなくて、CSV(Createing Shared Value)、共通の価値をどうやってつくっていくか。いろんな人たちを巻き込みながら、新しい価値の創造という、いわゆる企業の社会的責任を超えたところにやはり目標点を置くべきではないのかということで、1回、2回、進めてまいりまして、今回が集大成の3回目です。

今回は、テーマが「サステイナブルな大阪へ、私たちのこれから」、市民の取り組みに焦点を当てて話を進めてまいりたいと思います。まあ、まさにサステイナブル、どうしたら持続可能なのか。先ほどの基調講演の安井先生のお話の基本テーマでもありましたけれども、このあたりを軸に今日は皆さんと討論を進めてまいりたいと思います。

どうぞ皆さん、よろしくお願いいたします。(拍手)

まず、安井先生は先ほど基調講演をいただきましたので、大体3時10分ぐらいから15分ぐらい、私とのやりとりの中で、これから一体我々の生活、社会はどうなっていくのかという話をもう一度していただきますが、その前に、パネリストのお二方に自己紹介を兼ねて、この問題について思うところを述べていただきます。

まずは、森さんからお願いしましょうか。株式会社オルタナ代表取締役社長、そして編集長でいらっしゃいます。森撰さん、お願いします。

【森】皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。株式会社オルタナは東京の会社なんですけど、実は私は大阪生まれ、奈良育ちです。第一の故郷は関西だと。そして、関西の復活がない限り、日本の将来はないと強く思っていますので、ここからはちょっと大阪弁でしゃべらせていただきたいと思います。

私は何者かということ、元々新聞記者を20年やっていまして、その後、独立してこの会社をつくりました。日本で唯一の環境サステイナビリティ、あるいはCSRの雑誌であります。どういう雑誌かということ、ちょっとこれは古い紙面なんですけど、一番左、どなたがおわかりでしょうか。宮沢賢治なんです。宮沢賢治というのは、ものすごく地元の地域の農業に貢献をされた、実は地質学者なんですけど、こう



いった第1次産業のネタから、あるいはピーター・ドラッカー、コトラー、ポーターとかいう経営の、特にCSRと経営論をやったり、一番右側は孫さんで、この時は原発事故の直後だったので、エネルギー問題を特集したりと、ビジネス情報誌なんですけど、すごい幅が広くて、それだけやっているほうもすごく楽しくやっております。

紙の雑誌以外は、「オルタナS」という、「S」というのは「Social」と「Student」をかけた言葉で、要は若者たちって最近すごくソーシャルに目覚めているんです。世の中を何とかよくしたいとか、地球全体の課題あるいは途上国の課題、ものすごく関心が高い若い子がすごく増えていると。

この間、話を聞いたのは、地元大阪でHomedoorというNPOをやっている川口加奈さん、あいりん地区のホームレスを何とか働けるように、レンタル自転車の事業を始めて、かなり東京でも有名になってきたんですけど、こういった話なんか積極的にやっています。

さっき、辛坊さんのほうから、第2回はCSRからCSVへという流れだったとお伺いしまして、ちょっとここだけ一言コメントをさせていただくとすると、CSRからCSVへという、なんかCSRは古いもののようなイメージがあるんですけど、実はそうではないと。僕がよく申し上げているのは、オリンピックで例えると、CSRはルールである。CSVは競技である。つまり、ルールを忘れた競技はあり得ないということですね。

もう1つ大事なのは、このルールが国際ルールなんです。よく変わるんです。ころころ変わるんです。例えば、昔バレーボールの1セットは15点だったと思うんですけど、いつのまにか25点になっている。あるいは柔道着の色が白から青に変わっているとか、どんどん国際ルールが変わっていくと。

その中で、今度、企業の社会的責任を果たすということも訳語はあるんですけど、これも最近ちょっと違うんじゃないかと言われているのは、レスポンスビリティというのは、英語で言うと「Responsibility」つまり対応力と。つまりCSRは企業の社会対応力であると。もちろん社会的責任という言葉は大事なんですけど、それに加えて、最近ではこういう訳語が出てきているということをちょっとご説明した上で、やっぱりそれはルールですごく大事なところで、それに基づいたCSVをという見方がいいんじゃないかなと思ひまして、あえて一言述べさせていただきました。どうもありがとうございます。

**【辛坊】** ありがとうございます。

雑誌の「オルタナ」ですが、海外取材なども非常に幅広く展開していらっしゃるって、後ほど、その中で最新の号で取り上げられた海外の住民の皆さんがどうやって環境問題にかかわっていらっしゃるのか、3Rということでもかかわっていらっしゃるのか、この辺の報告をしていただくことになっております。

それでは、続いて濱田篤介さん、お願いいたします。公益社団法人大阪府産業廃棄物協会理事で、株式会社浜田の代表取締役でいらっしゃいます。お願いします。

**【濱田】** 濱田と申します。よろしく申し上げます。先ほど紹介いただきましたとおり、会社の紹介と兼ねて、今回、主催者の大阪府産業廃棄物協会の理事も務めておりますので、その立場でも少し協会の宣伝も含めて、自己紹介を兼ねてやらさせていただきます。

会社名は株式会社浜田と。何をやっている会社か全然わからないと思うんですけど、事業内容はこの後、少し簡単に説明させていただきます。

先ほど安井先生の話で、3代で会社を潰すというか、身上を潰すという話はよくあるんですが、私は2代目で、あともう1代しか残らないかなと思ひているんですが、2代目で社長をやっております。実は30歳の時に親の会社に戻りまして、22年前になるんですけども、その時は従業員数も、この10分の1ぐらいで、売り上げも10分の1ぐらいだったと思ひます。頑張ってきたつもりなんですけれども、こういう会社で勤めております。

少し自己紹介をさせていただきますと、30歳の時にこの業界に入ってすぐに産廃業をやろうということで、この協会に入らせていただきまして、2005年から協会の理事をさせていただいております。そんな中で、今、組織広報委員会というのに属しております。今日、皆さん、ノベルティーのかばんの中に「Clean Life」という雑誌が入っていたと思ひます。協会が発行するこういった書籍の発行の内容を詰めたりとか、そういうことをやっています。

もう1つ、『廃棄物のトリセツ』という本です。今日は一般の方もいらっしゃると思ひます。産廃って非常に難しいんですけど、そういったものも漫画なんかを使って、すごくわかりやすく説明しているつもりなので、こういったことの活動もしております。

この3R推進フォーラムも3年目になるんですけど、実行委員会のほうにも3年前から企画に加わっております。まさか、今日、この壇上で僕が話すこと

になるとは思っていなかったんですが、つたない話ですが、ちょっと聞いていただければと思います。

先ほども言いましたけれども、社名からは何をやっている会社かよくわかんないですけども、もともと私が入った時は、製鋼原料と書いていますけど、簡単に言うと鉄くず屋です。スクラップを集めて切ったり固めたりして、製鉄メーカーに売るという商売をやっていました。当時、今もそう、鉄くずをさわり始めて、非常に状況は悪いんですけども、鉄くずを集めるために上流工程の仕事をやろうじゃないかということで、鉄くずが出る商売ということで解体事業をやったりとか、それで私が入ってから産廃をやり始めようと。要するに、使い終わったごみの中から鉄とか銅とかアルミとかステンレスをほじくり出して、それをリサイクルすると。残った廃棄物を適正に処理するという仕事をやり始めました。

最近になって、もう1つ新しい事業ということで、使い終わった鉛のバッテリーがたくさん金属物と一緒に出てくるんですけども、これをリサイクルということで、そういう精錬メーカーに売却していたんですけども、これ、もしかしたらもうちょっと使えるんじゃないかなということで、そういったもののリユースをする仕事を含めて、太陽光の仕事をやったりとか、太陽光とリユースできるようになったバッテリーと組み合わせたエネルギー事業とか、そういった新しいことをやっています。

我が社の成長戦略ということで幾つかあるんですけど、まずはエリア戦略ということで、先ほどありましたように大阪の高槻というところに工場があるんですけども、2011年にM&Aということで京都のオカガミという同業者の買収をして、京都に拠点をつくりました。2013年に東京の江戸川区の船堀というところに東京リサイクルセンター。来年2016年には、今許可申請の真ただ中ですが、これから整備をして2016年に大田区の京浜島というところにエコロジセンターと。東京はやっぱり景気がいいので、そっちのほうに進出しているという状況です。

もう1つが同業者のネットワーク、我々の仕事は非常に専門性と地域性が高いので、それを相互に補完し合うための仕組みということで、数社が中心になってエコスタッフ・ジャパンという会社を立ち上げて、今全国に展開しているところです。

もう1つが、「Employment」と英語で書いていますけれども、私が社長になった2003年から活動を始めまして、新卒採用をやっております。2005年入社から数えて、今12年目の大学生の新卒採用をやって、優秀な人材を確保していこうということで努め

ております。

先ほどもありましたが、ソリューション事業ということで、エネルギー事業とかりサイクル用のプラントを食品メーカーさんに納めたりというような仕事もやっております。

経営理念と経営ビジョンを簡単にいきますと、3つの言葉で「誠実・感謝・感動」という言葉を大事にしようということで、経営理念は環境ソリューションのファーストコールカンパニーということで、英語が多いんですけども、もともと鉄くず屋さんですけど、いろいろやり過ぎて一言で言いにくくなったので、当社のことを環境ソリューション企業と呼んでいまして、その一番先にお呼びがかかる会社になりましょうよというのが、我が社の経営ビジョンという形でやっております。

どうぞよろしく願います。

**【辛坊】**ありがとうございます。濱田さんは、今日は先進的な取り組みをしている企業ということで、後ほど報告いただきますが、それと同時に協会の理事としてのお立場でも、ご発言をお願いいたします。

さあ、進めてまいりましょう、最初のテーマはこちらです。「20年後、地球、私たちの暮らして何が起きているのか」まず、これを抑えた上で、どうやってそれに対して何をどう解決していくのかという話で進めてまいりたいと思います。

ここのテーマは、安井先生に願いますが、先ほどは膨大な資料とともに詳細なお話をいただきましたので、その中で特に我々の身近なところで20年後、どうなりそうかというお話をしていただきたいんですが、よろしく願います。

**【安井】**先ほど地球レベルの話ばかりで、個人の生活がどう変わるかというのは、実を言うと、あんまり専門にしていないんですけど、でもやはり日本という社会は、1つは人口の減るのは結構痛いことは痛いですよ。だからといって、さっき申し上げましたように、バングラデシュから移民を1,700万人入れるかと言われると、どうかなと思ったりはしております。

そうになると、やっぱりそれなりにこの社会が継続可能になっていくというのが一番重要で、継続可能と持続可能って、一体それじゃ、何が違うのかという問題に多分なるんですけど、継続可能というのは、多分個人が同じことをやっても、続く社会が継続可能な社会。持続可能な社会というのは、社会が継続可能にするために自分は変わるという社会だと私は思うんですね。ですから、なかなか難しいことなんですけど、結局、自分をどうやって変えていっ

たら社会全体として、それが持続可能になってくるか。ある意味、自分を変えることが喜んでできる人間がどのくらい増えるかというのが非常に大きな問題なんだけど、例えば日本の年金問題に何をしたら、やっぱり既得権益ですからね、これ。やっぱり今この年になって年金要らないよと、私も言えないし、なかなかつらいですよ。

そういう意味で、ここまで地球上で人類が繁栄してきて、それで化石燃料とのつき合い方も、1750年くらいから始めたつき合い方をそろそろやめなきゃいけない。多分2080年くらいにはやめなきゃいけないんですけど、2030年、だからそこでもって変曲点、要するに方向性が変わるんですね。というようなことになってきた時に、皆様の覚悟はどこまでできているのかという話になっちゃって、これはあんまり受け入れてくれそうもないなんて思いつつ、そんなことを言っていますね。

**【辛坊】** 安井先生、ぜひ伺いたいですけれども、今回、大変説得力のある先生の先ほどの基調講演だったんですが、世の中には、私もまだ番組をやっていると、どの番組とは言わないんですけど、日曜日の午後にちょっと特殊な番組をやっていたりする。そうすると、「いや、地球は温暖化していない」とか、「温暖化したって大丈夫じゃないか」とか、「年金なんか破綻しない」とか、そういう人たちがまだまだこの国にはたくさんいるんですけど、ご専門のお立場から見て、そういう意見はどういうふうに見えていますか。

**【安井】** それは結局、自分を変えたくないために言っているうそ、方便だと思っていますね。

**【辛坊】** うそ、方便であると。

**【安井】** はい。

**【辛坊】** ぜひ、うちの番組へ出ていただけませんか。

**【安井】** 何ていうかな、もともと科学者というかサイエンス側だと、あんまりそういうことを言うと大体受け入れられないので、あんまり言いたくはないんですけど、結局、温暖化は何をやっているのかというと、大気の組成をCO<sub>2</sub>を出して変えちゃったというのが1つですよ。変えちゃって何が起きたかということ、地球には太陽がどんどんエネルギーをくれているわけですから、普通にやっているとエネルギーはたまっちゃう。だけど、今までの地球は、それを赤外線の格好で外に捨てているんですよ。捨てている赤外線を途中で温室効果ガスが吸収して一部分が戻ってきちゃうものだから、地球は今エネルギーをがんがんためこんでいる。これは誰が考えたってそうなんです。これが何もものを起こさない

というのは、まあ、火をたいても、なぜか全然やけどをしないと、それに等しいですよ。なんかすごい簡単な話なんだけど、何でこれどうそがつけるのか不思議でしょうがない。

**【辛坊】** 今のはなかなか1つキーワードで、「何でどうそがつけるのか」というのは、逆に全く立場の違う人がそういう本を書いてベストセラーになったりなんかしたことがありましたよね。

**【安井】** やっぱり彼らにとっては、うそというよりも、結構そういうのを支持してくれるレイヤーというのがいっぱいあって、先ほど申しましたように、実を言うと、大企業はイノベーションを起こせないんです。大企業の従業員は、したがってイノベーションをやりたくても起こせないという非常に苦しい立場にあるものだから、ああいう思想に自分のよりどころを求めちゃうんですね。自分の会社を変えないで済むので、それで、そういう潜在的な社会のニーズって結構あるんですよ。したがって、それでもってお金をもうけて家を建てたい、辛坊さんの番組へ出ていた方なんかもおられますけど、誰だかは言いませんけどね。

**【辛坊】** そうすると安井先生、やっぱりこのまま放っておくと、この国は、我々の地球は、我々の生活は、やっぱり持続可能、サステイナブルではないという現状でしょうか。

**【安井】** と思いますけどね。ただ、サステイナブルって、そもそも定義がよくわからない。これは後で森さんにしっかり伺わなきゃいけないんだけど、サステイナブルはさっき申したように、変わらないという意味じゃないんですよ。だから、要するに変わっちゃうんですよ、そちらもね。特に自分が変えることによって、何となく変わりながら転がっていきけるような社会にするという意味なので、今のままの状態をずっと保とうというのが持続可能性ではないといえば、まあ、持続可能な社会は地球がどうなっても、つくり得るかもしれない。

**【森】** ちょっとよろしいですか。

**【辛坊】** どうぞ。

**【森】** 実は、私どもが雑誌を始めて、わりとすぐに安井先生のところに取材を何度もさせていただきまして、実はかなり影響を受けた雑誌なんですけど、先生の言葉を代弁させていただくとすれば、さっき三角形の持続可能性の図がありましたよね。あそこ一番上に家族があったというのはすばらしいことだと思います。

例えば、22世紀というと、私たちは大分先のことのような気がしますが、よく考えたら、安井先生



はお孫さんがいらっしゃると思うんですけど、私も多分もう数年で孫ができるかもしれない。まだそれはわかんないですけど。つまり、2015年以降に生まれた彼らは、あと85年ということはおそらく22世紀に生きているんです。意外に近いと思いませんか。そこまで考えることが、おそらくはサステイナブルとか、サステイナビリティという話ではないかなと、そういうふうに思います。

【辛坊】やはり事業をしていらっしゃる立場で、多分濱田さんも、このまいくと地球は、生活はサステイナブルではないのではないかと実感するような時もおありになると思うんですが、いかがですか。

【濱田】我々の仕事自体が、静脈産業という言い方をしていますけど、要するに後始末の仕事なんですね。今起きているイノベーション、例えば太陽光発電とか、そういうことが、いわゆる固定買い取り制度、FiTですね、これで太陽光メガソーラーとかいっばいできましたけれども、こういったものもサステイナブルなためのソリューションなんだけれども、これもいつかはやっぱり後始末をしないといけない時が来るということも考えて、いろいろやっていけないといけないなと考えております。

【辛坊】静脈産業というのは、私もこのフォーラムをさせていただくという話で、実は初めて知って、業界の皆さんは認識していらっしゃるようですが、一度世の中に送り出したものを集めてきて、やっぱりもう一遍循環させないと、それは人間の体が持続可能ではないのと同じように、静脈の部分がうまく社会の中で機能しないと、社会全体が人間の体と同じように機能しなくなるという意味では、なるほど世の中はそういうふうになっているんだなど。お三方の話で大変よくわかったのは、やっぱり世の中には持続可能であると、今のままでいいんだということをも主張する人もたくさんいるけれども、間違いなく今のまま現状を放置しては、これはサステイナブルではないと。じゃ、どうするのかという話をこれから深めていきたいと思えます。

次のテーマにまいります。テーマその2、「サステイナブルシティーに向けた取り組みと課題」ということで、ここは事例報告なども含めまして進めてまいります。

ここは、先ほどちらっと話が出ましたけれども、濱田さんに太陽光ビジネス、太陽光パネルのリサイクルの話、これは非常に熱心にやっていらっしゃると伺っていますので、どんな状況か報告をしていただきます。

【濱田】我が社は、先ほど新卒採用をやり始めて10

年以上たつんですが、若手の社員が新しいビジネスを考えるというのを社内的にやっておりまして、その中でEnjoy Solifeという、彼らがつくった名前なんですけれども、太陽光の発電パネルもいつかこれも寿命が来るので、そういったものをしっかりとリサイクルすることを考えないといけないですよということでやり始めた事業です。やり始めたばかりなんですけれども。先ほども申し上げましたとおり、FiTでたくさん太陽光パネルが設置されて、やっぱり15年、20年後ぐらいからパネルの後始末をしないといけないということになっております。

実は、去年度の予算からNEDO、経産省のエネルギー関係の外郭団体がお金を出して太陽光パネルのリサイクル技術の研究をえています。1次の予算の時は我々は応募していなくて、我々もそういうつもりもなかったんですけれども、いろいろ太陽光パネルをリサイクルするための設備を入れてテストをやっていた中で、あまりうまくいかなかった実験のあとの太陽光パネルの処分をしてくれと言われたんですね。ガラスと中のセルとが非常に密着していて、リサイクルはもちろんできいんですけど、埋め立て処分場からも断られて、もちろん焼却工場からも断られて、なかなか行き場がないと。これはやっぱり何とかせなあかんかと考えまして、ある機械メーカーさんと共同で、今年度のNEDOの予算に応募して、それが採択され、やり始めることになった事業について説明を少ししたいと思います。

先ほど安井先生の話でも、シリカが不足してくるということだったんですが、大阪のとある企業さんの液晶パネル用のガラスをリサイクルするということをして10年前に着手したんですが、これもどっちかというと、我々は処理側じゃなくて流通側で、リサイクルできるところにうちが運んでというような仕事をやっていたんです。先ほど言いましたように、太陽光パネルに関しては、後始末をしないといけない課題だなということでやり始めました。

太陽光パネルは15年たっても、半分ぐらいはまだ使えるものがあるということで、我々のほうで選別してリユースできるものはリユースして、リサイクルしないといけないものはリサイクルするというスキームを考えていて、そんな中で今年度、機械メーカーと共同で出したテーマが、太陽光パネルのアルミのフレームはとっちゃうんですけれども、ガラスとセルの部分、回路の部分、シリコンのモジュールがついたところをホットナイフと言って、加熱した刃で2枚におろすんですね。

【辛坊】えっ、あの薄いものを2枚におろせるんで

すか。

【濱田】それがね、結構きれいにおろせるんですね。

【辛坊】すごい技術ですね。いや、私、今話を聞いていて、ちょっと話の途中で申しわけないんですけど、うち、10年前に太陽光を導入して既に10年たっているんですよ。だけど、導入する時、企業はまさしく動脈の送り出すほうの産業の人たちは、そこから後、どうするんだということを考えずに出荷しているものなんですか。私も初めて聞いて、えっ、そんなこと考えずにやっているんだというのを安井さん、しきりにうなずいていますけど、世の中そういうものなんですか。

はー。それを一からどうやったら、つまりごみとしての受け入れもしてくれない、かといって大量にこれから出回る、それでまずパネルをスライスするという話ですね。そこから続けてください。

【濱田】はい。我々も、そんなこと現実的ではないと思っていたんですけども、実はこれはメーカーさんの発想で、要するに太陽光パネルとセルとを密着させる装置をつくっている会社さんが、この技術を持っておられまして、我々、静脈産業側と組んでやりたいということで、一緒に共同で出して、私もちょっと眉唾やなと思っていたんですけど、実際見せてもらって、ゆっくりゆっくりやって、例えば1枚を5分も6分もスライスするのにかかっていたら現実的じゃないなと思ったら、意外と1分以内にさーっときれいに。

【辛坊】へー、それでガラス部分と下の部分とが分離するんですか。

【濱田】ええ。多少、接着剤的なものがガラスに残るんですが、これは除去できる範囲のものだということで、今回いろいろ、この先、国のお金が3分の2は出ますので、それをもらいながらそういった研究をやっていくということになっています。

【辛坊】これはどうですかね、世界的に太陽光パネルって普及していますけれども、こういう技術は世界的にあるものでもないんですか。

【濱田】この間、実は渦中のベルギーに太陽光パネルリサイクル協会みたいなのがありまして、いろいろ話を聞いていたんですけども、どっちかということ、そっちは制度側の協会で、処理技術のほうはこれまでの従来の技術です。シュレッティングして、要するに細かく砕いた後に分離する技術はすごく研究が進んでいて、それも日本と同じなんです。スライスするというのは、この間、新聞に載っていましたがけれども、我々のチームと某電機メーカーさんが発表されていましたが、スライスするというこ

が新聞に載っていたんですけど、多分今のところ、その2件だけじゃないかと。

【辛坊】なるほど、まさしくここに、関西の地に世界的な先進技術があるということですね。

【濱田】まあ、我々がちょっとお願いしてつくってもらっているだけなんですけど。そういったことでやっていきたいと言いながら、やっぱり3Rなので、我々はまだ使えるものは使いたいということで、まず撤去された太陽光パネルの絶縁試験をやったりとか、パネルそのものの能力テストをやったりして、ある一定の基準をクリアしたものはリユースに回そうと。そうでないものは適切にリサイクルしようとして、そういうビジネスモデルを展開しようとしているのが我が社の今後、15年後、20年後のビジネスのために、今人材も投資しているということです。

【辛坊】濱田さんは、実はそうした企業としての取り組みと同時にNPO法人をつくって、そちらでもやっぱり太陽電池に関してのリユース、リサイクルに取り組んでいらっしゃるって伺ったんですが、そちらの活動をちょっと紹介していただけますか。

【濱田】実は、太陽光とは少し違うんですけども、もともとは私の友人がクレジットカードの会社に勤めておりまして、10年ぐらい前になるんですけど、「クレジットカードで、環境で何かアイデアないか」というざっくりした質問が来て、クレジットカードで小さい金のチップがついていると思うんですけど、あれで金がとれるんですね。

【辛坊】えっ、あのクレジットカードのICチップの金色は本当の金なんですか。

【濱田】含まれています。

【辛坊】へー。

【濱田】今の金の相場でいうと、1枚当たり大体2円ぐらいするんですね。それをリサイクルしたらいいんじゃないかなみたいなレポートを渡したら、会社の中では銀賞か何かをもらったと言っていました。ただ、クレジットカード会社としては個人情報とか、いろいろ問題があるので、そういうのを積極的に集めるのはなかなか難しいねということで、会社内で集めたやつはそういうリサイクルにするということとどまってはいるんです。そういったものを何とか集められないかということで、このNPO法人を立ち上げました。

先ほど地上資源とか地下資源とかという言葉あるんですけども、要するに地中で金の鉱山から掘っていくのは地下資源で、一度精錬されて使われた後の資源が地上資源ということで、これをリサイクルする仕事を我々は一生懸命やっているんですけども、

実はクレジットカード会社から新しいカードが届くと、はさみで切っておみ箱に捨ててくださいねと来るわけですね。そうすると、市の焼却場で燃やされて、大阪でいうとフェニックス、大阪湾に埋め立てられて、これは地下資源でも地上資源でもなくて埋没資源になっちゃうんですね。これを何とかほじくり返してできないかなというのが、このNPOのテーマというか。

【辛坊】クレジットカード1枚で2円の金で、今この精密機械等に使用された貴金属、携帯電話なんかにもよく入っていると聞くんですけども、それ以外にもそんなに希少、お金になる金属みたいなものは、身の回りのものに結構あるものなんですか。

【濱田】小型家電リサイクル法というのが施行されましたけれども、当然採算に合うところは決まってくるんですけども、携帯電話は多いほうですね。デジカメも多いと思います。集積率の高いようなものは、多分貴金属がたくさん使われていると思います。

【辛坊】そして、「ここには、しかし課題もある」というふうに後ろにあります。

【濱田】そうですね。我々、金属関係のリサイクラーは、ぶっちゃけた話、価値のあるもの、お金になるから集めてリサイクルしているんですけども、これは仕事の世界なんです。NPOは、お金の力では1枚2円のやつはなかなか集めにくいんですね。ペットボトルのキャップを集めてポリオのワクチンにという活動がありますけど、あれも1個1個見るとすごく小さいんですけども、善意の力で集めるとすごい集まっているんですね、あれもね。同じように、クレジットカードは1つ1つは非常に小さい価値なだけけれども、これをフェニックスの埋め立て地に埋まってしまうと、もう二度と掘り返すことができないので、それを何とか善意の力でリサイクルできないかなというのが、このNPOの活動なんです。まだ始まったばかりで、当然、個人情報がかかっているの、カードがシュレッティングできる市販のシュレッダーを買ってきて、今うちの会社はもちろんのことですけども、高槻市役所の出先の市民交流センターみたいなところとか、商工会議所とか、そういったところに置いてもらっています。まだまだ全然広まっていないし、今日、この場でお話しをする機会をいただきましたので、こういったものが我々同業者を中心に広がっていけばいいなと思っています。

【辛坊】なるほど。人件費を払ってペイできるものは事業にできるけれども、それを払っていたらペイしない。でも、そこにただ捨てられたらもったいな

ものは、まさに市民の力で未来のためにという発想ができるということですね。

【濱田】そうですね、何とかお金の力じゃなくて善意の力で集められるものは集めて、お金の力でやるのは我々が商売でやりますので、そういうふうに分けて考えております。

【辛坊】なるほど。今の話を聞いて、森さん、専門家として思うところはいっぱいおありになると思いますが。

【森】太陽光パネルのリサイクルって、僕も前からどうしているのかなとずっと疑問に思っていたので、こういう身近なところで、まさか隣の席の人がやっているとは思わなかったんですけど、こういう新しい取り組みは本当に素晴らしいと思います。

先ほど安井先生のお話にも出てきたんですけど、日本は化石燃料を1年間に27兆円も入れていると。これが要らない世界が来るかもしれないとおっしゃいましたけど、そういうお金をこういうところを使うのは、すごく大事だと思うんですね。つまり、ポスト化石燃料、日本はどうやってエネルギーを調達するのか、あるいは電気をつくっていくのかと。この辺が、まだ現在の政権には確固とした方向性、先ほど目標とゴールという言葉もありました。まさにそのとおりで、目標はないんですね。そこはものすごく残念です。

電力のほうでいうと、来年2016年の4月から電力自由化になって、既存の電力会社の発電した電気もあれば、こういう太陽光発電あるいは風力、バイオマス、地熱と。これは例の2011年、まさに東日本大震災が起きた日に再生可能エネルギー推進法という、あの朝に閣議決定された。その閣議決定が数時間おくれたら、多分震災でできなかったんじゃないかと。奇跡的に閣議決定されて、翌2012年7月から施行されて、皆さんご存じのとおり、再生可能エネルギー、僕らはもっと簡単に自然エネルギーという言葉をよく使いますが、1キロワット当たりで大体30円とか40円というすごく高い値段で買ってくれるという法律ができたわけです。

これは当時、取材していて1つ耳を疑ったのは、全量買い取り制度が当時できたわけですけど、これ、実は世界で常識だったんですね。日本が導入したのが世界で八十何番目。イノベーションとしてはかなりおこなっているなど。こういうイノベーションのおくれは、ものすごくたくさんあるなという気がします。その中で、やっぱり自然エネルギー、再生可能エネルギーの分野は、日本が勝たなくてどうするんだというぐらい大事な分野ですので、それなりの公



的な資金あるいは人材の投入をもっともってほしいと思いますし、ここで競争力をつけなければどこでつけるんだというくらい大事な分野じゃないかなと思います。

もう1つあるのは、先ほど来、大企業はイノベーションが難しいと、これもそのとおりなんです。明治以来の重厚長大の企業ほどイノベーションが難しい。まあ、古い組織ということもあるんですけど。その中で、最近新しい潮流として出てきたのは、オープンイノベーションというの、これ、皆さんはよく聞かれたことがあると思うんですけど、世の中さまざまな社会的な課題がある中で、例えば企業単体じゃなしに、あるいは自治体単体じゃなしに、そこに大学とかNGOとかNPO、あるいは地域の人たちのそれぞれのノウハウ、技術、アイデア、知見を共有して、みんなで取り組んでいこうという動きがすごく増えてきていると思うんですけど。これをオープンイノベーションあるいはパートナーシップという言い方もします。企業とNPOの取り組みをよくそういう言い方をするわけですけど、今日、この会場にNPO法人とコラボして、学生に参加してもらいながら展開している、農業体験学校を運営されている大阪ガス、エネルギー・文化研究所の当麻さんにきていただいていますので、ぜひ壇上に上がっていただいて、そのことを皆さんにお伝えいただければと思います。

**【辛坊】**ありがとうございます。今、森さんに紹介いただきましたけれども、ご紹介しましょう。大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所主任研究員の当麻潔さん、壇上のほうへ。

今、ご紹介いただきましたけれども、先ほど濱田さんからNPOとして市民と企業を結びながら、希少金属のリサイクル回収などをしているという話がありましたけれども、当麻さんは大阪ガス株式会社の文化研究所の主任研究員として、やはり市民の皆さんと一緒に大阪の未来、地球の未来を考えるとこの活動をしていらっしゃる。どんな活動をしているのか、それではご紹介をお願いします。

**【当麻】**今、紹介がありました大阪ガス、エネルギー・文化研究所の当麻です。私からは、企業とNPOの協働による次世代教育の紹介をさせていただきます。

私が所属していますエネルギー・文化研究所は、まあエネルギー会社なので、エネルギーがつくのはおわかりになると思うんですけど、ポツ文化がついています、変わった研究所です。略してCELといいます。カルチャー、エナジー、ライフ、要は文化とエネルギーと生活を研究している研究所です。実は30年前、1986年、大阪ガスの創立80周年記念事業と

してできました。

事業活動、要は営業活動からちょっと離れて、中立的な立場あるいは生活者視点の立場、生活視点で持続可能な社会、生活を実現するための研究、あるいはその成果を情報発信する。長期的な視点によってテーマを設定して、有識者あるいは行政あるいは地元の人たちとのネットワークを築き上げる。理論的アプローチ、いわば机上の研究だけじゃなくて、実践的アプローチ、実証試験をする、そういう基本姿勢のもとに、この3つの分野で研究をしております。

エネルギー・環境、これは私の担当分野です。3・11東日本大震災でエネルギー問題が起きました。ところが、生活者は今までエネルギーのことをほとんど考えたことがない、もっとエネルギーのことを知りたいということで、私はエネルギーリテラシー、エネルギーの基礎知識をもっともっと生活者に知っていただきたいということで、講演活動、執筆活動をしております。

そして、今日、紹介します次世代教育、食・住まいでは、少子高齢化時代における住まいのあり方、暮らしのあり方、あるいは食育、火育。火育というのは、オール電化で生まれた子は火を見ることがないんですね。その子供たちに火おこしから火を使うことを教えて、火のありがたさ、火の危なさ、そういうことを教育する。こういう研究員がおります。

都市・コミュニティ、ここでは、地元の資源を有効に活用したコミュニティのあり方、あるいは都市魅力の採掘、要は昔の梅田はこうだったんやというのを、この研究員が語り部活動をやっています。

次世代教育の話です。最近の子供たちは集団生活ができない、人間とうまくつき合えない、あるいは創意を持って取り組むことができない、これはどうしてか考えると、要は自然や地域社会とのかかわりが少なかった、あるいは集団活動が不足している。地域や親の教育力が低下している、こういう問題を解決するために、次世代教育のあり方を考えようというのをスタートさせました。

その時に、ちょっと先、例えば2030年、世の中がどうなっているだろうを考えながら、その時代でのあり方、そういうのも考えてみました。先ほどから話が出ています人口問題、2100年には人口が3分の1になります。あるいは食料自給率、今は39%が続いています。6割が輸入です。人口が減ると土地が余ってきます。その土地をどう利用するのか。そこで農産物をつくれれば食料自給率が上がるんじゃないか、こういう30年後、50年後の社会像を想像しながら

ら、次世代教育、子供たちに生きる力を育む、そういう機会をつくるための第1次産業、農林水産を基盤とする学びの社会デザインという研究会を発足させました。

私の研究所、大阪ガスのCELと西宮で環境教育活動をしています、こども環境活動支援協会LEAFといます。私はそこの理事もしているんですけども、この2社が事務局になりまして、第1次産業ですから、JA、森林組合、漁業組合、コープ、農水省、あるいは兵庫県の、これ、西宮の活動をしていますから、ここに農地を持っています。ということで、兵庫県の農政部局との研究会をつくって検討を進めてまいりました。

彼らにどういう力をつけさせるか。自分で生きる力、野菜ができる、米ができる、あるいは自然、動物、季節、天候、そういうのに敏感になる。自然対話力、協働する力、コミュニケーション力、問題解決力、これらを生活体験、社会体験、自然体験、農林水産の第1次産業を体験することによって育もうというプログラムです。

2013年5月から1年間、このプログラムを回しました。大学生、いろいろな大学を集めました。神戸大学、関学、神戸女子大学、近畿大学、龍谷大学、5大学の学生、学部もばらばらです。農学部、教育学部、家政学部、9名の大学生を集めて、彼らに1年間、この体験学習をさせました。農業体験19回、林業3回、漁業4回、体験学習は大抵、この現場の体験だけで終わります。ところが、このプログラムの特徴は、体験だけじゃなくて、講義、座学もやっています。第1次産業の課題、あるいは第1次産業とエネルギー、環境問題、生物多様性の問題、こういう座学もやっています。かつ、お米の科学、魚のさばき、こういうのもやりまして、先ほどの研究会の開催時に彼らにも参加させています。体制はLEAF、CEL、そして地元の農業ボランティアの方、これらが彼らを指導する、一緒にやって学ぶと、こういう活動をしています。

その活動を写真をもって紹介します。

農業、要は米づくりです。皆さん、多分小学校のころに経験されたかもわかりません。その時は多分ですよ、田植えをして、稲刈りをして、とれたお米を炊いて、カレーを食べておいしかったなど、それで終わっているんですけどね。ところが、お百姓さんの仕事はそんな簡単なものではなくて、いっぱい苦労があるわけです。その苦労を彼らにもさせました。

草抜きです。夏の暑い日、ぬかるんだ田んぼに入って草を抜く。

稲刈りは当然かまです。機械で乾燥しますけど、こういう稲木をつくらせて乾燥させる。

稲作の問題は鳥です。スズメが食べに来ます。それらを防ぐためのネットも共同作業して張りました。

脱穀、今は機械ですけど、昔は機械がない。そのころどうしていたか、いろいろ体験させるために足踏み脱穀機、これがありました。脱穀したもみ殻をすり鉢でソフトボールで回しながらとるんです。もみ殻をとりますからふっと吹いて、また潰すと。そうすると、学生の中に花粉症の学生がおりましてくしゃみがとまらない。とうとうやめさせましたけど、そういう原始的なこともさせています。

野菜づくり、これはまず耕運から始まります。まずくわでやって、くわではでききれないので、耕運機を使います。それと牛ふんを使います。鶏ふんを使います。堆肥もつくります。落ち葉はほかすんじゃなくて、集めてきて堆肥をつくります。そして畝をつくらせて、これはサツマイモですけども、夏は汗をかきながら草抜きをします。私は熱中症になりながら、彼らと一緒にやりました。とれたサツマイモはうれしんですよ、この顔を見てください。こういう作業させると。

漁業、これはカキの養殖です。こういう体験をさせたんですけど、ここで働いている方がほとんど中国人だったんです。それはどうしてか、漁業を継ぐ人がいない。みんな都会へ行ってしまう。ですから、仕方なしに中国から手伝いに来てもらっていると、こういう第1次産業の労働問題、こういう体験もさせています。

林業、チェーンソーを使うのは危ないので、山に入りまして、細い木を間伐する。そして、なたで割る、結構大変な作業です。女性にはなかなか力が入らない。でも、やらせました。

お米の科学、これは大阪ガスが関係していますから、大阪ガスのクッキングスクールの先生に来ていただいて、お米のとぎ方、ご飯の炊き方、こういうのを学びました。

火育、原始的な火おこし、今の子供はマッチもすれない。そのもっと先、もっと前、火おこし体験、これもさせています。

魚のさばき、皆さんの中でさばいた方はあまりおられないと思うんですけど、私も初めてさばきました。大きなアジ1匹を配りまして、3枚におろすんですけど、ここにいっぱい身がつくんです。それをそぎ落とすと4枚になってくるんです。それを1人1匹食べました。これだけ魚を食べたのはみんな初めてです。嫌いな子でも、魚を自分でさばくと食べ

れるようになるらしいです。

やっぱり日本の伝統文化を教えなあかんということで、わらでしめ縄づくり、こういうものをさせています。研究会で彼らに1人1人、パワーポイントをつくらせて報告させると。これが就活にもちょっとは役立ったんじゃないかなと思っています。

最後、彼らがつくった野菜、お米で私たち指導員をねぎらってくれた。こういう感謝祭というもやっています。

アンケート調査で、先ほど紹介しました5つの力がどんだけ身についたかを調べますと、内側がこの体験をする前、外側が体験した後、全ての力において向上されているわけですね。具体的にどこに力がついたか。自活力、お米や野菜が自分でつくれる。自然対話力、自然災害情報に敏感になった。協働する力、新たなメンバーとも仲よくやっつけける、共同作業ができる。コミュニケーション、人の意見をよく聞くことができる、あるいは自分がかうまく話せるようになる。問題解決力、こういうのも確かについています。

その後、彼らが次のステージへどう生かされているかヒアリングしました。ある子は、農業がますます好きになって、JAに就職しています。彼は、今LEAFの農地に週末アルバイトで入ってまして、農作業をしています。彼は、大学のゼミで近くに畑を借りて、そこの農作業のリーダーとして活躍しています。小学校の先生は、子供たちに生産者の気持ちを教えています。あるいは保育園で、子供たちに食べ物のありがたさを教えていると。こういう成果が上がっております。

最後、まとめですけれども、私ども企業、NPOが協働して次世代教育を考えると。そして、そのプログラムをつくって実証試験をしました。参加した大学生は確かに生活力が向上しています。そして、終わってからも、それが次のステージで生かされています。ただ、課題としては、やっぱり1年では少ないんですね。全ての体験ができない。あるいは日常生活の行動まで変える、そこまではしていない。体験が中心な座学もやりました。でも、まだまだもっと知ってほしい知識がある。そういう課題をまだ残しております。ですから、ここの二年でその課題を解消し、このプログラムを完成させ、かつ研究じゃなくて、ビジネスとしてこの事業がかうまくできるように引き続き、持続可能な仕組みづくりというのを検討していきたいと思っています。

駆け足になりましたけれども、以上で私の紹介を終わらせていただきます。ありがとうございました。

**【辛坊】** どうもありがとうございました。(拍手)

大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所の主任研究員でいらっしゃいます、当麻潔さんに企業とNPOの協働による次世代教育の実例を紹介していただきましたが、安井さん、やっぱりこういう体験をするとサステナビリティでなくてはいけないということ、ベースのところから子供のうちからわかりますよね。

**【安井】** はい。おっしゃるとおりだと思いますね。あと、先ほどイノベーターがないと、これから乗り切れないという話にもつながる話でございまして、イノベーターというのは、さっき条件を幾つか言いましたけど、私が重要だと思っているのは個人的には、質問ができる人、それから実験ができる人、体験を喜ぶ人、こういうのが必要なんですよ。

**【辛坊】** ええ。

**【安井】** だから、今の体験というのは、多分喜べる条件がついたので、こういう人あたりから質問をいっぱい引き出せるような試みとか、あるいは彼らのアイデアをもって、何か小っちゃな実験ができるような場を提供するとか、そうすると、なんかイノベーター養成講座にもなるんじゃないかななんてちょっと思ったりしましたね。

**【辛坊】** そうですね。森さん、やはり意識の高い経営者は、こういう活動にも非常に積極的だと聞いていますけれども。

**【森】** まさにおっしゃるとおりで、おそらくこれから日本経済の雲行きがかなり危うくなってきて、やっぱり自社の生き残りをかけてこういう取り組みをします。逆に言うと、こういう取り組みをしないと世の中に選ばれない、そういう傾向がすごく強くなってきていると思います。

弊社では、わりとCSRについての記事が多いんですけど、最近特にCSRの取り組みが多い業界でいうと、1つは印刷業界。印刷業界というのは、逆に不況で、しかも価格がすごい下がってきて、ネット印刷とかがあって。要は、存亡の危機を迎えている中小企業はすごく多いんですね。そうすると、地域と一緒に栄えないと会社の存続が危うくなるということで、CSRに対する関心がすごく高まっています。

もう1つは、廃棄物業界の方も経営者、特に若い経営者の方たち、濱田さんもそうですけど、やっぱりCSRに対する関心が高いなと思っています。これも、おそらく想像するには、地域地域で自社が選ばれるためには、やはり社会にそれなりの貢献をしている企業である必要があると思います。東京から見ているんですけど、大阪でCSRに結構熱心な企業は



幾つかあるんですけど、その1つは大阪ガスだと思っています。うちの雑誌、実は東京ガスさんから広告をいただいているので、大阪ガスは褒められないんですけど、まあ、そんなことはないかもしれないけど。東京ガスより大阪ガスのほうが頑張ってるの違うかなと思っています。

というのは、大阪の企業のほうが地域愛が強いんじゃないかなと、そういう気がします。しかも、大阪ガスの本社は大阪のど真ん中にあるじゃないですか。あんまり東京ガスとの対比を言ってもあれなんですけど。東京はやっぱりグローバル企業が多くて、あんまり東京という意識がないんですね。ですので、そういうところにオープンイノベーションの可能性をすごく感じるんです。実際、大阪を変える100人会議というのが、この3年くらい開かれていたり、京都では京都市ソーシャル・イノベーション・クラスターという、これは京都市が中心になっていますけど、関西のほうがこういう動きがすごく活発じゃないかなと。

**【辛坊】**なるほど。別にあれですよ、大阪ガスにも広告をくれとか、そういう話ではないですね。

**【森】**そうじゃないです。くれたほうがいいんですけど、とか言って。

**【辛坊】**本当にすばらしい活動の報告をいただいたわけですが、やっぱり企業経営者として10年連続大卒の社員を浜田さんで採用していらっしゃったという話がさっきありましたけれども、こういうベーシックな生きるための経験を積んだ若い人は、やっぱり人材としては非常に魅力的でしょうね。

**【濱田】**そうですね、実はうちの会社も米づくりを福利厚生の一環でやっているんです。実は森さんとも、僕の友人の同業者の会社がやっている田植えにもちょっと参加して、そこで初めてお会いしたんです。そういう意味では、やっぱり共通点があるというか、本当に田植えした後の草むしりが大変なんですよ。それを実感すると食べ物のありがたさとか、すごくうちの若い社員もわかってくれたんじゃないかなと思っています。

**【辛坊】**今、ご報告を皆さんに紹介していただいたように、テーマには「サステイナブルシティーに向けた取り組みと課題」ということで、企業の中には市民の皆さんと共同でサステイナブルな社会づくりのベースのところから取り組んでいらっしゃる方がいるという紹介をしていただきました。

そして、ここでテーマ3です。「サステイナブルな大阪に向けた市民参画」ということで、より具体的に、じゃ、どんなことが必要なのか、事例を交え

て、ここは先ほど雑誌「オルタナ」で取材に行った海外の例なども教えていただきながら、森さん、お願いします。

**【森】**じゃ、資料をちょっとお願いしたいんですけど。ありがとうございます。

これ、さっきちょっと僕が言った、今日のキーワードを用意してきたんですけど、ちょっと数字が間違っていますけど、真ん中がオープンイノベーションです。大阪100人会議とか、あとカマコンバレーとあるんですけど、なんかオネエの集まりかなと思ったから……。

**【辛坊】**カマコンバレーですか。

**【森】**はい。これ、実は鎌倉をよくしようという若手経営者の集まりで、鎌倉って普通はあんなに有名な観光地で、しかもこの間、原節子さんが亡くなりましたけど、リッチな人が住んでいるような場所のイメージがあるんですけど、実は鎌倉市の財政は火の車で、100億円単位で赤字を出しているらしいです。そこで立ち上がったのが、このカマコンバレーで、詳しくはネットで検索していただければと思うんですけど。

ちょっとリサイクルの話をする、僕らはこの夏にシアトルとポートランドに行ってきました。今シアトルとポートランドというのは、全米で一番住みたい町ベストテンの大体常連の都市なんですよ。東の人もシアトル、ポートランドに住みたいと。かなり人気が出てきている。その中の1つの大きな要素がサステイナブルであり、あるいはグリーンという価値だと考えています。

今日は廃棄物業界ということで、こういう写真を持ってきたんですけど、これ、自動分別の工場なんですけど、日本は分別は家庭でやるというのが常識ですよ。アメリカはシングルストリームといって、まとめて収集をして一括収集、そして工場に分けると、こういうやり方もあるんです。日本がいいか、アメリカがいいか、一長一短があるわけなんですけど、結果として、アメリカのシアトル、ポートランドのリサイクル率はほぼ60%、日本は一般廃棄物20%台、産業廃棄物はもう少し多いと思うんですけど、結果的にはこういう高いリサイクル率を実現しているということですね。

こういう中で、ここにオーガニックと出ていますが、オーガニックとかフェアトレードとか、これもグリーンな1つの価値観だと思いますけど、とにかく地域、社会、あるいは地球環境のことを大事にするという価値観が、すごく心地よくまちづくりに反映されているというのが、ポートランドとシアト

ルだと思えます。

ここで1つのキーワードは、ローカルファーストという言葉なんです。スターバックスコーヒーの発祥はシアトルなんですけど、シアトルの人はもちろん好きなんですけど、ポートランドではあんまり人気がないらしいです。ポートランドはポートランドで、地域の経営の小っちゃいカフェが好まれるらしいんですね。地産地消と、皆さんもよくお聞きになっていると思うんですけど、地域のものを使い、そしてファーマーズマーケットというのがほぼ毎週のように、あちこちで開かれている。

もう1つのキーワードは、ウォークアブルシティーというのがあるんです。歩いていける場所、特に徒歩20分以内がキーワードと言われてます。つまり、通勤も通学もジムへ行くのも、塾はあるのはどうかは知らないですけど、とにかく20分で大体生活が一通り整えられるというね。これはやっぱり日本が目指しているコンパクトシティーとかスマートシティーの1つの形なんじゃないかなと。ここでは、ウォークアブル20分ということは、車をあんまり使わないですね。ライトレールとか、チンチン電車みたいなやつとか、最近では車を使わない、持たない、かわりにUberを使う。Uberは、日本では法律的には難しいですけど。日本でいうと白タクなんですけどね。地域の人が運転する車に乗せてもらって、それでお金を払うという仕組みがあったり、とにかく、ひとりの高度成長期の大量生産、大量消費のアメリカの発想とは大分違ったものが、今ポートランド、シアトルに育ってきたなど、そういう印象がありました。

すいません、ちょっと長くなりました。

**【辛坊】** いやいや、何となくイメージからいうと、こういう取り組みはヨーロッパが進んでいると思っていたんですけど、アメリカというのは、まさに今おっしゃったように、大量消費、そういう廃棄の国だと思っていたんですけど、ものすごい勢いで変わりつつあるということですね。

**【森】** おそらくポートランド、シアトルが、60年代、70年代以来の大量消費社会の1つのアンチテーゼというか、ある意味オルタナティブな都市あるいはライフスタイルの1つの象徴になっているんじゃないかなという気がします。

**【辛坊】** さあ、皆さんにはここからの時間、サステイナブルな大阪、ある意味大阪をイメージしていただきながら、どうやったら持続可能な地域社会をつくることができるんだということで、ご提言、アイデア等々をいただきたいんですが、今の森さんの話

でいうと、わりと周辺に広大な農地があるような場所はいいんですけど、大阪はなかなか地産地消というても、なかなか自立的に持続可能なだけの、例えば農産物がとれるわけでもなしというところがあります。そのあたりはどうでしょうか。どなたでも構いません、自由にご発言ください。

**【濱田】** 大阪代表で、じゃ。

**【安井】** 畑は結構あるでしょう。

**【濱田】** まあ、大阪といっても、高槻はすぐ近くに能勢町があったりとかするのであるんですけど。

むしろ廃棄物を扱う立場として、地域とコネクションがないというか、市民から見たら、ごみは決まった日にごみ置き場に置いたら終わりじゃないですか。そこから先のことは全く興味がない、なくなるんですよ。決められた日に決められたところに置いたら持っていってくれと。そこが僕は一番問題なんじゃないかなと。要らなくなったものなので、興味はないわけですよ。そこにどう興味を持ってもらうか。例えば、小型家電リサイクル法で、今日の話もなかなかうまいことってないという話なんですけど、実際になかなかうまいことってないみたいなんですけど、あの法律の骨子ができた時、実はその骨子をつくられた先生は、安井先生とも非常に懇意にされている先生なんですけれども、私もちょっと仲よくさせてもらっていて、その話を聞いた時、もっと市民と我々のような業者が協力してできんのかなと思った。実際ふたをあけて法律が施行されてみると、やっぱりそれなりの設備投資をした会社で能力がある会社がやらないとだめですよ。あ、これはだめだなと思って、僕も手を引いたんですけども。僕はもっと市民と協力して、例えば分別工場みたいなやつを我々リサイクラーがノウハウ提供して、例えば小学校で集めてもらったやつをそこへ持ってきてもらって、シルバーの人とか障害者の方とか、あるいは中学校とか小学校の技術の体験で分別の仕方を僕らたちが教えて、基盤は基盤、アルミはアルミ、こうやって分けたら資源になるんですよみたいな、そういうことをすれば、もっと要らなくなったものの、その先が見えてくるんじゃないかなと。そこに地域に密着したサステナビリティというのがあるんじゃないかなと思っているんです。

**【辛坊】** 確かに、ごみの日にごみを出して、その後そのごみがどうなっているか、ほとんど想像したこともないです。家電リサイクル法で、何だかテレビを処分するのにお金がかかるようになったなあって、損やなというイメージがありますが、家電リサイクル法で集められた巨大、膨大な家電というのは、

その後、今はどうしているんですか。

【安井】それは、ある特定のところに集められて、製造事業者側が大体持っているんですけど、チェーンに分かれて、2つに分かれていると思うんですけど、そこに行って極めて丁寧に、というのは、あのリサイクル料金は私に言わせると高過ぎるんですけど、本当に丁寧にリサイクルされていますね。ですから、資源的には日本は特に家電だけは結構まともに回収している、そんな国ですね。

自動車は自動車で、それでまた価値があるので、それはまたちゃんと行われているんですけど。

【辛坊】それが納得いかないのは、品目が決まっているじゃないですか。品目が決まっていて、それ以外のものでも品目が決まっていらないんだけど、同じような価値のありそうな同じような大きさの家電みたいなものは、ほかにたくさんあるんですが、ああいうのは行方は今どうなっているんですか。

【安井】だから、家庭から出たものは多くの場合には自治体に持って行って、それで自治体はあんまり大した能力がないので、破碎して捨てちゃうというのが多いんじゃないですかね。

【辛坊】破碎して捨てちゃうわけですか。もったいない話ですね。

【安井】破碎してとれる部分は、例えばマグネットなんかでとれる部分はとりますよ。それは一般だかどうか。事業者にちゃんと渡しているのかな。その辺は私も東京で……。

【濱田】売れるものは磁選物ということで、磁石にひっついたものは我々のようなスクラップ業者が買っています。あとは、焼却物と一緒にまざって入っちゃったりするやつは焼いた灰の中から磁選物ということで、これは鉄としても極めて価値の低いものですが、そういうものもあります。

残った磁石につかないもの、あるいは手選別でも大概漏れるんですけど、そういったものは大阪湾の中にあると思います。

【辛坊】要するに、何とか島というやつですか。夢島、舞洲みたいなところに行っちゃうということですか。

【濱田】フェニックスの方に入っているんじゃないかなと思います。残渣物に関しては。

【辛坊】全然関係ない話で、単に個人的に相談で聞くんですけども、回収してくれないもので、家庭にいて大きなもので最近困ったものが2つあって、1つは車の上のカートップボックス、これがぶっ壊れたんですよ。でかい巨大なプラスチックなんですけど、うちの自治体だと1メートルよりも長いものは

回収してくれないんですよ。それで、もう1つが、結構大きな鉄の塊みたいな車用のジャッキがあるんですけど、これもどこに聞いても回収してくれずに、うちの敷地内に野積みになっているんですけど、こういうものは何とかならないんですかね。

【濱田】ジャッキは、ぜひ我が社へ持ってきていただければ、もちろんその先は鉄系が多いものですから、我々としては有価なものになるので処分できますけど。カートップのやつはちょっと微妙ですね。それこそ自治体に相談してみないと、変なことを言うとか協会の理事の立場が危うくなるので、個別に聞いてみたいと思うんですけど。

【安井】多分電動の何かを買って、細かくちょん切ると持って行ってくれますね。

【辛坊】そうしないとだめなんですか。それでいうと、森さん、先ほどのアメリカの例で言うと、日本の自治体は細かく細かく分別を市民の手にさせると。それでいて実はリサイクル率はそんなに上がっていない。私もアメリカに住んでいたのわかるんですが、それこそマンションの中にある、ガチャンで引き出すやつに全部上から放り込んで、全部それで持って行ってけると。市民の立場からすれば、そのほうがよっぽど簡単で、そっちのほうがリサイクルが高けりゃそうしてくれよと思うんですけど、なぜできないんですか。

【森】そこは本当に難しいですよ。国民感情とか市民感情もあって、丁寧にしたいという日本人の美德にも通ずる部分もあると思います。でも、それが実は物流のトラックでいうと、台数が2倍になってしまう。ただ、家庭でしっかり分別したほうが精度は高いらしいですね。

【辛坊】私ね、これ実際に番組で、随分前だから、今は改善されているんだと思いますけど、過去の話なんですけど、取材に行った先で、日本で一番分別の進んでいる自治体は三十何品目かなんかに細かく分別させて……。

【森】徳島の上勝町だと思います。

【辛坊】そして、それ全部分別したやつを、全部別々にリサイクルするのかわかったら、その自治体じゃないかもしれないんですけど、ひどい自治体は分別させておいて、その後1カ所に集めて同じように埋めているという話があって、何なんだ、この努力はと。そういう矛盾に満ちたところ、どうもこの社会は、建前ではというところと実際にというところの乖離みたいなものって大きくないですか。

【森】そうですね。もう1つ、すごく気にするのは、アメリカは埋めるのが多いわけですね。あんま



り焼かないと。日本は土地がないこともあって、埋めなくてたくさん焼く、これはCO<sub>2</sub>の見地からどうなのか。いろんな要素が加わっていて、リサイクル率もあれば、埋設か焼却か、あるいは分別化と、いろんな要素があって一言では言えなくて、まさに安井先生にもお聞きしたいんですけど、これはジレンマという言葉がありますけど、トリレンマという3つぐらいのいろんな要素が絡まっているんじゃないかと思うんですけど、いかがでしょうか。

**【安井】**自治体にとっちゃ、やっぱりほかのところと違ったことをやりたいというマインドが、ある意味で貴重な国でもあるんですけどね。例えば、さっき出た徳島の上勝町、あそこなんかは周りが全部山だから、それだけ分別ができる。ところが、やっぱりそれをまとめてどこかに持っていくと、それほど広くないなんていうこともあって、結局最後は何やっているか、私もよく知りませんが、現実を妥協せざるを得ないということで、そういうことが起きちゃうんだと思いますね。

ですから、自治体にとってみると自分のところでテリトリーが終わっているから、そこでは評価が高く、上勝はそれをもって、最近では知りませんが、昔は見学者がすごく多くて、それで観光業としてもうかったという話もあるので、ですから、それはそれなりに合理性はあると。

あと、埋め立ての話もまさに地域次第で、東京都は23区と、それ以外です。多摩地域とは全然違うんですね。多摩地域は、あとほんのわずかしが最終処分地が残っていないので、全部有料化して、それでエコセメントといって、セメント化しているんです。したがって、ほんのわずかしかないのに、あと500年分のごみ捨てができる。

23区はべらぼうに広い最終処分地がまだ残っているのに、あと50年と言っているんですけどね。そんなもんなんです。ですから、何か1つでいいとか悪いとかというよりも、自治体は非常にその中で閉じている。だから、閉じている中ではベストを尽くしているかもしれないけど、全体的な整合性はとれていない可能性は多々あるという感じですね。

かく申す、私も目黒区の廃棄物審議会会長です。

**【辛坊】**廃棄物審議会会長は、どういうことをするわけですか。

**【安井】**どうやって減量したらいいかということをやったり考えるんですね。要するに、市民にどういうことを頼もうか。ただ、23区は各区が勝手なことをやっているという、本当にとんでもない社会制度になっていて、それをとにかくまず一体化しなきゃ

いけないというので、東京都あたりにぶつぶつ文句を言っているんですけど、なかなか動いてくれませんね。

**【辛坊】**こういう根本的な疑問を呈してはいかんのではないかと思ひながら聞くんですが、3Rというのは、リデュース、リユース、リサイクルですよ。一番最初にリデュース、要するに廃棄物、ごみを減らしましょうというところが来るわけですが、でも濱田さん、廃棄物が減ると商売はよくないんじゃないんですか。

**【濱田】**おっしゃるとおりなんですけど、現状はやっぱり減っているんですよ。私がこの業界に入ってから随分減ってしまっていて、我々の商売も、ものからどんどんサービスのほうに向かっていかないといけないんじゃないかなと。減らすための設備であったりとか提案であったりとか、そういったことが仕事になってくると。

**【辛坊】**業界のことはよくわからないんですけども、全量が減りますよね。減ると処理の単価は上がるんですか。つまり、全体としてのトータルの経済活動としては成立するわけですか。どういう状況になっているんですか。

**【濱田】**今の現状をいうと、要するに少なくなった玉をみんなでとり合っている。ただ、ある一時期すごく下がりましたが、今はちょっと持ち直しているような気はしますね。

**【辛坊】**そういう意味でいうと、さっきの太陽光パネルの処理なんていうことになると、薄く剥いでそれぞれのパーツに分けていると、それなりに費用もかかると。そうすると、高度に持続可能なサステナブルな社会にしていこうと思うと、処理もやっぱり高度になっていくから、逆に言うと、だんだん処理の単価も上がってきて経済的にも大きな規模になっていくという可能性は、これ、安井先生、ありますよね、将来的には。

**【安井】**だから、先ほども申し上げた話で、日本の場合には最終処分地がないからというので、リサイクル、3Rが始まっている歴史があって、最終処分地は多分当分もちそうだなということになってきて、そのうち2050年近くなってくると、今度は資源価値が相当上がってくるので、しかも、自然エネルギーを大量に入れると、めちゃくちゃ物資食いなので、ですから、その辺で場合によると前倒して資源が足りなくなる可能性もあって、そうなるやっぱり3Rを再びしないと人類は生きていけないみたいな感じになってくる可能性は高いと思いますね。

**【辛坊】**つまり、3R推進ということで処理が高度

になっていく、当然処理の単価も上がるということだと、業界としても発展しながら社会全体をサステイナブルにしていくと。森さん、やっぱりそういう方向性なんでしょうね、きっと。

【森】もちろん業界としてはそういう方向性だとは思いますが、結構2極分化とか優勝劣敗とか、つまり未来に向けて生き残る会社と残らない会社ははっきり分かれてくるんじゃないかなという予感がします。これは廃棄物業界に限ってのことではないとは思いますが。

【辛坊】そんな中、今日の大きなテーマは「持続可能な大阪に向けた市民参画はどうあるべきか」ということで、持続可能な大阪づくりのためにどういうアイデアがあるか、ここは皆さんにアイデアの競演をお願いしたいというコーナーなんですけど、いきなりそんなことを言っても答えられるかよというように、下を向かないでください、お願いしますよ。

専門家の安井先生から行きましょうか。

【安井】さっき森さんから西海岸の話がありました、確かにシアトルというカワシントン州と、それからオレゴン州、その下にカリフォルニア州があるんですけど、西海岸は文化的にアメリカじゃないですよ。変なところですよ。それゆえに、やっぱりああいうことができるんですよ。それで、彼らのキャラクターとどう分析するのがいいか、ちょっとあんまり私もよくわかんないんですけど、多分言えるのは、平均的には学歴は高い。それから、あと反中央的な感じが相当する、だから独自性を非常に高めようとしているような気がする。だから、あそこに行ってみると、ヨーロッパとあんまり変わらない。例えばヨーロッパはレジ袋出てこないけど、同じく出してくれるけど、嫌々みたいな感じかな。今だどうなっているか、最近あんまり西海岸へ行かないので知りませんが、そんなような感じかなと思います。要するに、地域文化というのを生かしているんだと思うんだ。地域のニーズがあるんだと思うんですよ。

だから、そこで大阪の地域文化というのは、私は実を言うとよくわからなくて、選挙の結果なんかを見て、どうしてだろうと疑問に思っていたりするんですよ。横山ノック以来なんですけどね。そんなこと言うと怒られるけど、やっぱり大阪人には「けち」というものすごい文化があるんじゃないかなと思うけど、どうなんですかね。もしそれがあんなら、「けち」も身のためじゃなくて、地球の身のためになった「けち」という哲学つくってくんないかなという気がするんですけど、ほかの人のためには「けち」

になれないですかね。

【辛坊】いや、そんなことないです。そういう意味でいうと、反中央は1つキーワードですけども、まさにそういう意味では、大阪には独自に何とかしようという土壌がありますから、これはいいアイデアだなど。結局のところ、やっぱりこの問題は市民の意識をどう高めるか。結局、文化力であったり、民度であったり、突き詰めるとそういうところに行くということですよ、安井さん。

【安井】そのとおりです。

【辛坊】続いて、森さん、お願いします。

【森】冒頭で申し上げたとおり、関西、大阪出身なので常々、大阪や関西のことは気になるんですけど、やはり社会的課題先進地域なんですね。生活保護の割合が多かったりとか、景気のふれも大きいし、あるいは企業収益の面でも課題もあると。でも、だからこそ皆さんの力を結集してという力は、やっぱり東京より強いんじゃないかなという気がします。ですので、先ほど来申し上げているオープンイノベーションとかパートナーシップ、つまり、みんなで力を合わせて問題に取り組むということはものすごく大事になってくるんじゃないかなと思います。

ソーシャルセクターという言い方も最近はあるって、NPOあるいはソーシャルビジネスとかソーシャル・アントレプレナーとか、これは冒頭で申し上げたHomedoorというNPOの川口加奈さんは、あいりんのホームレスの仕事の雇用創出しているNPOをつくった方なんですけど、何と今、まだ24歳。運動を始めたのは14歳という、ものすごい早熟な、でもすばらしい女性なんですけど、ああいった形がもし大阪で広がっていけば、これは多分ソーシャルイノベーションだと思うんですけど、関西初のこういうビジネスモデルがたくさん外へ出ていくことが、1つのこれからあるべき姿なんじゃないかなと思いました。

【辛坊】そういえば、関西は本当に先進地域で、いいことも悪いことも大体大阪から始まっていると。古くは先物取引なんて、全世界で一番最初に生まれたのは大阪船場の米問屋、世界最初のノーパン喫茶も大阪ですし、いいことも悪いことも大阪で生まれる。そういえば、プラスもマイナスも先進地域であるということは間違いないので、その大きな国民的問題がもし大阪で解決できれば、その方法が見つかれば、まさにモデルケースになれる地域であると。そういう見方はできるのかなという感じはいたしますが、さあ、濱田さん、お願いします。

【濱田】多分、大阪に限ったことではないと思うんですけど、我々の仕事は市民から見ると、産業廃棄

物の処理はわかりにくいんですね。そういう意味では、先ほどやはり処理が高度になるとコストが上がってくるという話もあるんですけど、そんな中で、安かろう悪かろうのほうが選ばれるんですね、今までは。当然捨てるものに対するコストなんて安いほうがいいわけなんですけれども、じゃ、どうやったら我々のやっていることが選ばれるかというのは、やっぱり理解してもらえないかなと思います。それは非常に地道な作業になってきて、先ほど大阪ガスさんの取り組みなんかでも、やっぱり若い世代、あるいは子供に持続可能な社会、まあ、彼らの時代になりますので、僕らはもう30年ほどすればこの世からいなくなりますので、彼らの時代に何をしないといけないのか。そういった時に、そういう高度なリサイクルとか質のいいリサイクルを選んでもらうためにはどうしたらいいのかというのは、やはりそういうことをわかってもらうことが大事なんじゃないかなと思っています。

地元高槻では、「こどもとしごと」というのを商店街でやっているんですね。例えば喫茶店の職業体験を小学生にしてもらおうと。それで、うちの本社は商店街に近いもんですから、「濱田さん、何かできることない」と言われて、そしたら例えば、障害者用にうちが持っている電線の皮をむく機械があるんですよ。これなら小学生でもできるかなと。そういった職業体験を通じて、リサイクルを子供たちに理解してもらおうと。もしかしたら、そういう地道な活動も大事なんじゃないかなと思ったりします。

あと、協会の事務局からは、しっかりアピールしてくれと言われたんですけど、やっぱりそういう啓蒙活動ということで、例えばこの秋に大阪マラソンがあったんですけども、こういった時に沿道でテープとかペットボトルとか、いろんなものが廃棄されるんですけども、そういったものを産廃協会のほうは、あれは大阪市なんですけど、あんまり予算がないので、我々が無償でパッカー車を出したりとかして、それを回収するボランティアをやったりとか、あるいは大阪の公共の処分場の跡に共生の森というのをつくって、そこで食事をしたり、その草刈りをやったりとか、そういった我々の活動を市民の人にもできるだけ知ってもらうことによって、そういうしっかりした業者が選ばれるような世の中をつくっていくということが大事なんじゃないかなと思う次第です。

**【辛坊】** 今、キーワードとして一番最初におっしゃった、安かろう悪かろうが選ばれる世ではだめだと。安かろう悪かろうということになると、当然資源は

ただ埋め立てられて終わりということになってしまいかねない。そうすると持続可能ではなくなってしまふ。やっぱり持続可能な社会づくりのためには、高品質で未来のために資源化するような、そんな方向性でいいものが選ばれる。そういう意味でいうと、安井先生が一番最初におっしゃった文化、市民の意識をどう高めていくかということに、おそらくこの話は収れんしていくんだろうと思います。

ということで、皆さんに参加していただきながら、3R推進フォーラムの3回目、「地域における3R社会の未来」ということで、パネルディスカッション、「サステイナブルな大阪へ、私たちのこれから」こういう大テーマで進めてまいりました。

時間が迫ってきました。最後に、いろいろ言い残されたこともおありになろうと思います。一言ずつ締めコメントをいただいて、このパネルディスカッションを終わりたいと思います。

それでは、お座りの順で、濱田さんからお願いいたします。

**【濱田】** じゃ、まあ、一言で言いますと、私は好きな言葉に「一燈照隅 万燈照国」という言葉があるんですが、自分ができることは片隅を照らすことしかできないと。でも、そういう同じ志が集まったら国をも照らすという仏教の言葉らしいんですけども、まさに我々がやっているような仕事は、非常に地味で地域に根差しているの、本当に片隅を照らすような活動でも、みんなで力を合わせれば、最終的には国も明るくなるんじゃないかなと、そういう方向に向かっていくんじゃないかなと思いますので、これからもそういう地域に根差した地道な活動を続けていきたいなと思っております。

**【辛坊】** はい、ありがとうございました。

それでは、森さん、お願いします。

**【森】** これも前半のほうで申し上げたんですけど、CSRイコール企業の社会的責任という訳になっているんですけど、それもいいんですけど、むしろ社会対応力ということを申し上げました。

実は、これはコンプライアンスとすごく密接な関係があるんです。なぜかという、コンプライアンスというのは法令遵守だけじゃないんです。法令遵守はある意味当たり前だと思うんですけど、要は社会の声を聞くのが広義のコンプライアンスなんですね。ですので、企業の方もたくさんいらっしゃると思いますが、もし皆さんが企業の経営者あるいはスタッフでおられるならば、ぜひ周りの地域、あるいはもう少し大きな大阪、あるいは関西という枠組みの社



会の声を聞いていただきたいんです。そして、共通の社会的な課題に対応することで、当然地域にとってもプラスなんですけど、実はそれが皆さんの会社にとってもプラスになる。つまり新しい事業が生まれるという可能性もあるわけなんです。ですので、CSRって堅苦しいなど、よく言われるんです。押しつけがましいとも言われるんですけど、まずは地域の声、社会の声を聞きましょうというのが原点なので、それだけちょっと覚えて帰っていただければ、すごく僕としてはうれしいです。ありがとうございます。

【辛坊】ありがとうございました。

それでは、安井さん、お願いします。

【安井】それでは、短くいきましょう。先ほど実を言うと、辛坊さんにある程度まとめを言っていたんですけども、地域文化というのは、やっぱりこの地域でうまく成功のプロジェクトなり何なりをつくるには大変重要ですから、それをとにかく重要視しつつ、でもやっぱり日本全国あるいは地球全体に共通の未来予想図というのを描いておかないといけないなという気はするんですよね。だから、地域文化掛ける未来予想図でもって、それで大阪流の3R哲学というものをつくり、地域文化に基づいているのであれば、当然だけど市民に共有されるでしょうと、こういうことを期待して、東京人としての発言を終わりたいと思います。

【辛坊】ありがとうございました。大変勉強になりました。一番最初に濱田さんに教えていただいた静脈産業という、我々は普通マスコミで仕事をしていると、そんなことくらい知っておかなきゃいけないんですが、イメージとして、今日ははっきりと世の中に大量に送り出されるものというものは、ある意味動脈に乗った血液であって、それは静脈に乗せてもう一遍体内を循環させてやらないと、それは人間の体が持続可能ではないのと、社会の構造は全く同じなんだなと。そういう市民一人一人が同じ意識を共有するところから、多分、持続可能な社会が生まれていくんだろうなと痛感いたしました。大変勉強させていただきました。ありがとうございました。

どうぞ、パネリストのお三方、そして途中でプレゼンターで加わっていただきました当麻さん、大きな拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。(拍手)

【司会】改めまして、ありがとうございました。

【辛坊】ありがとうございました。



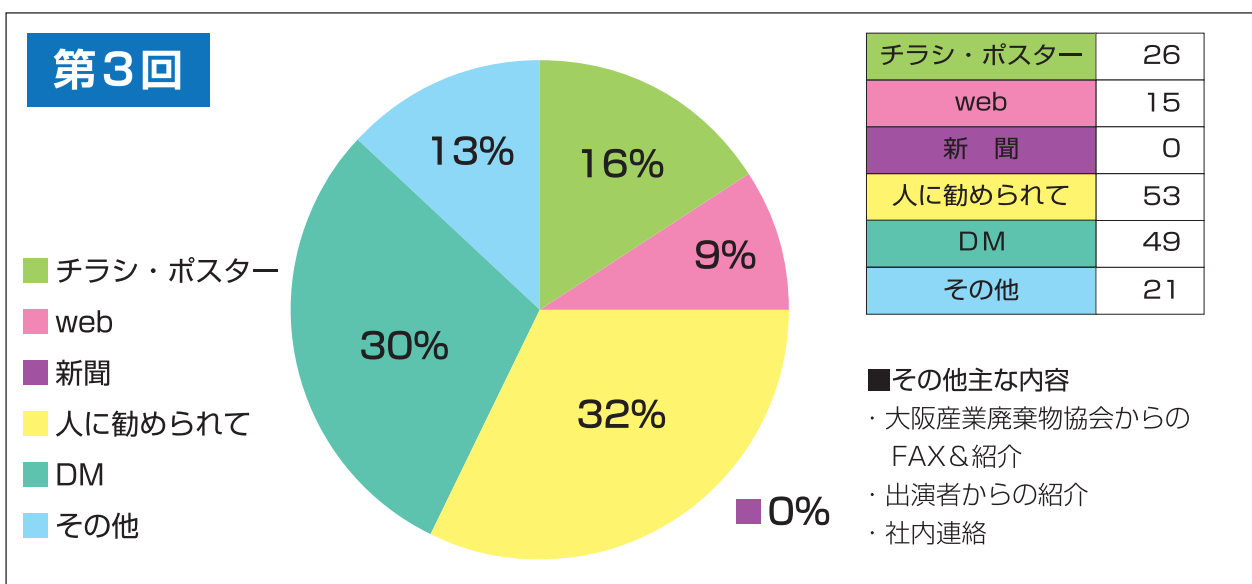
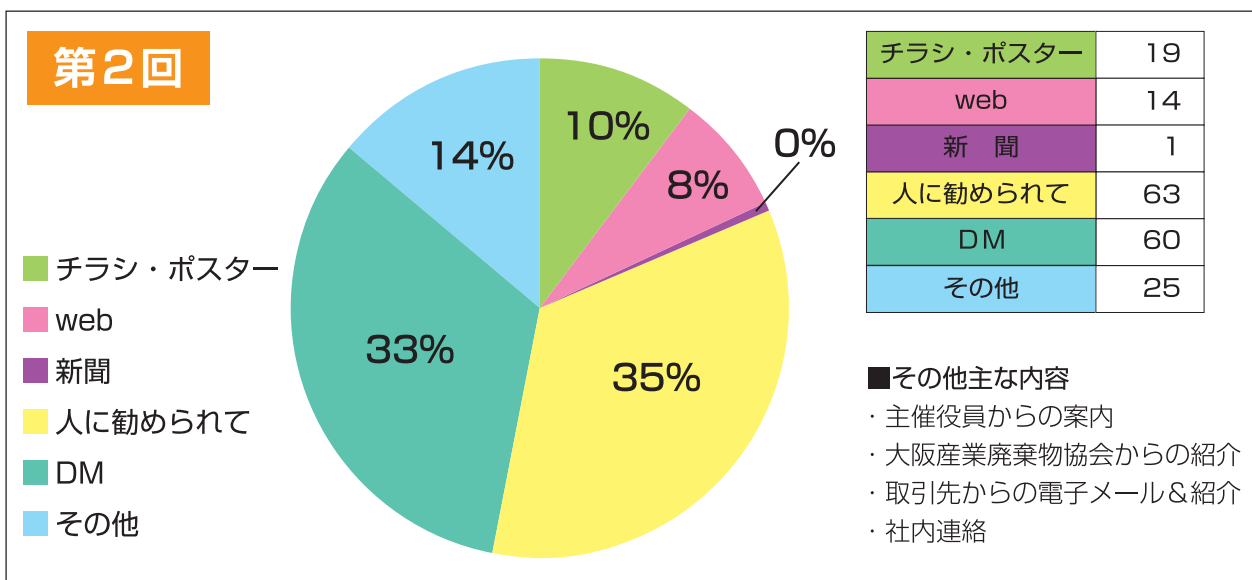
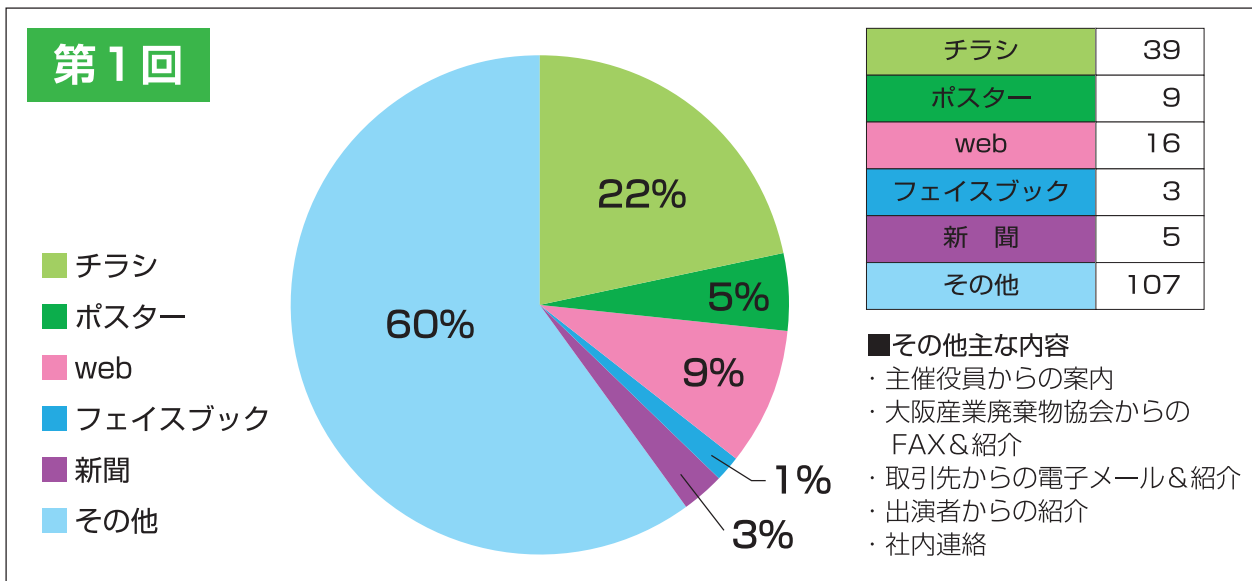
The background features a top section with blue water ripples and a bottom section with several glass spheres containing small green plants, all set against a light blue gradient.

# 付属資料

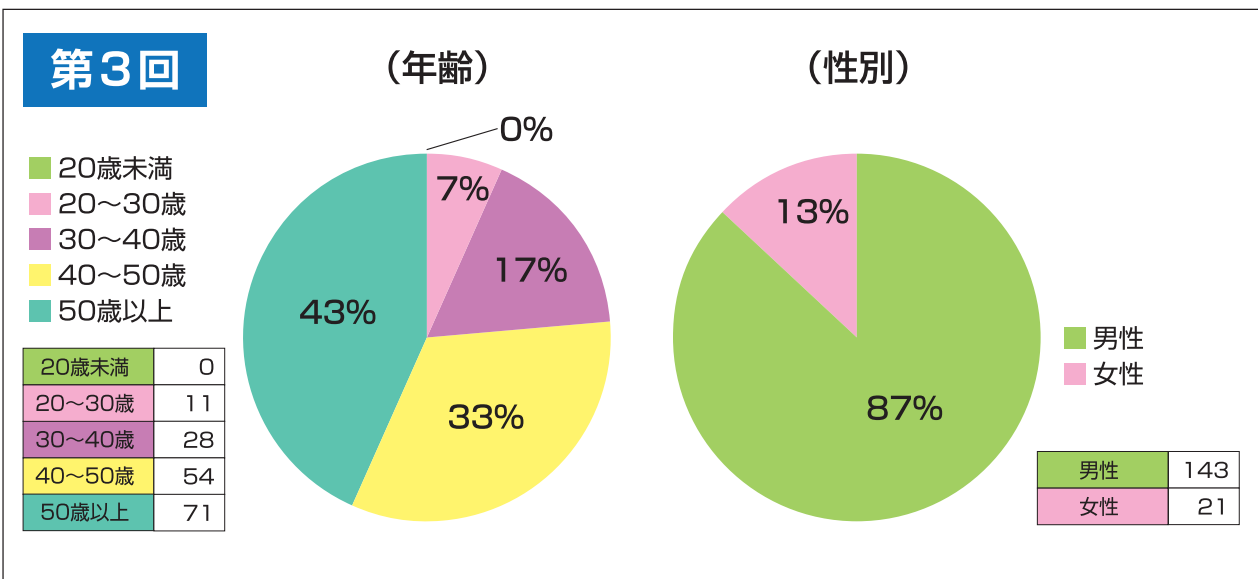
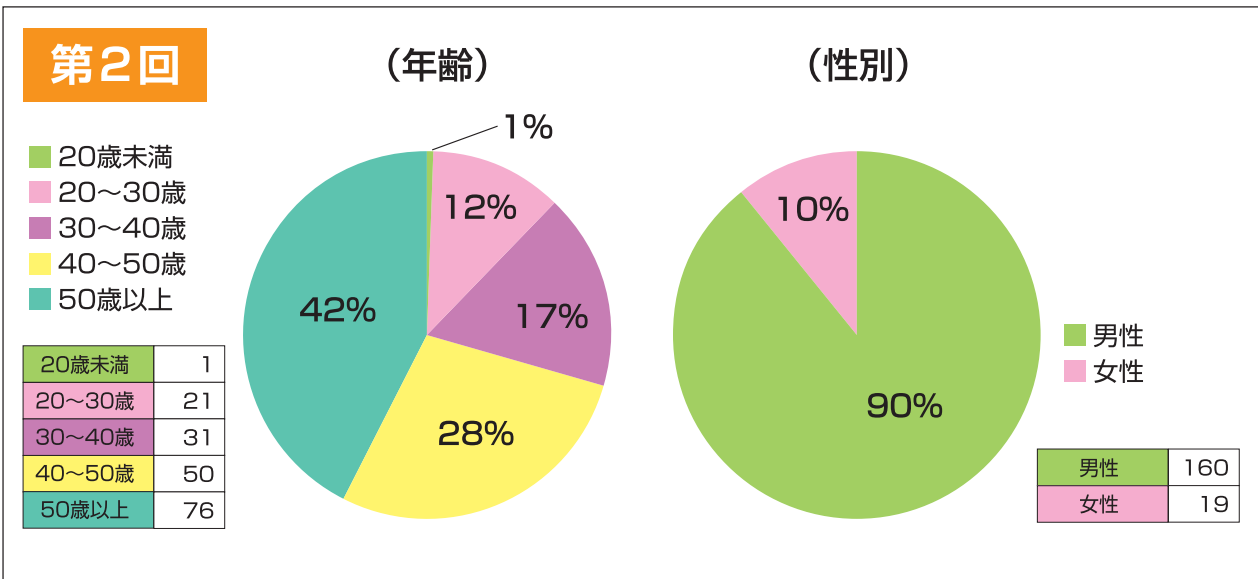
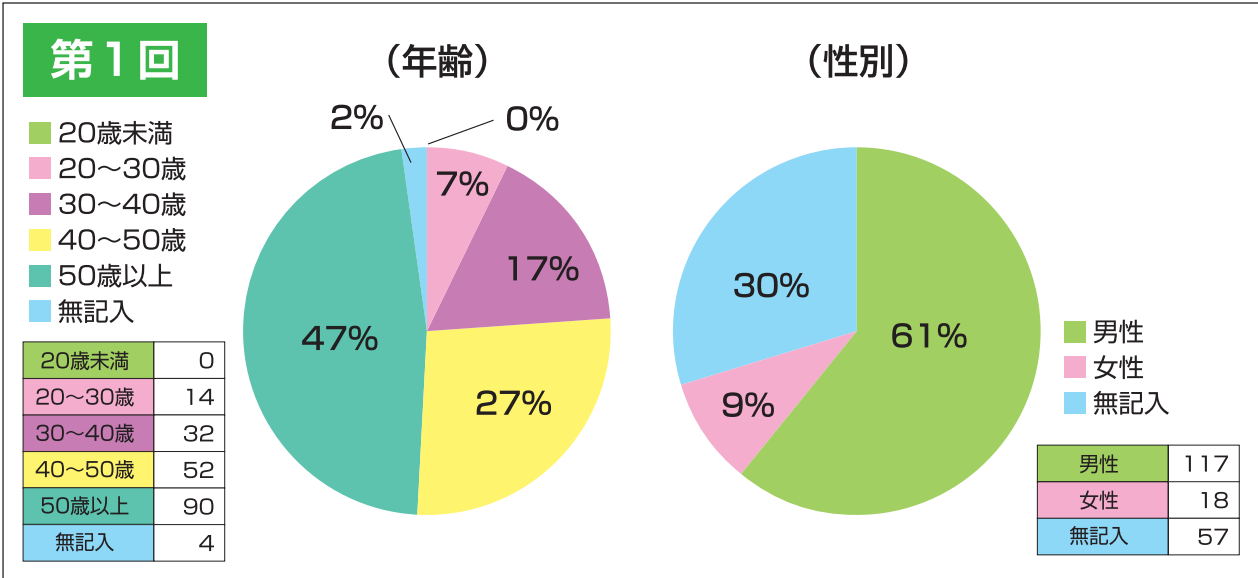


# アンケート集計

## ●本フォーラムを何でお知りになりましたか？

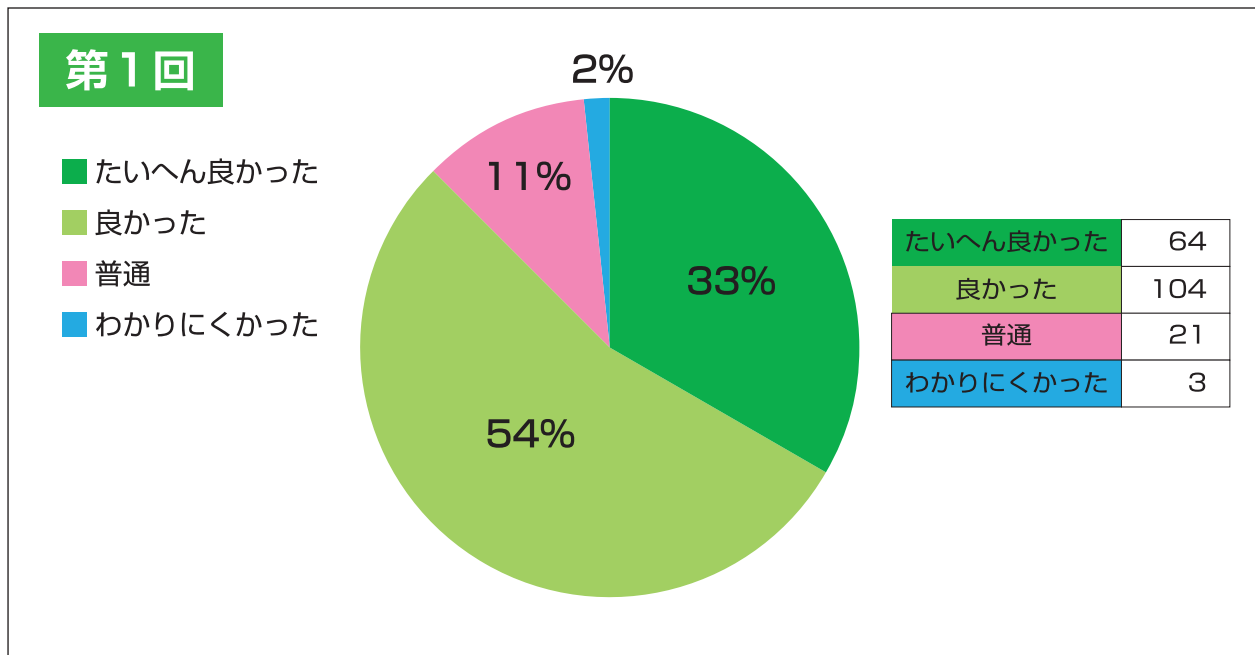


## ●お客様について



# アンケート集計

## ● 基調講演について

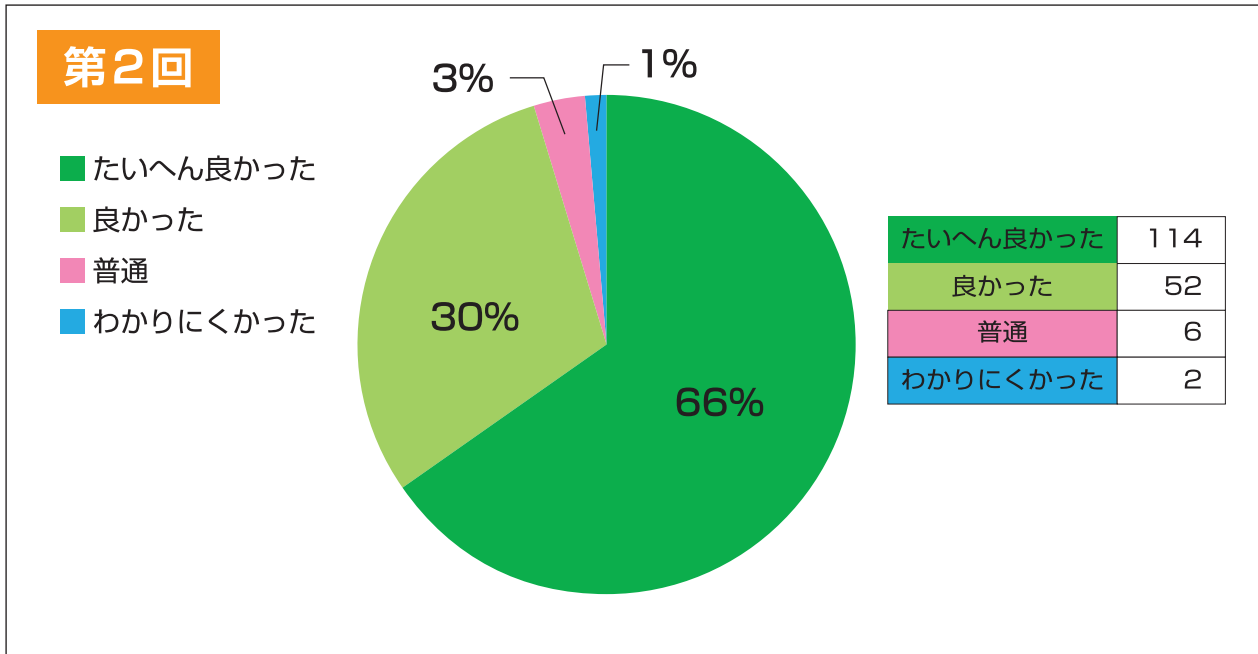


## ● ご意見（基調講演について）

- 三重県知事時代のお話をわかりやすく楽しくして頂き、同感できることも多かったです。有意義な時間を有難うございました。
- アニフェスト（アニメとマニフェストの造語）の話が面白かった。講演内容のレジメが欲しかった、3Rは一方通行でなく win-win の関係の重要性を感じました。
- 今、自分が環境保全に何ができるのかよく考えたい。
- 行政と事業者（製造、リサイクル【排気処理】）の3者の役割（立場）と共栄していく方法について分かり易く提言されており大変参考になりました。
- 非常に説得力のあるお話で感銘を受けました。
- 簡単なテキストがあると一層良かったと思う。※後学の為に、また報告等にも活用。
- 日本の環境への取得の関心がどのように変わってきたか理解できました。
- だからどうなの？ どう考え実行に移すのと疑問を感じる。机上の空論に終始しているように見える。
- 先生としての考え方がうまく理想と現実のズレが少し感じられた。
- 行政例の多くの経験からの意見や提言が参考になりました。
- 知事時代の改革と行政の意識変化が興味深かった。
- 今後、継続的にこの先生に基調講演を願いたい。
- 本県知事という地域行政の首長経営者ならではの的を射た話題を提供して頂き分かりやすかった。



## ● 基調講演について

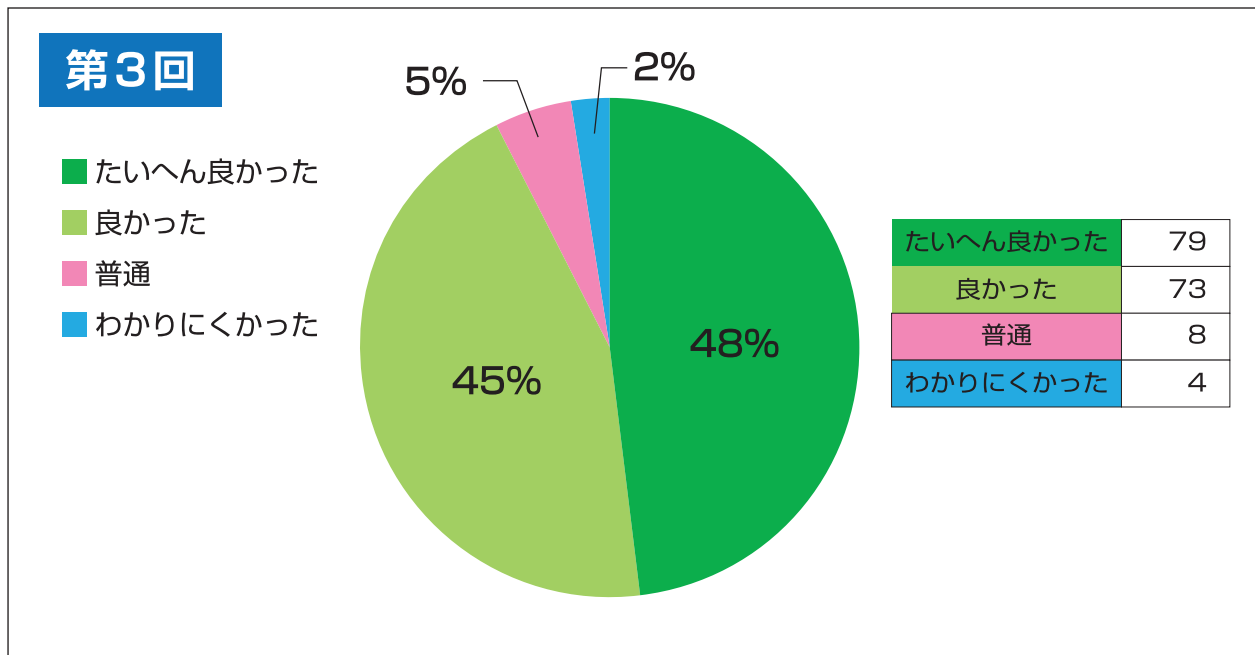


## ● ご意見（基調講演について）

- 噛み砕いてお話をしていただいているのですが、ただ私には難しかったです。
- イノベーションの考え方も市場ムダにしないことも必要と感じた。
- 米倉氏の講演が面白かった。是非次回も来てほしい。
- ユーモアのセンスがあり楽しかった。観客を飽きさせないトークテクニックがあった。
- 話し方にメリハリがあり情報が入ってきやすかった。
- エネルギッシュでたいへん分かりやすい講演でした。
- 非常に聞きやすく、イノベーションの大切さが分かりやすく理解できた。
- 時間不足が残念でした。端折らずじっくり拝聴したかった。
- 理念の部分の考えが大切と感じました。
- 企業の目指すべきことのヒントになる話が多く良かった。
- 将来を考えるよい講演
- 米倉先生の話は面白い
- 企業活動をする上で何も新しい企画は既存の仕組みの組み合わせを変えることで新しいビジネスが生まれる。
- イノベーションの話が良かった。ビジョンに根拠はいらない！が印象に残った。
- 今まで色々な講演に出席しましたが、貴重な話をあるときは面白く楽しく聞き入れやすく時間を短く感じた講演でした。今までで一番良かったと思います。
- 楽しく聞けました。もう少し長く講演してほしかった。
- 経済系の先生の話は、一般に独善的だが、広範囲で且つポイントを深めて良かった。
- 米倉先生の話には、引き込まれる魅力を感じます。
- 時間が足りないと感じるくらい面白かった。
- 創造的破壊の意味する事が少し理解できてよかった。先生の本をゆっくりと読んでみたい。
- 大変貴重な講演だった。問題解決の為には物事の本質を理解すること、課題解決には様々な方法を考えるべきと感じた。
- 米倉教授の話を生で聴講できてためになりました。
- イノベーションについての講演にとっても熱意を感じ勉強になりました。

# アンケート集計

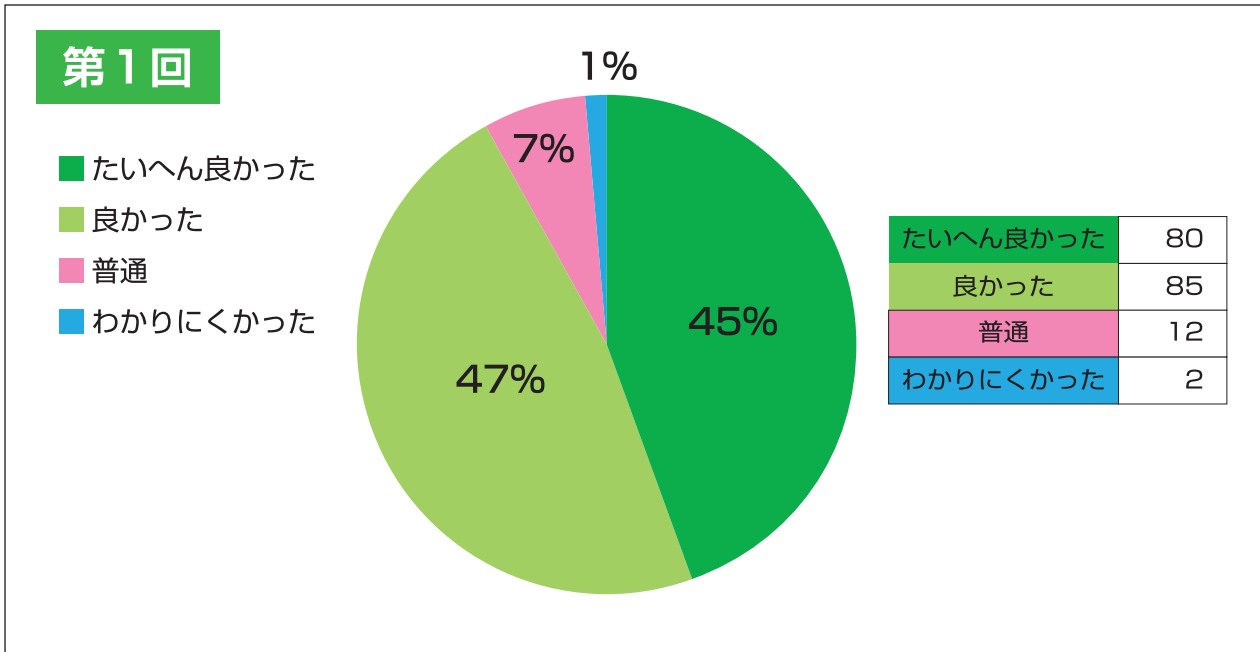
## ● 基調講演について



## ● ご意見（基調講演について）

- 安井先生のお話は環境だけでなく、経済・人材と幅広く分かりやすい言葉で、語っていただいたので、とても良かったです。
- 言葉通りの俯瞰する視点から見る考え方が新鮮でした。
- 地球レベルの環境の動きが理解できて良かった。これからの日本企業の取組みへの方向性が見えた様な気がします。
- 未来を考えることを感じた。
- 今後のビジネスチャンスを得ることが出来た。
- 講演の資料も用意されていれば良かった。
- 専門的な部分も大変分かりやすく、もっと聞きたかった。
- 触発される話題が満載。先生のHPでもう一度学ばせていただけます。
- 非常に広範囲な話題で全てが理解できませんでしたが、今何を考えていかなければならないか問題点が多くあるということは理解できました。もう少し詳しい未来予想図を聞きたかった。
- パワーポイントを協会のHPでも公開してほしい。
- 国、海外としての2050年がどうか、教授からの推点でお聞きできて良かった。イノベーターを育成できるように頑張ります。
- イノベーションの必要性は良く分かりましたが、各国が本気で取り組み中小企業へのバックアップ策を考えないと前には進まないと思います。
- 未来を予想するのが、いかに困難か理解しました。
- 時間の関係上、若干早足になってしまったのが残念。HPからアクセスし、ゆっくりPPTで拝見したいです。
- 安井先生の説得力のある興味深い筋立ての講演は期待通りでした。未来予想図について将来を見直すことは難しいが、悲観的な内容でも楽しい。
- 持続可能な社会についての高い現実での話がきけました。
- 内容が多岐にわたり、消化不良となりました。
- テーマが広すぎて、理解しにくかった。
- レジユメがあれば尚良かった。

## ● パネルディスカッションについて



## ● ご意見（パネルディスカッションについて）

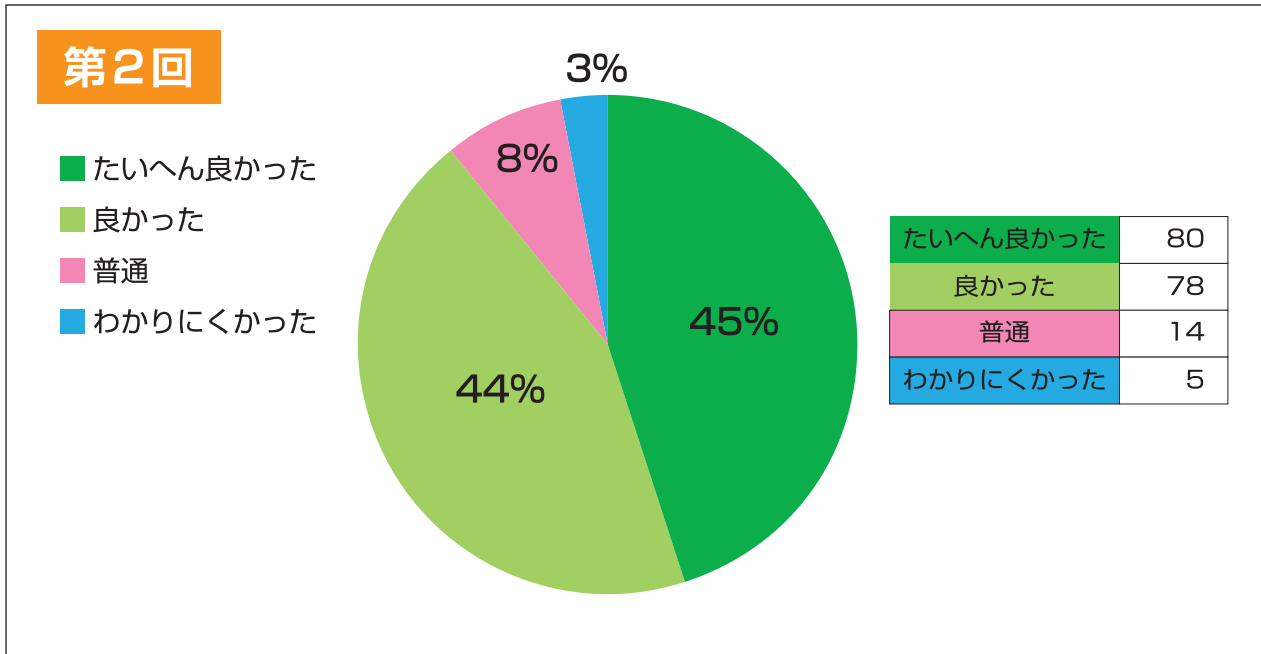
- 企業努力している又はしようとしている会社はたくさんあります。役所(行政)がもう少し融通がきかないものかと思うことが多い。win-winとなるには企業より役所(行政)にもっと努力して欲しい。
- 産廃処理業界からもパネリストに出て欲しかった。
- ファンケルの取り組みに感銘しました→具体的だ！！地域、販売業者、メーカーなどの一同に集まった取り組みの大事さを思った。社内での環境学習が重要だと再確認しました。
- 企業、行政、地域といった様々な視点からの意見を聞くことが出来良かったです。
- Rの課題をうまく整理して対応の実態に触れることができた。
- 過去にこども環境活動のプログラム作りに関わらせていただきました。活動が拡大されていて素晴らしいと思います。
- ディスカッションのメンバーがもう2人、異なった業界から来られれば興味あると思いました。
- 新しい知識の取得ができました。
- 当社もこんな3R活動ができるのではと思われました。ディスカッションに行政の担当者も入って話して欲しい。
- こども環境活動支援協会の活動は素晴らしいと感じました。ファンケルの環境活動もよく解りましたのでファンケル製造を選ぶようにしていこうと思います。今日の話を生かして会社の行動の中で考えてみたい(小さなことから考える勇氣)
- 地域や企業が努力されているので自治体職員としてもっと社会貢献しなければと再認識できた。



## ●ご意見（パネルディスカッションについて）

- 3Rのうち、議論をしぼらないと拡散しています。「大阪」という位置づけを明確にしたほうが良いのでは？
- 3R推進の話を聞いて企業や行政のみでなく個人的にもゴミをできるだけ出さないようなことをもっと考えさせられた。
- 「3R推進」することで発生する環境への負荷(長期的にも)についての言求もあっても良かったのでは？
- 異なる立場の方々の諸意見を聞けるパネルディスカッションを今回、初めて目の前にしました。多角的に物事を考えることの重要性を改めて気づかされた思いです。
- 3名のパネラーのお話が大変有意義で遠い存在だと思い込んでいた内容がごくごく身近な事柄であると再発見することができました。
- 展開が広く集約するのが難しいと考えた。話は面白く良かった。協会の副会長が参加されなかったのは残念である。
- CSRは、社会貢献という責任でもあるが一企業の宣伝に終止するくらいがつよく、あまり参考にならなかった。
- 自分が取り組んでいる環境管理活動、ごみ減量、地球温暖化対策活動の参考になりました。
- パネラーの具体的な取り組みがわかり参考になりました。民間と行政の温度差が興味深かった。
- ファンケルさんの例など企業の3R取り組み事例を学ぶことができて良かった。
- わかりやすく、また今後に生かせるものであった。
- 北川さんの誘導は中々、うまかった。ファンケルの活動は少しは知っていたが驚いた。小川さん取り組みはNPOの偏見が少しゆるんだ。
- 特に西宮NPOの活動は地域の環境活動の見本になるものだと感じた。行政の方には耳の痛い話もありましたが協会としてなにか行動に移すきっかけになればよいと思います。
- 3Rだけのことでなく、それを活かせ、企業運営にもいいアドバイスも頂けた。いいディスカッションでした。
- パネリストの実績報告会のように、あまり汎用性のある内容ではなく、活用が難しい。
- 社員へファンケル様へ、物でつる方法はやめたらどうですか。弊社は旧年前から社員へ電気、ガス、水道などの使用料の削減を実施していますが特に何も返還はないです。
- 製造から廃棄物への循環の中で考えることが今後のテーマである。
- 基調講演と同様、同じメンバーでディスカッションをして頂くことにより、継続的な取り組みや変化が得られると考えます。
- ファンケルさんの「もっと何かできるはず」の言葉は3R推進のみにかかわらず、私たちにも念頭に置いて行動しなければ地域が活性するように思った。
- 進行もスムーズでパネラーの特徴もよくわかった。処理業者代表が欠席で非常に残念。
- このようなシチュエーションの話は初めての参加だったので新鮮でした。

## ● パネルディスカッションについて



## ● ご意見（パネルディスカッションについて）

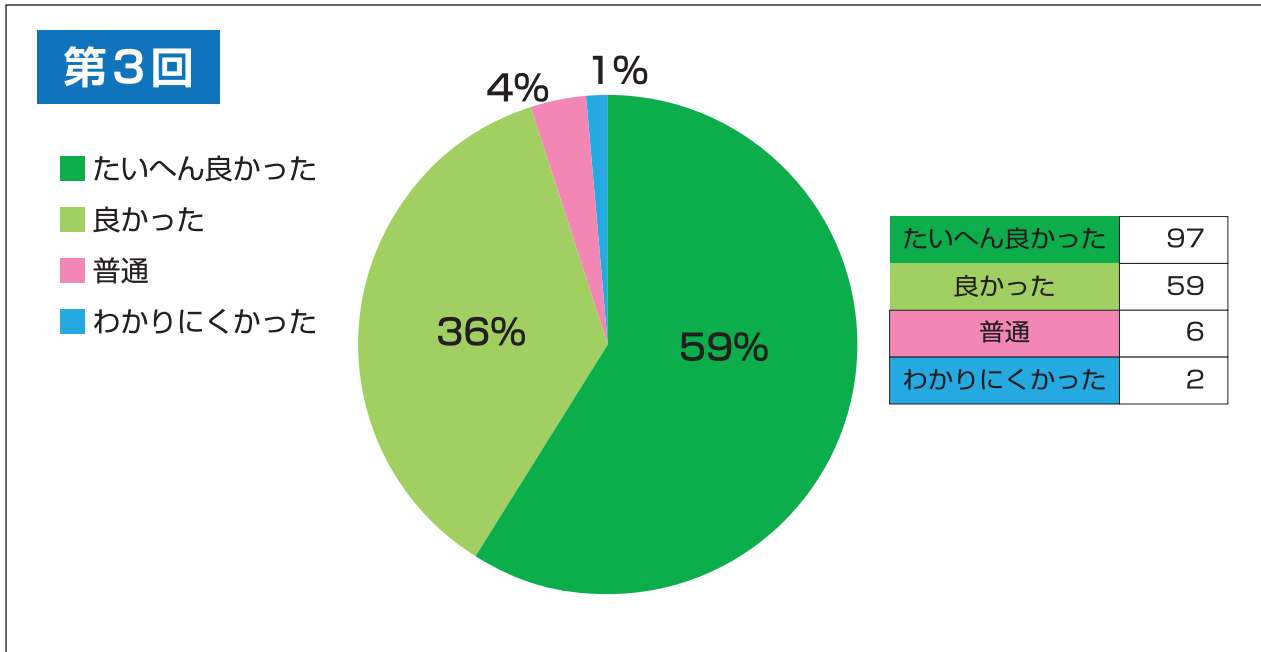
- 業務努力されているのが良くわかりました。自社にも持ち帰り自社なりに取り組んでもらえるように話をしようと思います。
- 米倉教授の歯にきせぬご意見番は良かったし勉強になった。CSVの取組みについて理解できてよかった。
- パネラーの本音トークが聞けた。SharedValueの創造について少しわかってきた。
- 他事業の3Rに対する思いが聞けてよい体験でした。
- 皆さんのお話をお伺がって、まだまだこれからですが、少しでも早い段階で小さな一歩でも進めていきたいと思いました。
- 実例を交えてのディスカッションでとても興味深かった。
- 太田氏の具体的事例を挙げての解説はイメージしやすい。赤澤氏の遺品整理事業の背景、経緯は興味深かった。⇒木場氏の意見に賛同しました。米倉先生の引き出しの多さが際立って良かった。
- パネラーに気遣いなく、本番の対応に面白味を感じた。企業の考え方が良く理解できた。
- 消費者の意識の低さを実感しました。
- パネリストの数が少なく良かった。発言が明確で分かりやすい。関西にコーディネーター、基調講演講師、パネリストはいないのか？
- 折角、会場に多くの参加者がいるのに質疑応答の機会がなかったのは非常に残念でした。
- 遺品回収事業は素晴らしい。キリンの話は、CSRなのかCSVなのか良くわからなかった。社会貢献はCSV？

## ●ご意見（パネルディスカッションについて）

- パネラーの発表内容が「3R」というテーマに対する紹介よりも、各企業のCSR、CSVの紹介にとどまっていたと思う。拍子抜けしました。パネラー企業の廃棄物の削減への取組みを紹介して貰えるものと思っていた。
- 社会的価値と経済的価値の矛盾についてどこで手を打つか。
- CSVに興味を持った。
- 赤澤社長の話を今までも何度か聞きましたが、魅力的な会社をつくられているなと思います。社員の方々と努力とやりがいの満足度が感じる話でした。
- 現在実施されている内容よりも、今後どうしていくかの話をもっとしてほしかった。今後の目標へのヒントに繋がる内容が少なかった。
- テーマ選定とその流れは良く練れていた。
- パネラーそれぞれの特色が出ているのと、幅広い内容が楽しめました。
- 企業として重要な事を再認識しました。
- 新野菜おつまみを実際に食べてみたい。料理方法も紹介してほしかった。おつまみと飲み物を1セットで売ってくれたら嬉しい。
- 具体的な企業事例が聞けて良かった。コーディネーターの進め方もテンポよく聞きやすかった。
- 各社の企業努力や問題に対して取組み姿勢等大変勉強になった。
- 木場さんの進め方とまとめが非常に良かった。米倉先生の話がユーモア交えて分かりやすかった。
- 米倉教授から弊社の商品、ならびにマーケティング(TVCMなど)色々ご指摘いただきましてありがとうございました。
- CSV、企業と社会の共有が進む現代、更なる共存を深めていくのが、企業の務めだと感じます。



## ● パネルディスカッションについて



## ● ご意見（パネルディスカッションについて）

- 地球レベルの話から一転、市民レベルの話が聞けて良かったです。持続可能な循環型社会のこれからのあり方を考えさせられました。
- 辛坊さんの巧みなMC力で、もっとリサイクル業界の光と影について教えてほしい。
- それぞれのお立場からの意見が大変参考になりました。大阪ガスの取組みもすばらしい。
- 色々勉強になりました。CSRから事業創成。
- 質問・実験・体験。現在NPOの理事もしていますが、NPOでこれらの場を提供できるように話を進めて行きたいです。
- コーディネーターの辛坊さんのメリハリのある捌きとパネリスト3名の説明や回答が分かりやすかった。
- 司会者と進行が良い、分かりやすかった。
- 身近なテーマだ、だったので、聞きやすかった。
- 生活、身近な話。今後どうなるか大変興味深く話が聞けました。太陽光パネルの廃棄について初めて知りました。
- パワーポイントを協会のHPでも公開してほしい。
- 色々な事例からのご意見が聞けてよかった。
- 浜田さんの事例の説明等、空論より処理の実態から廃棄物の未来が見えた。

## ●ご意見（パネルディスカッションについて）

- 3名のお話が大変興味深く楽しい時間となりました。
- 基調講演が、地球規模の話であり大変インパクトのある課題でしたが、パネルディスカッションでのサステイナブルな大阪という何か限定的なエリアのような話に聞こえてしまい、消化不良であった。ただしパネリスト3名のコメントなり、考え方には共感できる。
- フォーラムのテーマと、パネルディスカッションの内容にズレを感じました。あまり興味深い話は少なかったと思いました。
- 安井先生はパネラーでの話がぐちゃぐちゃで面白かった。
- 大阪ガスの事例が特に良かった。
- 時間をとり丁寧な説明がほしかった。
- コーディネーターの進行がうまく、分かりやすかった。
- 地域でどうあるべきかというテーマは、このようなフォーラムでしか出来ないテーマだと思う。
- ソーラーパネルのリサイクルについて詳しく説明があったので、分かりやすかったです。
- 辛坊さんが、「静脈産業」という言葉を知らなかった事、静脈産業が捨てる時のことまでも考えていて、商品開発をしていない事を知らなかった事がすごく印象的でした。良い意味で、もっと廃棄物業界からの発信をしていかなければと感じました。

## 第1回

## ●来年も本フォーラムに参加したいと思いますか？

はい	176	いいえ	5
----	-----	-----	---

## ●次回以降に取り入れてほしい課題やテーマなど自由にご意見をお聞かせください。

- 日本と発展途上国の3R
- 廃掃法の課題、矛盾など廃棄物業界で困っていることなどを取り上げて欲しい。改善策や意識の常用の端になるようなテーマ
- ①講演もパネルディスカッションももっと視聴覚(見える化)を活用しながらのものにしてほしい(ファンケルさんのみだった)②他国の3Rの取り組み例を映像で紹介して欲しい。又、他社事例を多くパネルディスカッションに！
- 廃棄処理技術(最先端)リサイクル技術処理後の再生物の活用法・リサイクル物の社会への貢献度、市場実態・廃棄施設での事故、原因とリスク対策。
- 廃棄物を資源に転換された種々の事例など
- 産廃由来の再生エネルギーが原発をなくすることができるか？
- 内容をもう少し踏み込んだものにして欲しい。現状の環境問題に対するパネルディスカッションをして欲しい。
- 経済的実利の検証※環境分野の角度から。
- ファンケルの取り組み内容の話が良かった。色々な業種の会社の色々な3R活動を紹介して欲しい。
- 中小企業、特に零細企業における産業への取り組み課題と行政のあり方(求められている施策)について是非お話がして欲しい。
- 原発により発生する廃棄物に関する講義も企画していただきたいと思います。
- 容器包装リサイクル法について排出(容器製造利用)企業、再生業、NPO、行政、市民の意見をきかせていただきたいです。
- 紙ゴミの再資源化への取り組みについて。
- 産業廃棄物協会と各自治体と各企業の具体的な取り組み内容。
- 実績者である田中氏の欠席がなにか核のないパネルとなった。次回是非取りまとめ役としても参加して欲しい。
- 講演とディスカッションの内容を冊子にして欲しい。自治体に配布(有料でよいから)することを検討して欲しい。その中に参加自治体名、企業名を各人数も入れて欲しい。
- 廃棄物管理士の発展(資格種の増)資格者増加を図ると共に環境問題の意義向上に結実するのでは？諸外国の環境資格について。
- 廃棄事業者の現実、実態講演をお願いしたい。
- 3Rの中でも特にReuseが促進されるような社会形成について議論されるようなフォーラムを開催して欲しい。
- 家庭ごみの分別。分別が必要でない地域があったりとどうなっているのかわからない。
- 企業が3Rを推進させる為の具体的なインセンティブについて、社員へのアプローチ、意識改革の方法など企業内の3Rについてアイデアをききたい。
- 持続可能なまちづくり。地域に根ざした3R。
- 廃棄物の向かう方向、処理業が今後どのように変わっていくのか。
- 実際に現在の産廃状況などを詳しく知りたい。
- 総論的な話が多かったので、もっと具体的な事例を取り扱って欲しい。



## 第2回

### ●来年も本フォーラムに参加したいと思いますか？

はい	172	いいえ	3
----	-----	-----	---

### ●次回以降に取り入れてほしい課題やテーマなど自由にご意見をお聞かせください。

- 地域密着の廃棄物に対するの適正処理。
- 企業がごみを減らす活動を行っているが、その結果どう社会に変化が起きているかの具体例等、公表してほしい。
- ゴミ分別の効率化や取組み(具体策)について。
- 今後とも「がれき類」の処分量増大が見込まれますが、リサイクル品の需要は平行線です。防災事業を含めて、より一層の需要像が必要です。
- 再生可能エネルギー廃棄物から(バイオマス)事業可能性の観点から～をテーマに。
- 3Rに対する考え方又見方が変わりました。ためになりました。
- 放射能と放射線
- 環境問題の意識を変えるような講演を期待します。身近な環境情報を広める。
- 産業廃棄物業界が民間事業として目指す新しいビジネスモデル。集合体として海外展開はどうか？
- 生物多様化活動の紹介、3Rに繋がるような事例の紹介。
- 将来、想定される大災害に対して発生する災害廃棄物に対して処分先、方法等関西全域に対するの対策について安全、迅速、確実に行政・民間・大学等の総合した対策。
- 産廃業の本質を広く知らしめる企画。
- 新エネルギー推進と産廃物処理について。当社にとっても大いに参考になるフォーラムであったと思います。
- 各種リサイクルの話
- バイオによるごみ処理。早稲田のVR関連を米倉先生に話してほしい。
- 主催の社団法人加入の各企業様の取組み状況(CSV等)を紹介していただける時間もしくは書類があればありがたいです。

## 第3回

## ● 次回以降、本フォーラムがあれば参加したいと思いますか？

はい	163	いいえ	1
----	-----	-----	---

## ● 次回以降に取り入れてほしい課題やテーマなど自由にご意見をお聞かせください。

- 廃棄物における事故、困難な処理物質、悪徳業者排出者等を取り上げてほしい。
- リサイクルが進んでおりますが、フーズバンクも進められると思います。
- 大阪の独自性を活かしたゴミの処分の仕方をできれば、世界に発信できるのではないのでしょうか。
- 環境市場の今後の展望。
- 3回続けて参加しました。全て良く出来たフォーラムでした。
- 先進国の3R取組みについて。
- 企業対応として利益が出て社会貢献できる方法。企業の未来展開と今の対応方法。
- 地域と共同活動。
- 生産業者の使用済品の回収の取組みについて。
- 地域に根ざした地道な活動が大きなムーブメントとなってきていることをとても素晴らしいと思います。何らかの貢献をしていきたいと思っています。
- 聴衆からの質問時間がほしかった。
- パネルディスカッションをお聞きし、とても勉強になりました。また参加したいと思います。
- ダイオキシン除去、建設物産業問題、3Rの国際比較。
- 生物多様性。産業廃棄物。





## ■A 4チラシ

### ■第1回 1800部



表面

第1回 地球環境保全のための  
**3R推進フォーラム**

**お申込方法**

インターネットからお申し込みの場合  
下記URL又は、右のQRコードからWEBサイトへアクセスし、  
必要事項を申し込みフォームへ入力してお申し込みください。  
申込サイトURL: <https://form.mu-ses.com/3r/>

おハガキでお申し込みの場合  
下記内容をご記入の上、3R推進フォーラム運営事務局へお送りください。  
〒590-0112 大阪府堺市東区南1丁目4番10号 3R推進フォーラム 運営事務局 宛

お申し込み用紙に記入する項目

(ふりがな)	フリガナ	性別
氏名		男
会社名		
住所		
電話番号		
ご同行者	氏名	性別
	氏名	性別
	氏名	性別

〒590-0112 大阪府堺市東区南1丁目4番10号 3R推進フォーラム 運営事務局 宛  
FAX.050-6864-7226

裏面

## ■参加証 ハガキサイズ

### ■第1回 500部



裏面



表面

### ■第2回 5100部



表面

第2回 地球環境保全のための  
**3R推進フォーラム**

**お申込方法** 申込受付期間:11月24日(日)

インターネットからお申し込みの場合  
下記URL又は、右のQRコードからWEBサイトへアクセスし、  
必要事項を申し込みフォームへ入力してお申し込みください。  
申込サイトURL: <https://form.mu-ses.com/3r/>

お申し込み用紙に記入する項目

(ふりがな)	フリガナ	性別
氏名		男
会社名		
住所		
電話番号		
ご同行者	氏名	性別
	氏名	性別
	氏名	性別

〒590-0112 大阪府堺市東区南1丁目4番10号 3R推進フォーラム 運営事務局 宛  
FAX.050-6865-6067

裏面

### ■第2回 400部



裏面



表面

### ■第3回 5500部



表面

第3回 地球環境保全のための  
**3R推進フォーラム**

**お申込方法** 申込受付期間:11月24日(日)

インターネットからお申し込みの場合  
下記URL又は、右のQRコードからWEBサイトへアクセスし、  
必要事項を申し込みフォームへ入力してお申し込みください。  
申込サイトURL: <http://muses-3r.com>

お申し込み用紙に記入する項目

(ふりがな)	フリガナ	性別
氏名		男
会社名		
住所		
電話番号		
ご同行者	氏名	性別
	氏名	性別
	氏名	性別

〒590-0112 大阪府堺市東区南1丁目4番10号 3R推進フォーラム 運営事務局 宛  
FAX.050-6865-7880

裏面

### ■第3回 500部



裏面



表面





■ホームページ制作

申込みフォームには個人情報漏洩防止の対策として暗号化フォームを採用。



■フェイスブックページ制作



付属資料

大阪マラソン廃棄物回収車用横断幕

エコな「おもてなし」実施中!!

公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会

3R推進プロジェクト

サンパイきょうかい

大阪産廃協会

www.o-sanpai.or.jp

検索

エコな「おもてなし」実施中!!

公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会

3R推進プロジェクト

サンパイきょうかい

大阪産廃協会

www.o-sanpai.or.jp

検索

# 地域における3R社会の未来

## (地球環境保全のための3R推進フォーラム実施報告書)

---

発行日：平成28年11月1日

発行所：公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会

住 所 〒540-0011 大阪市中央区農人橋1-1-22 大江ビル3F

電 話 番 号 06-6943-4016

F A X 番 号 06-6942-5314

U R L <http://www.o-sanpai.or.jp/>

発行人：会 長 片 渕 昭 人

法政策調査委員長 赤 澤 健 一

編 集：公益社団法人 大阪府産業廃棄物協会

定 価：1,500円(税込み)

複写・転写を禁じます。

公益社団法人大阪府産業廃棄物協会  
<http://www.o-sanpai.or.jp/>